

勝本町文化財調査報告書第3集

# カラカミ遺跡

—範囲確認調査報告書—



1985

長崎県勝本町教育委員会

〔表紙写真〕カラカミ遺跡出土漢式土器

昭和58年度の調査で勝本町立石東<sup>上</sup>触字川久保  
583-1の調査で弥生時代後期・銅鑿先・鯨骨製  
フグシ形骨器等に伴って出土した。上下高26cm。

勝本町文化財調査報告書第3集

# カラカミ遺跡

— 範囲確認調査報告書 —

1985

長崎県勝本町教育委員会

## 発刊にあたり

遺跡「カラカミ」は弥生全期に亘り古代日本民族の生活を知るに極めて貴重な民族資料であり、日本人のもつ固有の文化遺産といえる。

この遺跡は大正7・8年頃発見、昭和27年東亜考古学会によって第一の発掘が行われ、昭和52年九州大学考古学研究室が再び調査発掘を行っているが、昭和57年～昭和59年に本町と長崎県教育委員会が調査発掘するに至り、遺跡「カラカミ」の全容が明らかにされたことは日本の古代史に一頁を飾るものとして、まことに同慶にたえない次第である。それはV字形の溝・U字形の溝など、また、土竹をはじめとする出土品の内容は日本民族の弥生全期を知るに極めて重要な鍵を発見したと言える。

あくなき探究者の永年の努力により、ここに、遺跡「カラカミ」が陽の目をみたことは、まことに素晴らしい限りである。この報告書はその調査結果をまとめたものであり、本書が今後の日本の考古学界ならびに研究者の資料として活用いただければ幸甚である。

最後に、発掘にあたり、ご援助・ご協力いただいた諸賢に深甚の敬意を表する。

昭和60年3月

勝本町長 菅 田 一 郎

## 発刊にあたり

勝本町は壱岐島の北端にあり、古来より大陸文化の日本への流入の中継地となっていました。このことは、町内一円から縄文時代・弥生時代・古墳時代などの遺物が数多く発見されることからもうなづけます。

特に今回調査が行われたカラカミ地区からは大正初年に地元の碩学・故松本友雄氏によって土器・鉄器・青銅器・骨角器などが表採され、同氏によってカラカミ遺跡の存在が日本考古学界に公にされています。

昭和56年、カラカミ地区一帯の圃場整備事業計画が具体化し、その計画区域内にカラカミ遺跡の一部が入っておりました。そのため、関係の方々のご協力をえて、昭和57年より3ヶ年にわたって、カラカミ遺跡の範囲確認と計画区域内の埋蔵文化財の包蔵状況を知るためにカラカミ地区一帯の緊急発掘調査が行われました。

その結果、カラカミ遺跡の一廓からU字溝を検出し、また、日本ではじめての発掘作業中のト骨の出土という輝かしい成果をあげ、カラカミ遺跡の重要さを益々認識することとなりました。

今回の調査が地域の方々のをはじめ勝本全町民の埋蔵文化財に対する関心と理解を深め、その保存につとめながら、さらに、より良い勝本町の町づくりにご協力下さることを確信いたすものです。

最後に、今回の調査にあたり、深いご理解とご協力を下さった壱岐北部土地改良区関係者の皆様、各地主の方々、ならびに長期にわたる本調査にご幸労をかけ、数々のご教示をいただきました長崎県文化課の方々、とくに、正林護・安楽勉・宮崎貴夫の三氏に衷心より感謝を申しあげます。

昭和60年3月

勝本町教育長 中川末美重



カラカミ遺跡遠景（東側から）



W 4 区 3 層遺物出土狀況



▲W4区3層の土器①

▼W4区3層の土器②





▲W4区3層の土器③

▼W10区方形土壇出土の土器



▶ W15区6層出土の土器



▼ W15区出土の卜骨



## 例 言

1. 本書は、長崎県杵岐郡勝本町立石東麓にあるカラカミ遺跡に関する、遺跡範囲等の確認調査報告書である。
2. 調査は、昭和57～59年度に国庫および県費補助を得て勝本町教育委員会が実施したが、立石東地区における県営圃場整備事業区と同遺跡とのかかわりの無の把握、カラカミ遺跡の範囲等の把握を目的として実施した。
3. 調査は、現地段階で長崎県教育庁文化課正林護（指導主事）・安業勉（文化財保護主事）・宮崎貴夫（同）・須藤資隆（勝本町教育委員会）が担当し、西谷正（九州大学助教授）・石丸太郎（長崎県文化財保護審議委員会委員）両氏の指導助言を得た。
4. 調査現地での写真撮影・遺構等実測は上記4名が担当し、整理段階での諸作業は正林と宮崎が行った。
5. 本書の執筆と編集は正林と宮崎が行ったが、執筆者は各項の末尾に記した。
6. 本書は諸般の都合で速報的な内容となったが、近い将来詳報の予定である。
7. 調査の図表・写真類・遺物は昭和60年3月現在、長崎県文化課立山分室に保管している。

## 例 言

1. 本書は、長崎県杵岐郡勝本町立石東触<sup>せん</sup>にあるカラカミ遺跡に関する、遺跡範囲等の確認調査報告書である。
2. 調査は、昭和57～59年度に国庫および県費補助を得て勝本町教育委員会が実施したが、立石東地区における県営圃場整備事業区と同遺跡とのかかわりの有無の把握、カラカミ遺跡の範囲等の把握を目的として実施した。
3. 調査は、現地段階で長崎県教育庁文化課正林護（指導主事）・安楽勉（文化財保護主事）・宮崎貴夫（同）・須藤資隆（勝本町教育委員会）が担当し、西谷正（九州大学助教授）・石丸太郎（長崎県文化財保護審議委員会委員）両氏の指導助言を得た。
4. 調査現地での写真撮影・遺構等実測は上記4名が担当し、整理段階での諸作業は正林と宮崎が行った。
5. 本書の執筆と編集は正林と宮崎が行ったが、執筆者は各項の末尾に記した。
6. 本書は諸般の都合で速報的な内容となったが、近い将来詳報の予定である。
7. 調査の図表・写真類・遺物は昭和60年3月現在、長崎県文化課立山分室に保管している。

# 本文目次

I	カラカミ遺跡周辺における確認調査実施に至った経過および目的	1
II	カラカミ遺跡の地理的歴史的環境	4
III	圃場整備地区の調査	7
IV	カラカミ遺跡の確認調査	15
1.	カラカミ神社北辺の調査(字国柳地区)	15
(1)	位置と地形	15
(2)	調査区の設定	15
(3)	土層と遺物出土状況	15
(4)	遺構	21
(5)	遺物	22
○土器		22
○石器		22
○金属器		23
○自然遺物		23
(6)	まとめ	23
2.	カラカミ神社東辺の調査(字川久保地区)	35
(1)	位置と地形	35
(2)	調査区の設定	35
(3)	土層と遺物出土状況	35
(4)	遺構	56
(5)	遺物	56
○土器		56
○石器		59
○金属器		60
○装飾品および土製品		60
○骨角器および自然遺物		61
(6)	まとめ	61
V	結語	150

## 挿 図 目 次

第1図	志岐島位置図	
第2図	志岐島およびカラカミ遺跡・原の辻遺跡位置図	3
第3図	宇国柳地区(略記号K)の地形および調査区実測図	16
第4図	K1～3区遺構実測図	17
第5図	K4・5区遺構実測図	19
第6図	字川久保地区(略記号W)の地形および調査区実測図	36
第7図	W4～8区土層断面図	36
第8図	W3・4区3層遺物出土状況図	38
第9図	W4区4層遺物出土状況図	39
第10図	W4区東壁断面図	40
第11図	W4区北壁土層図	41
第12図	W5区遺物出土状況図	42
第13図	W5区土層断面図	43
第14図	W6区土層断面図	43
第15図	W6区遺物出土状況図	44
第16図	W7区遺物出土状況図	45
第17図	W7区土層断面図	46
第18図	W8区土層断面図	46
第19図	W8区遺構実測図	47
第20図	W10・10補完区遺物出土状況図	49
第21図	W10・10補完区遺構実測図	50
第22図	W12区土層断面図	51
第23図	W14区土層断面図	51
第24図	W15区遺物出土状況図	52
第25図	W15区遺物出土状況図	53
第26図	W16区遺物出土状況図	54
第27図	W16区遺構・土層実測図	55
第28図	W17区土層断面図	55
別添図1	勝本町内遺跡(古墳時代以前)分布図	
別添図2	カラカミ遺跡および周辺における調査と知見図	

## 表 目 次

第1表 勝本町内遺跡分布図

第2表 カラカミ遺跡に関する知見および調査一覧

## 図 版 目 次

図版1	鯨伏地区の調査 1. 遠景, 2. 地鎮祭	9
図版2	間瀬地区の調査 1. 遠景, 2. M1区北壁土層	10
図版3	カラカミ地区の調査 1. 遠景, 2. 調査風景	11
図版4	1. R6区出土状況, 2. R20区北壁土層	12
図版5	昭和57年調査出土遺物およびカラカミ周辺表面採集資料 1. R6区, 2. R20区, 3. R14区, 4. カラカミ周辺表面採集	13
図版6	カラカミ地区出土石器	14
図版7	K区大溝検出状況	25
図版8	大溝遺物出土状況	26
図版9	大溝検出状況 1. 下部遺物出土状況, 2. 完掘状況	27
図版10	大溝土層断面 1. 南壁, 2. 北壁	28
図版11	K4・5区大溝上面検出状況	29
図版12	K区大溝出土土器	30
図版13	K区大溝出土土器	31
図版14	K区大溝出土土器	32
図版15	K区大溝出土土器	33
図版16	K区大溝出土石器, 鉄器, 土器	34
図版17	1. 川久保地区遠景, 2. 調査風景	63
図版18	1. エボシ様の地鎮祭, 2. W4区発掘風景	64
図版19	1. 見学風景, 2. 農林サイドとの協議風景	65
図版20	W4区3層遺物出土状況	66
図版21	W4区3層遺物出土状況	67
図版22	W4区3層遺物出土状況	68
図版23	W4区遺物出土状況 1. 4層獣骨出土状況, 2. 東壁	69
図版24	W4区4層遺物出土状況	70
図版25	W4区4層遺物出土状況	71
図版26	W4区4層遺物出土状況 (鯨骨製品など)	72

図版27	W4区完掘状況 1. 北壁など, 2. 東壁	73
図版28	W5区3層遺物出土状況 1. 銅鏃など, 2. 骨鏃	74
図版29	1. W5区東壁土層, 2. 同5層遺物出土状況	75
図版30	1. W6区北壁土層, 2. 同4層遺物出土状況	76
図版31	W6区5層遺物出土状況	77
図版32	1. W7区北壁土層, 2. 4層遺物出土状況	78
図版33	1. W8区北壁土層, 2. 同検出状況	79
図版34	1. W8区検出状況, 2. W9区検出状況	80
図版35	W10区58年度調査竈 1. 東壁, 2. 北壁	81
図版36	W10区58年度調査方形土壇	82
図版37	W10区58年度3層遺物出土状況	83
図版38	W10区59年度3層遺物出土状況	84
図版39	W10区59年度4層遺物出土状況	85
図版40	W10区59年度4層遺物出土状況	86
図版41	W10区59年度遺物出土状況 1. 4層遺物, 2. 5層遺物	87
図版42	W10区方形土壇	88
図版43	W10区方形土壇遺物出土状況	89
図版44	1. W12区北壁土層, 2. 同3層遺物出土状況	90
図版45	W14区土層断面 1. 東壁, 2. 北壁	91
図版46	W14区3層遺物出土状況 1. 東から, 2. イノシシ下顎骨	92
図版47	W15区3層遺物出土状況	93
図版48	W15区3層遺物出土状況	94
図版49	W15区卜骨出土状況	95
図版50	W15区3層遺物出土状況 1. 獣骨など, 2. ヤス状骨角器	96
図版51	W15区3層遺物出土状況 1. 切目石鏃, 2. ヘラ形骨角器	97
図版52	W16区土層壁面 1. 北東壁, 2. 南東壁	98
図版53	W16区5層遺物出土状況 1. 方柱状磨製石斧, 2. 獣骨など	99
図版54	W4区58年度出土土器	100
図版55	W4区58年度出土土器	101
図版56	W4区58年度出土土器	102
図版57	W4区58年度出土土器	103
図版58	W4区58年度出土土器	104
図版59	W4区58年度出土土器	105
図版60	W4区58年度出土土器	106

図版61	W4区58年度出土土器	107
図版62	W4区59年度出土土器	108
図版63	W4区59年度出土土器	109
図版64	W4区59年度出土土器	110
図版65	W4区出土船載土器・文様のある土器	111
図版66	W6区出土土器	112
図版67	W6・7区出土土器	113
図版68	W7区出土土器	114
図版69	W10区出土土器	115
図版70	W10区出土土器	116
図版71	W10区出土土器	117
図版72	W10区出土土器	118
図版73	W10区方形土壇出土土器	119
図版74	W10区方形土壇出土土器	120
図版75	川久保(W)地区出土船載土器・文様のある土器	121
図版76	W12・14区出土土器	122
図版77	W10・12・16区出土土器	123
図版78	W15区出土土器	124
図版79	W16区出土土器	125
図版80	W4区58年度出土石器	126
図版81	W4区58年度出土石器	127
図版82	W4区59年度出土石器	128
図版83	W4区59年度出土石器	129
図版84	W4区59年度出土石器	130
図版85	W5・6区出土石器	131
図版86	W6区出土石器	132
図版87	W7・10区出土石器	133
図版88	W10区58年度出土石器	134
図版89	W10区出土石器	135
図版90	W10区出土石器	136
図版91	W10区出土石器	137
図版92	W10区方形土壇出土石器	138
図版93	W10区方形土壇出土石器	139
図版94	W12・14区出土石器	140

図版95	W12・15・16区出土石器	141
図版96	川久保(W)地区出土遺物	142
図版97	川久保(W)地区出土鉄器	143
図版98	W4区59年度出土鯨骨製品・W5区出土骨角器	144
図版99	W10区方形土壇出土板状鯨骨製品	145
図版100	W15区出土ト骨	146
図版101	W15区出土骨角器および獣魚骨	147
図版102	沓岐カラカミ遺跡出土骨角器①(福田敏氏資料)	148
図版103	沓岐カラカミ遺跡出土骨角器②(福田敏氏資料)	149



第1図 老岐島位置図

## I カラカミ遺跡周辺における確認調査実施に至った経過および目的

昭和56年、嵯峨郡勝本町において広汎な水田部に対する圃場整備事業計画がなされた。同町の南部にある立石東麓地区においても計画が進められ、同事業番号⑬立石地区3.2ha、⑭大地地区10ha、⑮間頭地区6.3ha、⑯川久保地区2.1ha、⑰唐神地区1.3ha、計22.9haの水田について圃場整備が昭和59年度から実施されることになった。これらの地区は、同町南隣の郷ノ浦町との町界をなす刈田院川とその支流に潤される一帯であり、従前カラカミ遺跡として知られるカラカミ（唐神・香良加美）神社のある高台と周辺畑地を取り囲む状態の計画策定であった。

一方カラカミ遺跡は大正時代以降、地元における考古学の先達松本友雄氏等による調査で知られ、昭和10年代における橋田忠正氏の調査、戦後における東亜考古学会の調査、昭和52年における九州大学の調査等によって多くの重要な発見がなされていた。以上の諸調査以外にも遺物出土について多くの知見があり、その範囲は広大であった。長崎県では、県下における重要遺跡としての取扱を検討中であったが、保存の対象とすべき同遺跡の範囲については今一步不明な点があった。

昭和56年、前述の圃場整備計画が公表され、カラカミ遺跡のひろがりや早急に把握して事業計画との間を急ぎ調整する必要が生じた。勝本町教育委員会と同町農政部局（耕地課）は県教育委員会と協議をもち、文化財サイドにおいて早急に事業計画区域内における遺跡の包蔵状態の存否について確認調査を行うこと、農政サイドは、カラカミ遺跡周辺地区における事業年度を昭和58年度まで見合わせることで意見の一致をみた。

カラカミ遺跡および周辺地区における範囲確認調査は、昭和57～59年度に国庫補助を得て勝本町教育委員会が事業主体となって実施され、県教育委員会文化課職員が調査を担当して実施したが、第一には前段の圃場整備事業区内における遺跡包蔵地の存否確認であり、第二にはカラカミ遺跡として保存すべき遺跡範囲の確認、以上2点を目的として実施した。調査は、昭和57年度は4月12日～同月28日（17日間）、10月20日～11月12日（24日間）、昭和58年度は4月11日～同月28日（18日間）、10月17日～同月31日（15日間）、昭和59年度は7月23日～8月12日（21日間）実施し、延日数は95日間に及んだ。この間に、発掘した試掘壕は91箇所、のべ605㎡である。この間、多くの機関、個人の方々に直接・間接に援助と協力をいただいた。その芳名は次のとおりであるが、3箇年にわたる調査はこれらの方々に負うところが大きく、本稿をかりてお礼申し上げる。（正 林）

(調査関係者)(敬称略)

**勝本町教育委員会** 中川末美重(教育長)・長山禎三(教育次長)・前峰義考(前任教育次長)・  
園田省三(学校係長)・西村諒人(前任学校係長)・斉藤和秀(前任事務吏  
員)・山口敬郎(派遣社会教育主事)・鳥巢修(社会教育主事)・国見義巨  
(同)・須藤資隆(事務吏員)

**勝本町役場** 吉永正雄(農林課長)・今出利平(農林課耕地係長)・斉藤茂夫(前任耕地係長)・  
現建設課建設係長)

**長崎県教育委員会** 辻田肥佐雄(文化課長)・正林護(文化財指導主事)・安楽勉(文化財保護  
主事)・宮崎貴夫(同)

**調査指導者** 石丸太郎(長崎県文化財保護審議会委員)・西谷正(九州大学助教授)

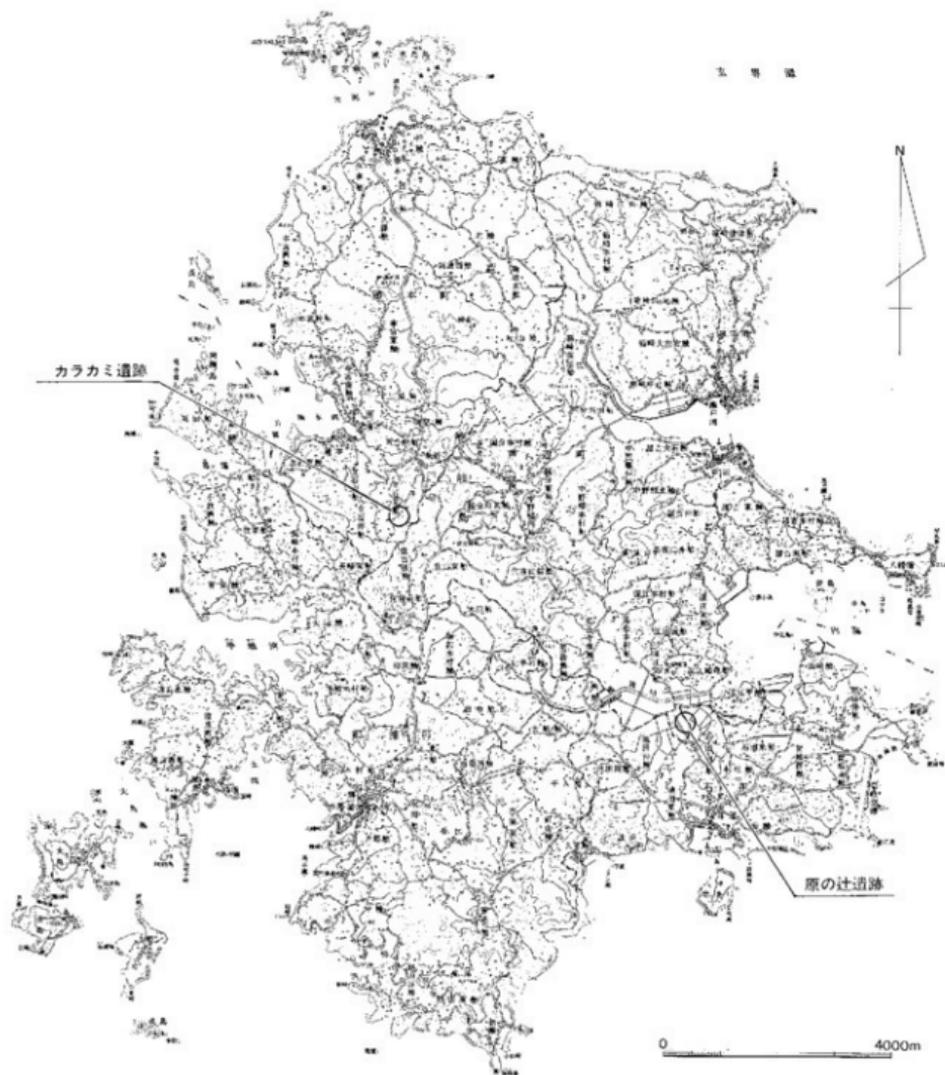
**長崎県壱岐支庁・長崎県壱岐教育事務所**

**壱岐北部土地改良区** 内野延晴(理事)・松永功(同)・松本博敏(監事)

**遺跡範囲確認地域地主** 浦富重之・小川純一・大西清美・川久保敏之・川崎ノブ・久保昭・重  
井正富・白川光乃・福田宗利・福田隆

**地元協力者** 植山義弘・浦富治夫・大西清美・大野伸代・白川光乃・山内昇・横山順(壱岐  
郷土館長)

**調査協力者** 浦川昇・大曲重義・久保昭・永元憲治・平田勝・福田隆・福田征臣・福田宗利・牧  
山健一・松川秀義・松永克二・松永泰彦・松永康光・山本和利・山本正幸・横川陽  
治・浅山延子・阿田日出子・内野喜美江・浦川勝子・浦川ユミ子・浦富千代子・  
大久保アヤメ・大久保トヨカ・峠谷チサコ・小松暢子・斎藤スズ子・坂本みさの・  
坂本ヤス子・篠崎ヨシミ・下條アツ子・品川石代・品川カネ子・品川信子・品川  
百合子・白川文子・白川道代・立石静子・立石靖子・辻年子・豊坂みよ子・上肥  
松代・中上八重子・中原ミサヲ・中原ミヨ子・永田タケ・永田照子・西村菊代・  
西村喜美子・畑原スズヨ・原田重子・平本京子・深田初枝・鉢林マス子・牧山滝  
子・松尾ヒトミ・松熊多美子・松熊鶴子・松永孝子・松本キヨ子・松本サダ子・  
村田静代・山内勝子・山川八重子・山本孝子・吉田松子・吉野文子・米倉文代



第2図 志岐島およびカラカミ遺跡・原の辻遺跡位置図

## II カラカミ遺跡の地理的歴史的環境

勝本町など、沓岐郡4町を擁する沓岐島は、九州島の北西海上玄界灘に浮かぶ長崎県の離島である。九州島から沓岐島への距離は福岡県博多港から67km、佐賀県の北部海岸呼子港から26kmを計り、対馬島（長崎県上・下県郡）との海上距離は68kmである。沓岐島への船便は博多港と呼子港から通じ、空路は福岡県板付空港、長崎県大村空港から通じている。沓岐島は総面積139.24km<sup>2</sup>を計り、島の東西約15km、南北約17kmの平坦な島である。海岸が屹立し、500m以上の山が8座をかぞえる対馬の男性的地貌に対し、沓岐島は100m以上の標高域はせまく最高所の岳ノ辻でも213mにすぎず女性的な島の姿をもつ。島全体が丘陵性の玄武岩台地で火山性の島である。島の分水嶺はやや西に片寄り、西海岸は屹立する箇所もあるが東海岸は砂浜になっている部分もある。島のほぼ中央を幡鉾川が東に流れておりその流域は県下最大の沖積地になっていて、後世の干拓による県中部の諫早平野を除けば県下最大の水田地帯となっている。この幡鉾川流域には有名な原の辻遺跡がある。

勝本町は、沓岐島の北西部を占め、総面積30.42km<sup>2</sup>を擁している。町の主邑は北岸の勝本浦で密集度の高い漁業集落を形成している。浦の北辺に辰ノ島・若宮島、名島島がならび、天然の防波堤の役割を果たして、勝本浦を良好な漁港ならしめている。町の海岸線は比較的単調であるが、西岸には湯ノ本湾に立地した湯ノ本漁港があり、湾口に多くの岩礁島があってここも良港の条件を有している。湯ノ本湾の支湾が片笛湾であるが湾奥には同町最大の刈田院川が注ぎ、南隣郷ノ浦町との町界を画している。刈田院川は深い谷を形成して東から西に流れており、同河川の河口から約1kmの上流北岸の高台にカラカミ遺跡がある。一方、町の東界近くを沓岐島唯一の国道382号線が南北に走り郷ノ浦と勝本浦を結んでいる。カラカミ遺跡に至るには、国道の亀石交差点から西に走る町道跡打線を、約1kmたどればよい。亀石交差点は国土地理院5万分の1図等にも記されているが遺跡方面へはバスなどの便はなく、脇道も多いが、道路は整備されており亀石交差点から20分程の徒歩距離である。その際は「立石東麓のカラカミ神社」とたずねるとよい。

カラカミ遺跡は正しくは長崎県沓岐郡勝本町立石東麓字カラカミ・川久保・岡柳（四龍と書かれることもある）の三字にまたがっている。立石東麓は勝本町の東南辺にあり南は刈田院川を隔てて同郡郷ノ浦町長峰東麓に、東は同郡芦辺町住吉東麓に近い。一帯は複雑な起伏をもつ70~80m程度の玄武岩丘陵地帯である。遺跡の名前は、前述の字地にある香良加美神社に由来しており、唐神・カラカミとも当てている。香良加美神社は標高80m程度の小規模な高台にあり、周辺は多く畑地に利用されている。神社域からは昭和40年代に磨製石剣が出土し、地元の大野伸代氏宅に保存されているが、従前の遺物等出土に関する知見と調査はすべて神社のある

高台周辺において行われている。香良加美神社をのせる高台とその一帯の丘陵は東西と南を水田地帯のある沢によって区切られ、遺跡の境界をなすと考えられるが遺物出土に関する従前の知見は以外の区域に及んでいない。

カラカミ遺跡に関する知見は古く、大正期における地域考古学の先達松本友雄氏にはじまっている。杵岐島弥生時代遺跡をカラカミ遺跡とともに代表する原の辻遺跡（芦辺・石田町）に関する知見についてもほぼ同様である。この両遺跡に関する知見と調査は、対馬とともにその歴史的位置を重視させる結果となったが、一方では両島の縄文時代と先土器時代に関する知見と調査は最近に至るまでもちこされた。

カラカミ遺跡を含めた勝本町内においても近年弥生時代以前の遺跡遺物の発見があっており、杵岐島においても本土との密接な関連の中で先土器時代以来推移してきたことが明らかになりつつある。カラカミ遺跡においても今回調査のW10区においてナイフ形石器の発見があり、カラカミ遺跡西辺の雁柳地区において、土地の研究者福田敏氏が表面採集された黒曜石資料の中に細石刃核がある。また、同氏の表面採集資料の中には黒曜石製の剥片鏃や縦長剥片があり、縄文時代後晩期の遺跡が今後発見される可能性が高い。杵岐島の縄文時代遺跡については、郷ノ浦湾における遺物の発見が著名であり、郷ノ浦町内の杵岐郷上館に蔵されているが、昭和59年に長崎県教育委員会が同湾の港湾整備事業に関して実施した名切遺跡の調査<sup>№1</sup>においては縄文時代中期以降の貯蔵穴や多数の漁撈遺物が検出されている。勝本町内においても、西岸の湯ノ本港の水底から縄文時代前期燧石土器等が発見され、西北九州海岸に比較的種類の多い水底遺跡の存在が暗示されている。また、前述の名切遺跡において、縄文晩期の磨研鉄鉢土器や突帯文壺形土器が検出されており、従前知見に乏しかった稲作文化受容ないしその前夜の時期に関する資料が得られたことは重要な示唆を与えている。このことは、従前空白状態であった杵岐島における弥生時代前期から同中期前半の時期、つまりカラカミ・原の辻遺跡前夜の様相を示す遺跡遺物発見の可能性を暗示しているともいえよう。

杵岐島を代表する弥生時代遺跡としてカラカミ・原の辻遺跡が挙げられるが、いずれも弥生時代中期後半から後期前半の遺跡であることが広く知られている。原の辻遺跡は、杵岐島を東西に流れ、東岸の芦辺に注ぐ幡鉾川南岸の低丘陵に立地している。原の辻遺跡の調査研究は、戦前における松本友雄<sup>21,3</sup>・山口麻太郎氏<sup>21,4</sup>と杵岐中学奉職の柳田忠正氏<sup>21,5</sup>、戦後における水野清一<sup>21,6</sup>・岡崎敬氏<sup>21,7</sup>の調査があり、昭和49年以降一連の長崎県教育委員会による調査<sup>№6</sup>がある。これらの調査によって貝塚を伴う弥生時代中期後半～後期前半の資料が多く検出され、新玉葬の貨泉（後期層）や戦国式銅剣等の資料も得られている。一方、漁撈的性格の強い骨角器も多数発見されるとともにV字溝や墓地などの重要調査も行われている。原の辻遺跡は杵岐島最大の沖積地をひかえ、島の東部にある芦辺浦にも近い位置にあり杵岐島樞要の地を占めている。このことは、

日本と朝鮮半島や大陸との交渉が頻繁になる情勢の中で当然のことと考えられる。

一方カラカミ遺跡の場合、屹立する海岸地形の多い志岐島西岸にあって、深い湾入部をもつ片苗湾とそれに続く刈田院川流域に近く立地している。後世のことであるが刀伊の来襲(1019)や元軍の来寇においてもこの地は上陸と惨害を受けた地とされており、古来志岐島西海岸における窓口の一つであった可能性が強い。刈田院川流域は、暖簾川流域と同様、「かつては海であった」という伝承が今にして広く伝えられているが、カラカミ遺跡の立地上性格を投影している感がある。

(正 林)

註1 安樂勉・藤田和裕「名切遺跡」長崎県文化財調査報告書第31集、長崎県教育委員会 1960

2 昭和59年12月、藩ノ本漁港整備計画現場で遺物が採集されており、筆者等が確認した。

3 山口麻太郎「使途不明鳥帽子型石器に就て」『考古学第一巻弥生式』松本友雄「老岐回考古通信」(一)『考古学雑誌』第17巻2号他

4 鶴田志正「長崎県志岐郡白河村原ノ辻遺跡の研究」柴田実編『日本文化史研究』1944

5 水野浩一・河崎敬「志岐原ノ辻遺跡調査概報」九学会編『対馬の自然と文化』1954

6 昭和49年、原の辻大原の地における郊地の水田化工事に際して箱式石棺等が発見され、同年、長崎県教育委員会による調査が実施された。この調査を契機にして、原の辻の台地一帯に対する遺跡範囲等の確認調査が県教育委員会によって3箇年度にわたり実施された。藤田和裕他「原の辻遺跡」長崎県文化財調査報告書第26集 長崎県教育委員会 1976、同第36集 同1977等の文献がある。

### III 圃場整備地区の調査

調査の経過と目的の項でのべたごとく、本報の調査は、①カラカミ遺跡の直接周辺地区における「立石地区圃場整備事業」がカラカミ遺跡と関連する否かの確認、②カラカミ遺跡の範囲をどこまで考えるべきかの確認を目的としたものである。概況は別添図2および第2表のごとくであるが、調査は各地区において2m×2mあるいは2m×4m規模を原則として試掘壕を設定して上層と遺物の関係把握を試みた。昭和57～59年度において実施した試掘規模は試掘壕総数90箇所、総面積約619㎡であるが、国柳地区（略称K）4・5区のごとく遺構（大溝）等の包含層上面までの調査で当該地点の調査を終了した部分もある。また、各試掘壕において遺構遺物の包含層が認められなかった場合は、記録措置として当該試掘壕位置の記入と、土層断面の実測（20分の1）のほかは写真撮影にとどめ、本報には掲載していない。以下、圃場整備地区の各圃場区の調査についてのべる。

#### 1. 鯨伏地区の調査

昭和57年度において試掘調査を実施した地区で圃場No⑬3.2haに対する調査である。カラカミ神社の西方400mの地区にある谷間の水田地区であり、従前別添図2に●8として示した遺物散布地に接する地区である。当該圃場区の中央部に、北から張り出した飯高丘陵があり遺跡包蔵地としての好地形と考えられ、2m×4mの試掘壕3箇所（略記号S1～3）を設定して調査を実施した。いずれも一70m程度で地山に達し遺跡遺物の包含状態は認められなかった。

#### 2. カラカミ地区の調査

カラカミ神社東辺、町道綿打線南側の水田地帯で、圃場No⑭1.3haについて、昭和57年度春季に実施した。別添図2にR1～7区として示した試掘壕7箇所であるが、中世陶磁と弥生式土器の細片のほか滑石製石鍋片・砥石等が磨耗した状態で散見された程度であり、他地点からの流入と考えられる。但し、R6区においては原形復原可能な壺1点があるが遺構等はなく、後述する包蔵地点（立石東鯨字川久保583番地1 略称W1～9区）に近接しているところから、この地点よりの流入遺物であると考えられる。（図版5）

一方、圃場No⑯2.1haもカラカミの小字名を有しており、別添図2にR8～27区として示した地区が該当する。カラカミ神社のある高台の南手を西流する刈田院川上流域に当るが、いずれも顕著な遺跡遺物の包含状態はなく、磨耗著しい土器細片が認められる程度にとどまっている。ただし、遺物としてはR8区において小形の磨製石剣1点（図版5）が2次堆積層中で検出された。一方、R20区の水田造成土層中において黒曜石製の細石刃核1点（図版5）を検出したが成層堆積の土層ではないものの、先土器時代資料の乏しい老岐島においては重要な発見といえよう。

### 3. 椿多地区の調査

勝本町南隣、郷ノ浦町との町界に近く、刈田院川西岸の地域である。別添図2の圃場No⑩10haの区域として示した地域に略記T1～15の試掘壕を設定して試掘を実施した。T8～14の試掘壕において土器細片を認めたとが磨耗顯著で、圃場区No⑩鯨伏地区からの水流によって運ばれた遺物と考えられる。●13・15～16地点で弥生式土器の表面採集資料数点があった。

### 4. 間頭<sup>まがし</sup>地区の調査

別添図2に圃場区No⑩6.3haとして示した地区の調査であり、刈田院川南岸の水田地帯に略記号M1～9で示した試掘壕を設定し実施した。いずれも刈田院川の氾濫原と考えられ、遺物等の整層状態は認められない。遺物としてはM9地点の水田客土中から挟入片刃石斧（図版6）1点を発見した。また、前田橋に近い●14地点で弥生式土器を採集し、●12の地点（路上）で磨製石斧1点を、●17の地点で箱式石棺材と考えられる板状石材数点を発見したが、近隣地点に墳墓遺構は認められていない。昭和58年度春季に実施した。

### 5. 長多地区の調査

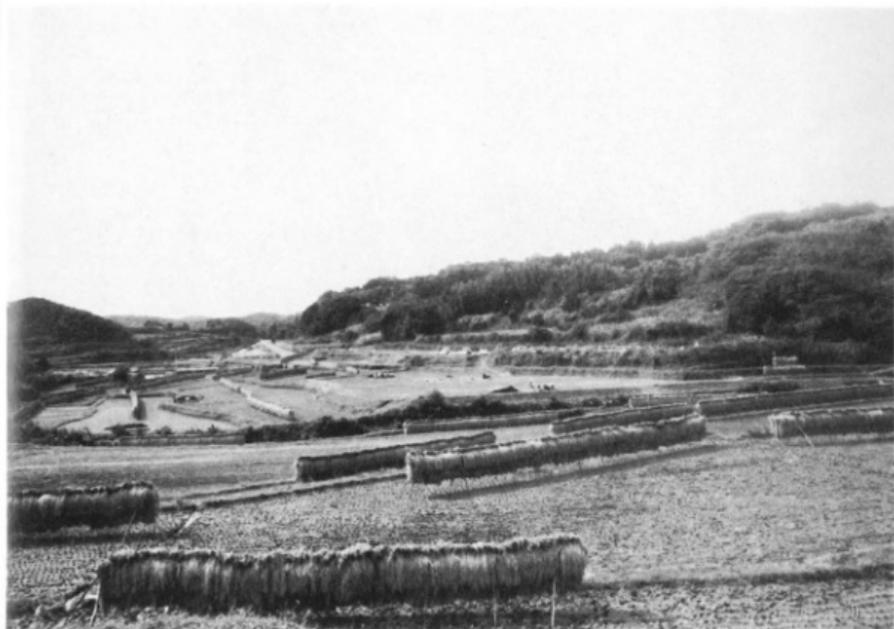
間頭地区の西隣、刈田院川対岸地区の圃場地区No⑩にG1として示した試掘壕を設定して試掘を実施したが遺構遺物の包含層はない。昭和58年度春季に実施した。（正 林）



藤伏地区の調査 1. 遠景(南から) 2. 地鎮祭



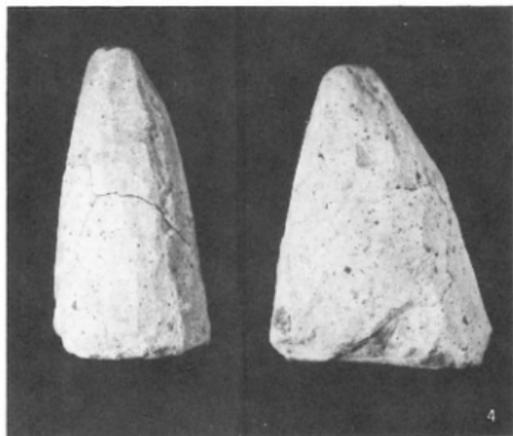
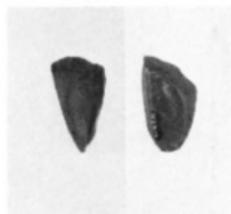
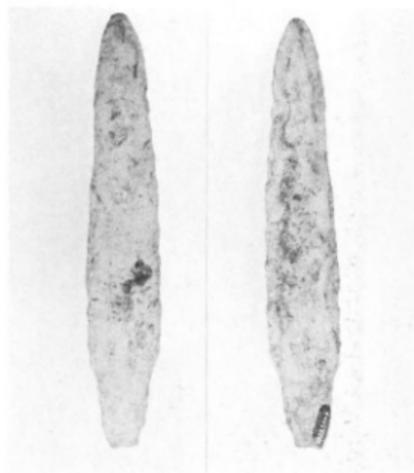
関頭地区の調査 1. 遠景（東から） 2. M1区北壁土層



カラカミ地区の調査 1. 遠景（東から） 2. 調査風景



1. R 6 区出土状況 (北から) 2. R 20 区北壁土層



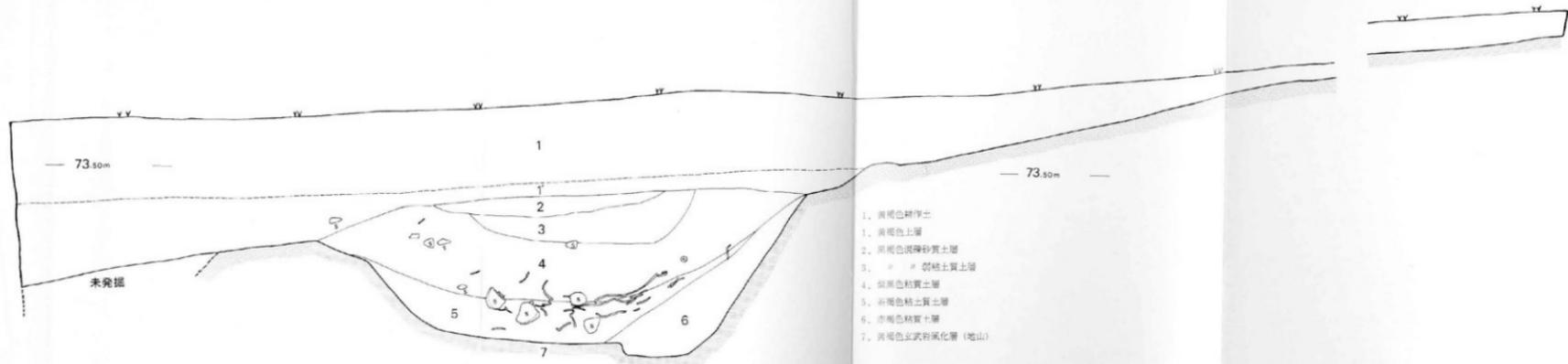
3

4

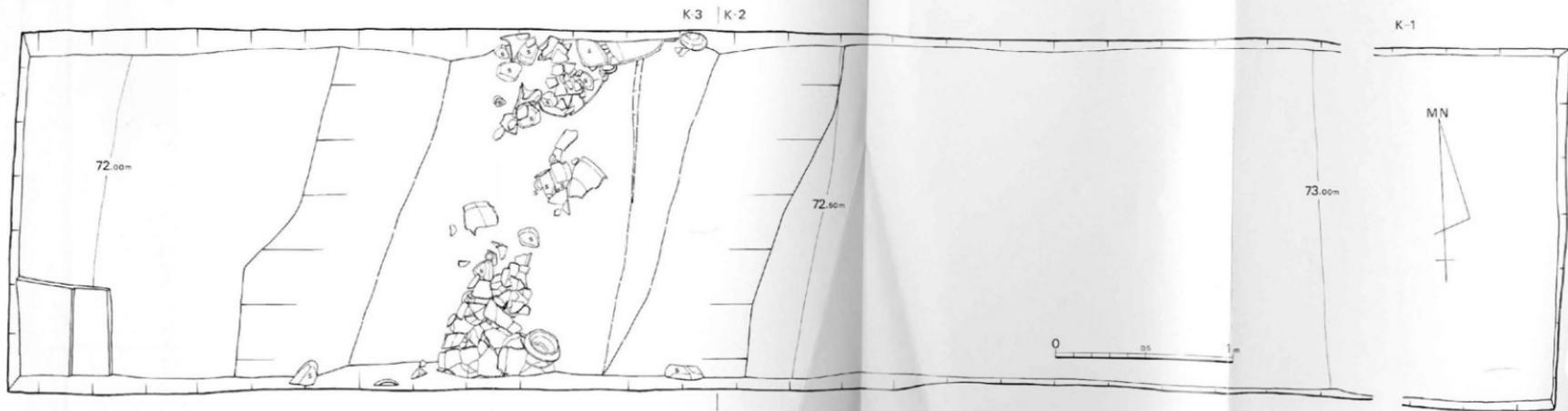
昭和57年調査出土遺物およびカラカミ周辺表面採集資料

1. R 6区 (1/6) 2. R20区 (1/2) 3. R14区 (1/2) 4. カラカミ周辺表面採集

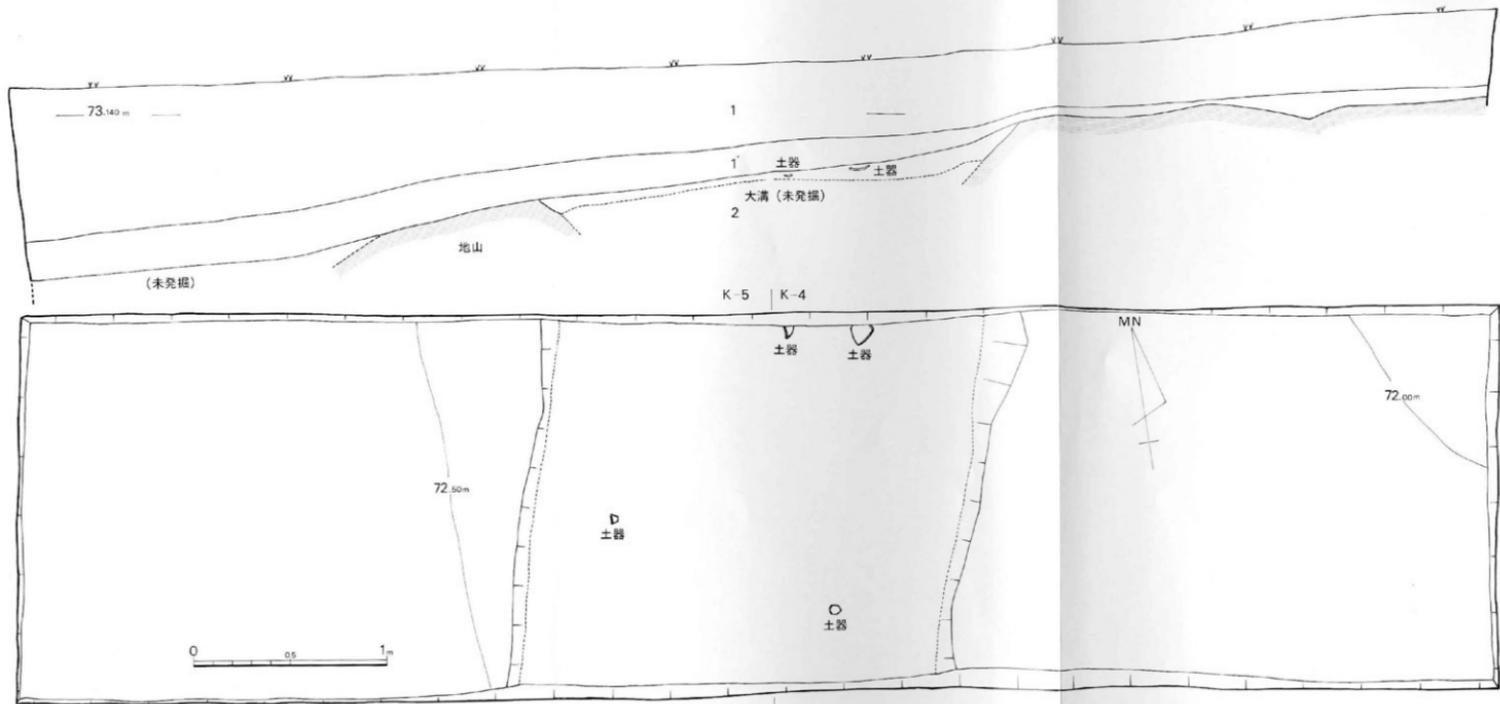




1. 黄褐色粘壤土
1. 黄褐色土層
2. 黄褐色硬砂質土層
3. ○ ○ 砂粘土質土層
4. 紫褐色粘質土層
5. 紫褐色粘土質土層
6. 赤褐色粘質土層
7. 黄褐色玄武岩風化層 (地山)



第4图 K1~3区遺構実測図 (1/20)



第5回 K4・S区遺構実測図 (1/20)

状の黒褐色砂質土であり、やや粘質をおびている。4層は大溝の全面を覆う紫黒色の粘質土で下部において遺物を包む上部包含層である。5層は茶褐色粘質土で遺物の主たる包含層であり、第7層の地山に接している。第4図の土層図に示したように、本層における遺物出土状態は大溝の断面形に沿った凹レンズ状の垂直分布を示しており、大溝の東辺から5層土とともに溝内に流入したことを示している。ただし、遺物の破損状態は軽微で磨耗が見られないところからして、ごく近接した地点から流入したことを示している。この大溝内への遺物の流入は人為とは考えられず、後述するカラカミ神社東辺の川久保地区W4区の急斜面における遺物出土状態が人為的廃棄と考える状態とは明らかに異なる。第6層は大溝内東辺に急傾斜状態で見られる赤褐色粘質土であるが、大溝内に最も早い時点で流入している。第7層は茶褐色の玄武岩層であるが、大溝西辺1m付近で急激に西方へ傾き急崖状をなしている。

土層全体の形成を概観すれば、大溝内に2～6層の土と遺物が流入充填した後に1および1'層の土が堆積したが、東西方向全般に自然流下し現状の地形を形成し、畑地に利用されたことがわかる。

#### (4) 遺 構

K2～3区において、調査を横断して南北方向にのびる大溝を検出した。この遺構は断面がゆるい逆台形をなしており、上面における最大幅約3m、底面幅1.2m程度を計る。溝底部の東辺に幅40cm、深さ10cm程度の切りこみがあるが、人為の切りこみか、地山の自然の凹地であるかさだかでない。第2層面からの深さは80cm程度と比較的浅い。本遺構の上面の西約1mの線から地山が急激に落ちて急崖状となり、大溝は急崖直上に近い位置を意識して構築したものと考えられる。K4・5区は、この大溝の走行方向確認のため設定した調査区であるが、K4・5区中央部において大溝の位置を確認し得た。K4・5区の土層は、1～3区と大差なく、大溝内の土層等の状態は未発掘のためかさだかでないが、K1～3区の状態と大差ないものと考えられる。大溝の幅員はK2・3区とほぼ同様であり、溝の上面西方1mの線で本地点においても地山が急崖状に傾く。

この大溝遺構は別添図2の●4地点の小路の切りとおし断面にあらわれている大溝状の包含層に連絡する可能性が強く、さらに同図に●20として示した九州大学調査地点(昭和52年)の大溝に連絡することも考えられる。K1～3区の以北における大溝の走行方向は現時点では知り得ないが、K1～3区をやや東寄りに横断していることを考えれば、同図の●18および●19の畑地(昭和52年九州大学調査地点)の間にある狭長な低凹畑地に連なる可能性も考える必要がある。一方●18西手を走る町道線打線の部分は鞍部になっており、この鞍部に大溝が走向していた可能性も否定し得ない。これらの大溝はカラカミ神社のある約88mの高さを北辺から南辺まで半周するが、東辺へのつながりを確認するのが今後の課題の一つであろう。(正 林)

## (5) 遺物

### ○土器 (図版12～14・16)

2m幅のトレンチに大溝が一部検出されたにすぎないが、覆上にはやや豊富な遺物が含まれていた。大ぶりの破片が多く、底面に集積した状況がみられたが、時期的には中期後半～後期末頃までの資料を包含している。土器の器種には、壺・甕・鉢・高坏・器台がある。

壺は、広口壺と複合口縁壺がある。7は頸部と胴部の境界が明瞭でなく、やや長頸の広口壺である。8～11は、口縁部を欠失しているので両者の区別ができないが、頸胴界に突帯を貼り付けている。10は口縁を欠損する他は完形の資料である。12は、大形の壺で頸胴界と胴中に幅広の突帯を貼り付ける。底部は凸レンズ状底をなす。終末期の資料であろう。1～6・20は複合口縁壺で、2・3は丹塗土器である。1は袋状口縁壺で後期初頃の資料、2も同様の時期であろう。3・4は前葉～中頃、5・20は後半、6は終末期の資料であろう。6は口縁の屈曲部が外力に大きく突出し、豊前型壺の特徴をもつ。

13・14は、甕である。13はほぼ完形に復原できた。底部は平底で、後期中頃の資料であろう。14は、やや人形の甕で、甕棺に類似したプロポーションをもっている。他に図示していないが、中期後半～末の甕も出土している。

15～17は鉢である。15は小形の碗形鉢でほぼ完形の資料。底部は小さな平底をなす。16は口縁が「く」の字形に外反する鉢である。底部は広い平底で安定した形状をもつ。17は、深い身の小形鉢で碗形を呈する。

高坏は図示していないが、坏部の口縁はやや強く外反し、肩曲部に稜をもつもので、後期中頃から後半頃の資料がみられる。18・19は器台である。18は体部が筒状をなし上下に開く形態。19はくびれ部が上部にあり、下方は大きく拡がる形状をなす。端部は両者とも丸くおさめる。

大溝出土の土器は、中期後半～後期末の資料を含んでいるが、終末に比定できる壺6が底面付近から出土している(図版10-1)ので、終末あるいはその直前頃には溝の機能が衰えて急速に埋没したことが推測できよう。(宮崎)

### ○石器 (図版15・16)

カラカミ神社北辺の調査で出土した遺物は、すべて字岡柳744-1のW2・3区で検出した大溝の溝内資料である。図版15・16に示した石器資料も溝内で検出したもので、大溝がその機能を失った後に外部から溝内に流入したものである。石器の数は図版に示したものがほとんどすべてであり、叩き石と磨石(彦岐島でツブテ石という)・砥石がある。叩き石と凹石は縄文時代の海岸遺跡で多く見られるものであるが、本遺跡を含めて彦岐島内でもひろくみられる。重量は図版15-5が260g、同15-3が920gを計るが平均的には1kg程度 of 美麗な円礫が用いられている。同図版1・4～7が叩き石、2・3が凹石であるが、凹石がやや扁平で整った円礫であるのに対して叩き石はいく分長めのものが用いられている。凹石は同図版3のごとく円礫の

両面もしくは片面中央に敲打をうけて粗い表面となった円形の凹部を見るが、叩き石は出磔の側縁部が打撃をうけて平坦化もしくは剝離している。石材は2が微粒砂岩以外安山岩礫である。

カラカミ遺跡では砥石が多く出土しているが、材質・規模等によって多用途に供されている。図版15-8はうすく剝離した頁岩質の砥石片であり、写真の上下縁部にきわめて細かい研磨痕がある。同図版9は粗質の安山岩であるが石斧の破損したものを凹み石司様に使用したらしく表面に粗い使い減りのある凹み石がある。10・11はともに砥石であるが、10は黄灰色の砂岩扁平礫で両面に研ぎあとがあるが、一部鈍い葉研状の研磨痕がある。11はきわめて緻密な砂岩の扁平礫を利用した砥石であるが、表面に美しい光沢があり、砥石よりは研磨具とした方が相応しい。本報の調査において、砥石と汎称したものの中に、あきらかに粗砥と仕上げ砥を石材によって区別した例が多いが、研磨による美しい光沢を有するものがあり、今後研究を要しよう。

図版16-12に示したのは、上下長23cmの「くど石」である。石材は灰白色の粗粒の集塊岩である。紡錘形の形をしたものが多いなかで本例はやや扁平であるが底辺は比較的安定のよい形に整形されている。

(正 林)

#### ○金属器 (図版16-1)

鉄器2点が大海から出土した。1は断面が丸い棒状をなし、上端を欠失している。現存長は6.5cm、径1.7cmを測る。他1点は、断面が方形の棒状で大部分を欠失する。鉄鍔の某部分と推測できる。

(宮 崎)

#### ○自然遺物

カラカミ神社北辺の大海遺構中の自然遺物は微量であり、シカの四肢骨片・イノシシの下顎・イルカの背骨などが致点認められている。出土の状況は雑然とした状態で東方向から溝内に流入している。溝内の骨角類は保存は悪く取り上げ不能の状態であった。

(正 林)

#### (6) ま と め

カラカミ神社北辺の調査は、昭和52年に実施され九州大学の調査(別添図2の●18と●19地点)以外に従前の調査例がなく、九州大学の調査においても表土が連山に接する状態で遺構遺物包含層を認めなかったといわれる<sup>1)</sup>。したがって本報の確認調査以前の神社北辺は若干の表面採集遺物以外、ほとんど知見例のない状態であり、本報の調査で大海遺構を検出し得たことは大きな成果といえるであろう。この大溝は第3図に示したとおり、カラカミ神社のある高台の西辺を走る遺構であるが、別添図2の●4の地点に見られる大溝状の切りとおし断面に連なる可能性がきわめて強く、同図●20の九州大学調査(昭和52年)においてT6・7で検出された大溝に連なる可能性もある。この予察が正しいとすれば、カラカミ神社の西半部を両することになるがW4・5区南辺の字門柳76番地における大溝の存否を今後確認して、予察を補強する

必要があろう。

つぎに、大溝の構築意図についてであるが、K1～3区、K4～5区に関する限り、緩傾斜面が西方に急傾斜する部位に大溝が構築されているのは事実である。カラカミ神社周辺の地形を観察すると、同神社をのせる標高88mの高台があり、高台をとりまく70～75m程度の緩傾斜地があつて畑地となっている。この一連の地形は北東辺を深い沢によって区切られ、南辺は急傾斜面をなして刈田院川の谷筋に連なる。一方、西辺は微地形的には急傾斜地もあるが東辺と南辺に比して概して傾斜度は低い。また北辺はなだらかな鞍部によって北方の丘陵に連なっている。このようなカラカミ神社一帯の地形を外部から隔絶するためには、神社北辺の鞍部と西辺の比較的傾斜度の低い地域が問題となる。大溝構築の意図はこのようなカラカミ神社一帯の地形と深くかかわっている可能性がある。

(正 林)

[註]

1. 西谷正氏の教示による。



K区大溝検出状況（西から）



大熊遺物出土状況 1. 西から 2. 東から



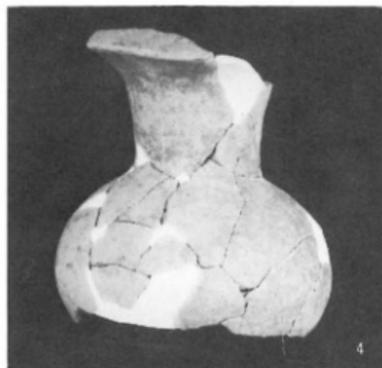
大溝出土状況 1. 下部遺物出土状況 2. 甕掛状況



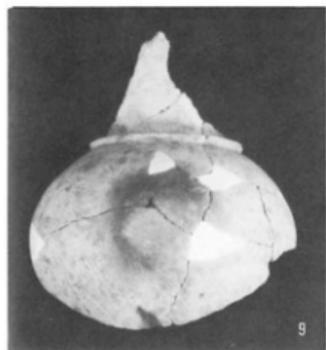
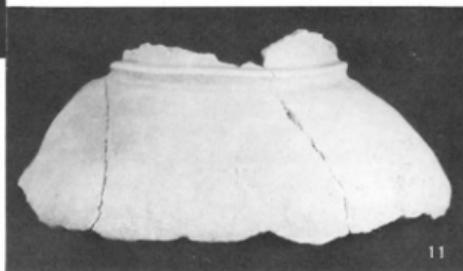
大溝土層断面 1. 南壁 2. 北壁



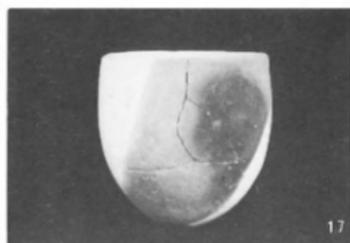
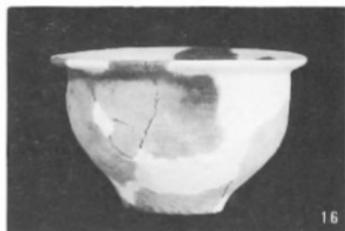
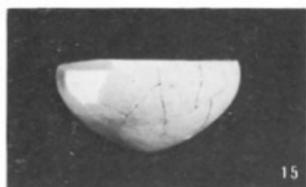
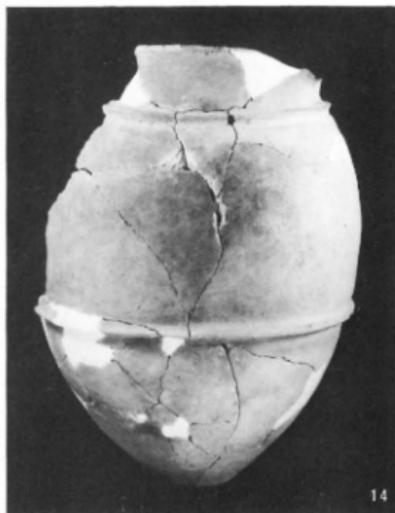
K4・5区大溝上面検出状況 1. 東から 2. 北から

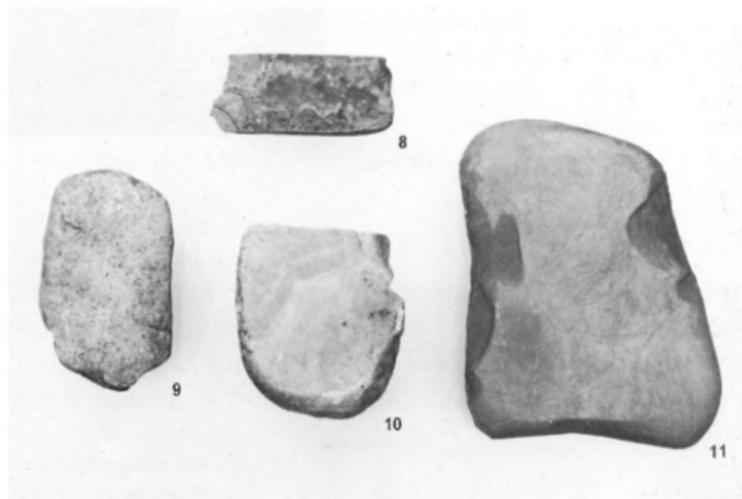
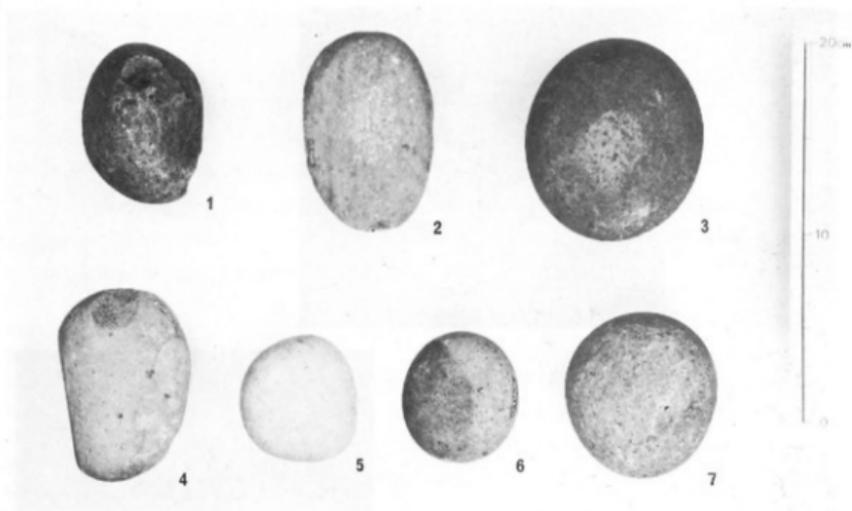


K区大溝出土土器 (1/4)

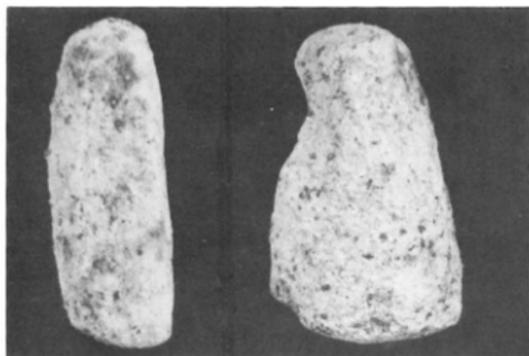


K区大溝出土土器 (12は1/6, 他は1/4)





K区大溝出土石器 (1/3)



12



1



20

K区大冢出土石器 (1/4) · 鉄器 (1/2) · 土器 (1/6)

## 2. カラカミ神社東辺の調査

### (1) 位置と地形

カラカミ神社東辺は現在の小字名では、字川久保と字唐神になっている。東辺北半が川久保、南半部が字唐神である。大正5年、地域考古学の先達松本友雄氏が発掘された小川貝塚(昭和27年の東亜考古学会の第2地点)は別添図2●1の地点にある。饅頭畑の残っている部分もあり、本報の調査で大半の報告内容をもつW1～9の調査区(字川久保583-1)や、R33-43区(字唐神771)にその旧状をしのおことができる。この東辺部を北から南に走る農道があるが、南端で途切れ、急斜面が刈田院川畔に続いている。

### (2) 調査区の設定

立石東触字唐神768-1に2m×8m、2m×12mの調査区を設けてそれぞれ4m区に区切りR(カラカミ地区略記号)28-32区とした。同字771は東亜考古学会調査の辻屋敷貝塚(別添図2●3の地点)の東に接した土地であるが2m×4mの調査墳6箇所(R33-38区)をL字形に配して調査を実施した。字唐神767の畑地は字川久保との字界の畑地であるが、2m×8mの調査区を設定し、2区に分けてR39-40区とした。字唐神765の畑地はカラカミ神社高台に近接する緩傾斜地であるが2m×12mの調査区を設定し3区に分けてR41-43区とした。

字川久保583-1の饅頭畑は東辺一帯でもっとも広い畑で、東辺は谷筋になっているが、ほぼ南北に36m×2mの調査区を設定し、南から順にW1～9区(各2m×4m、W9区のみは3m×3m)とした。字川久保585の畑地は農道に接する三角形の土地であるが、2m×4mの試掘墳を南北に設定し、南からW10-14区としたが、W10区の西に2m×6mの補充区を設定してW10補区とした。字川久保586は標高74mの畑地で饅頭畑の旧状をわずかに残している。かつて昭和50年頃、宅岐商業高等学校の野本政宏氏が鯨骨製ヘラ状骨器を農道の断面で発見した畑地であるが、ほぼ東西に2m×4mの試掘墳を3箇所設定した。

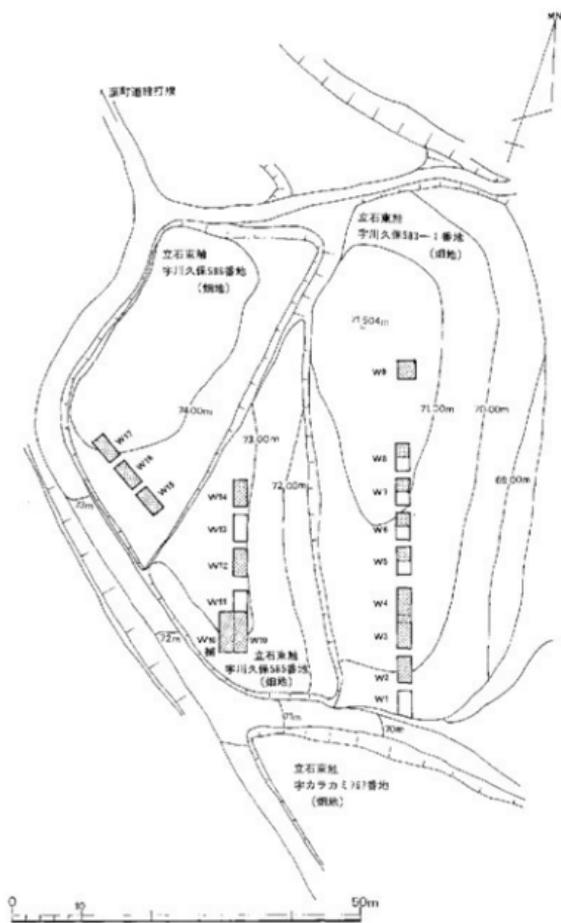
### (3) 土層と遺物出土状況

#### ○字唐神768-1の土層と遺物出土状況

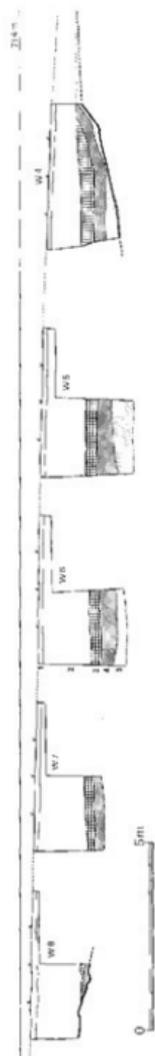
本地点の土層は単純である。R31-32区においては茶褐色の耕作土が、紫灰色の玄武岩地山に近接し、耕土も15-20cm程度の厚みしかない。したがって地山表面には農耕機械の爪跡が残っている。R28-30区の土層もほぼ同様であるが、R30区西端部は急激に地山がさがっており、赤土のうすい堆積がある。R28-30区を通じて遺物は皆無である。

#### ○字唐神771の土層と遺物出土状況

本地点は饅頭畑の形状を保っているが荒地で女竹が繁茂している。表土の下部は黒褐色の土



第6図 宇川久保地区(略記号W)の地形および調査区実測図(1/800)



第7図 川久保(略記号W)4~8区土層断面図(1/150)

層となっているが、平均1m弱の深度まで有機質や礫の混入は全く認められず、同一土層が地山まで続いている。北辺のR37～38区の一帯がもっともこの土層が厚く、南辺のR33区においてはやや地山までの深度が浅い。遺物は表土層を含めて全く認められない。

#### ○宇唐神767の土層と遺物出土状況

本地番の調査区R39～40区においては茶褐色の耕作土の下に、赤褐色の弱粘質土層が堆積しているが、遺物の包含状態は全く認められず、表土下30cm程度で黄褐色の玄武岩地山に達する。地山の傾きは南→北方向に下向傾斜していて、川久保地区へゆるやかに接続していたと考えられる。

#### ○宇唐神765の土層と遺物出土状況

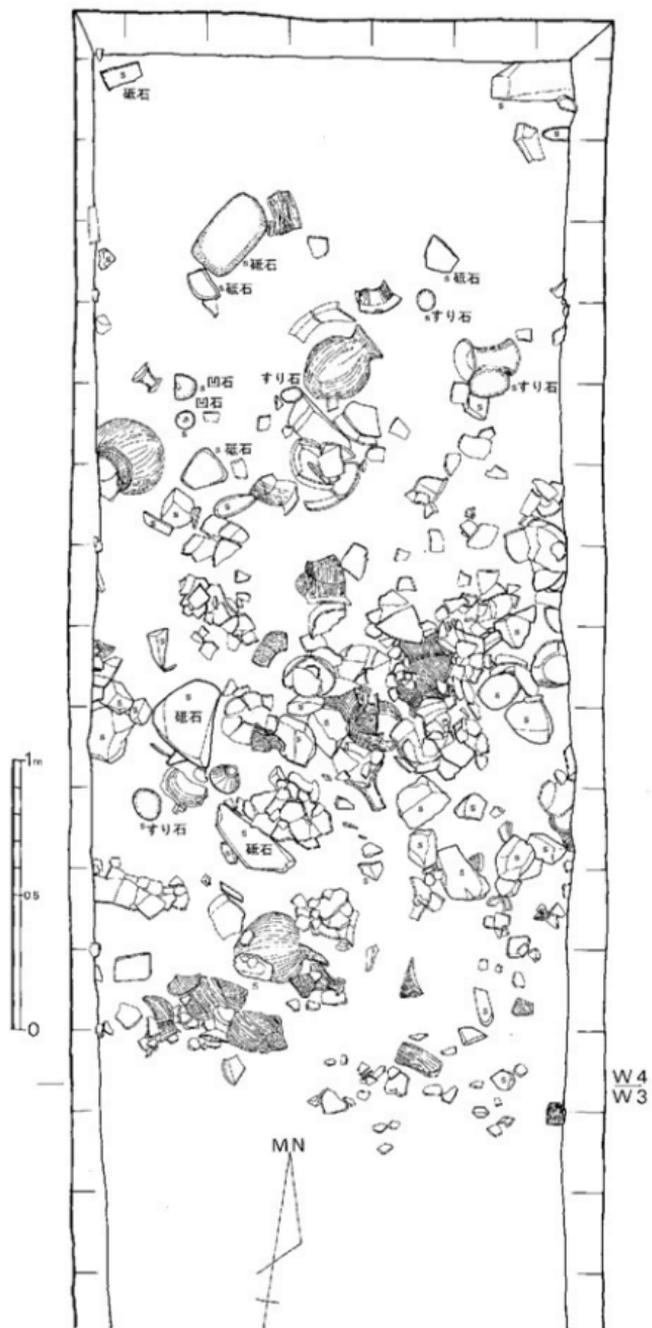
本地番の畑地はカラカミ神社の高台に近い緩傾斜地であり、小川貝塚（別添図2●1地点）にも近く、良好な包含層の存在を期待したが、耕作土の下の弱粘質の茶褐色土層が50cm程度で地山に達しており、遺物包含層は全くない。

#### ○宇川久保583-1の土層と遺物出土状況

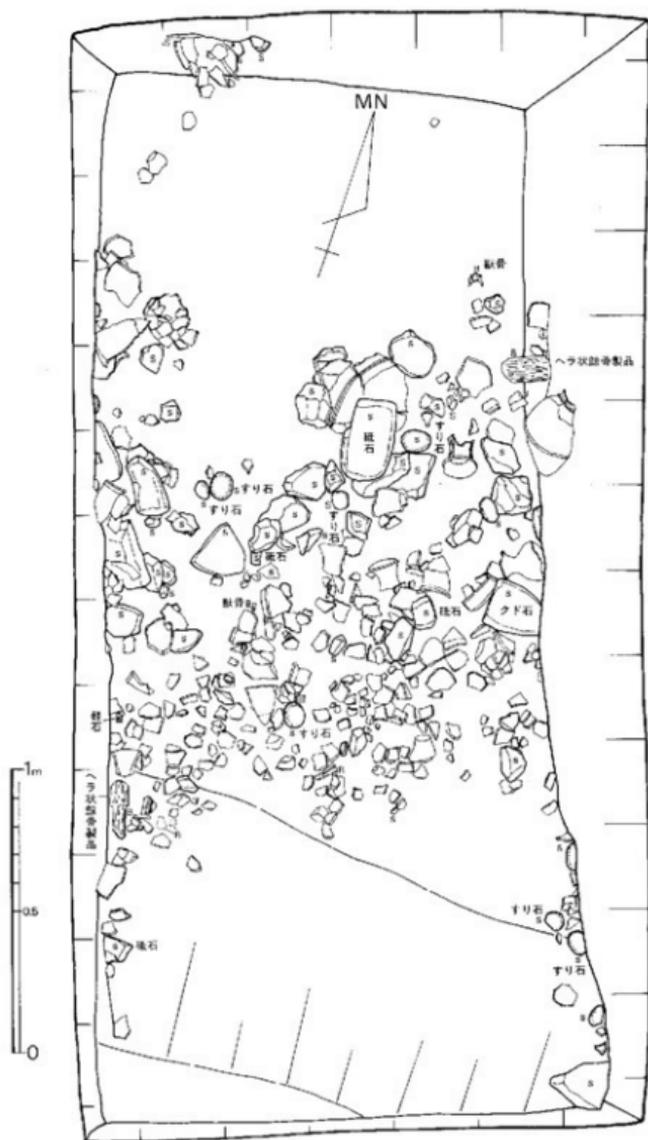
当該地番（川久保583-1）の畑地は69～71m台の等高線で示したとおり饅頭畑の形状を保ち、大きく西辺がふくらむ地形を見せるが、土層の実状はかなり異っている。W4区の土層断面（第10区）に示したように大きく5層の堆積を示しているが、W3区以西は表土下20cmで地山に達する。この地山はW3区北端部から急激に北方向に傾いており、あたかも、大溝の片岸の壁を呈している。このW4区南端の地山の急激な傾きは、第7区で見ると約23m北方のW8区において南に傾く地山となってあらわれる。このことは、当該地番を東西に走る幅23m程度の大きな「沢」状の低凹地形があることを意味している。この「沢」最深处はW6～7区のあたりにあると考えられるが、表土下3m近くの深度においても地山層に達しないことから考えると相当深い「沢」と考えられ、地表の饅頭畑地形と全く対照的な地形をなしている。

この幅広の「沢」に大要5層の土層が見られる。第1層は黄褐色の耕作土で微粒である。2層は茶色の土層で淡灰色の地山玄武岩のばい乱礫を含み、南方向ほどうすく、W8区以北は再びうすくなる。一方、W6・7区のあたりで最も堆積が厚く、1m以上に達する。この土層が饅頭畑に寄せ集められた客土であり、本地番は沢状の低凹地を埋めて造成された人工の地形を示している。

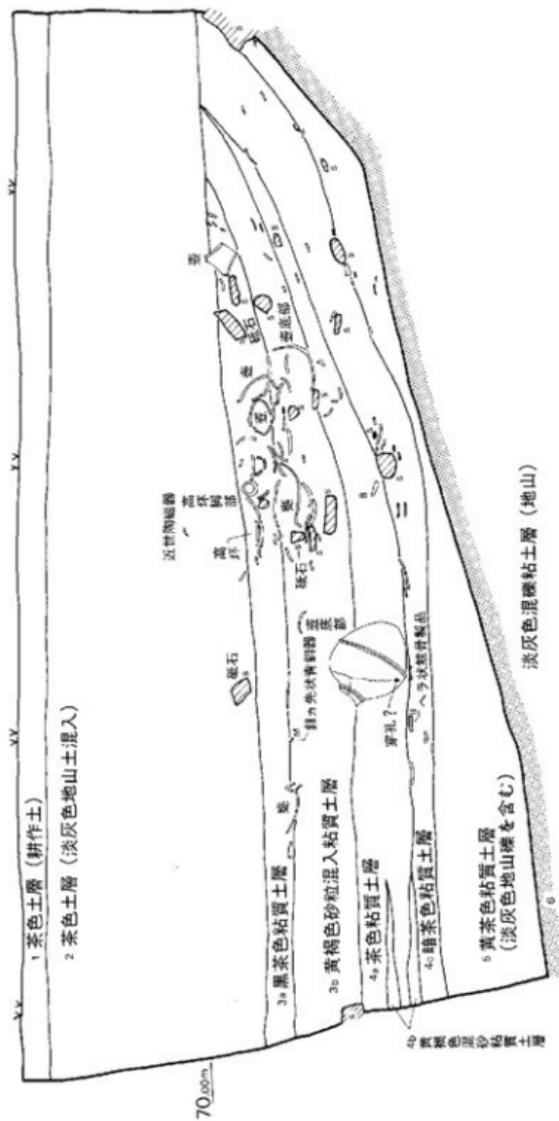
第3層は厳密には3a・3b層に分れるが、土質上の差異であり、時期的な分層ではない。第4層は暗茶色の粘質土層であり、厳密には4a・4b・4c層に分れるが、時期的差異を示すものではない。第5層は黄褐色の粘質土層で淡灰色の玄武岩ばい乱礫を含むが遺物の包含はなく、「沢」に堆積した最初の流入土で自然層である。第5層は、W5・6区においてもっとも厚



第8図 W3・4区3層遺物出土状況図(1/20) (青色は漢式土器片)



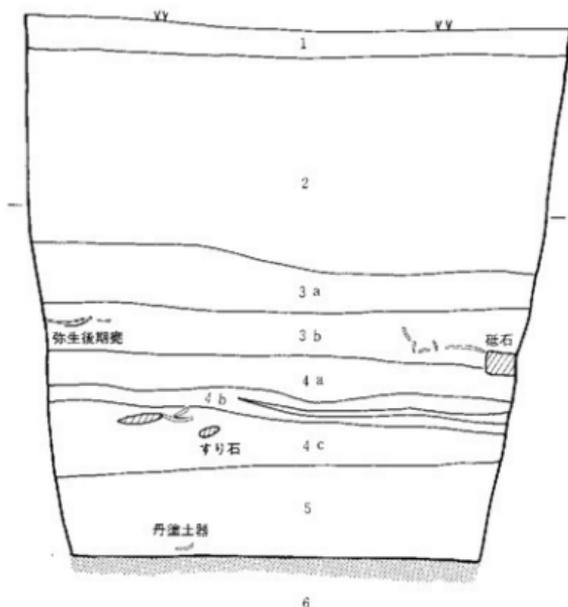
第9図 W4区4層遺物出土状況図(1/20)



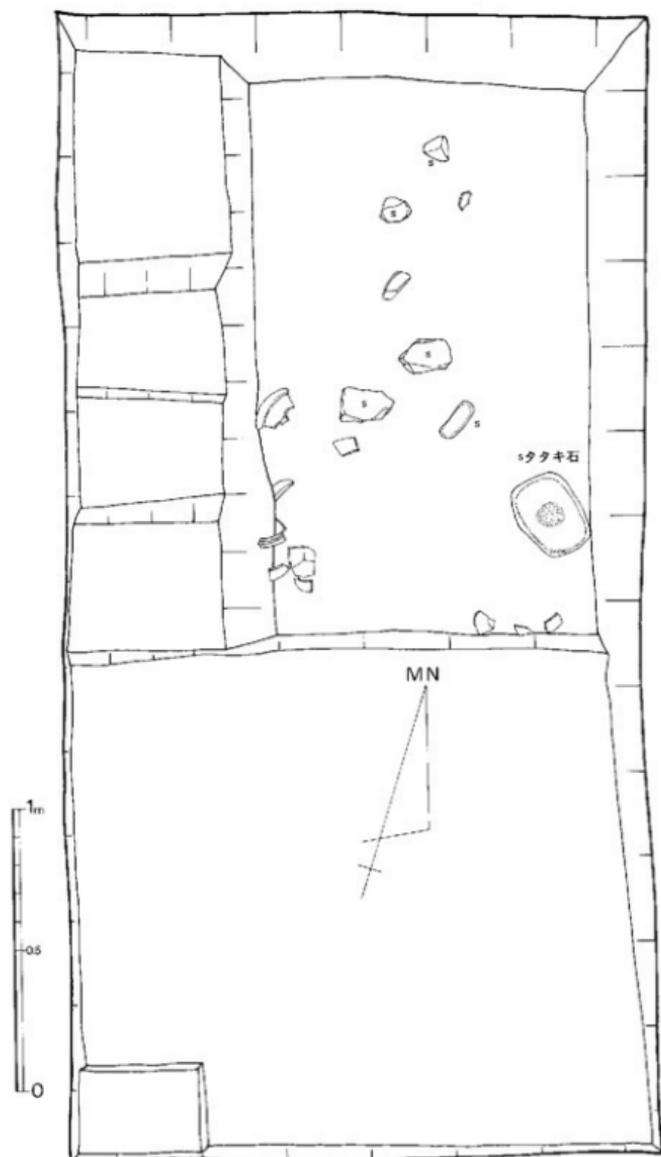
第10图 W4区東壁断面图 (1/20)

い堆積を有すると考えられるが未確認である。

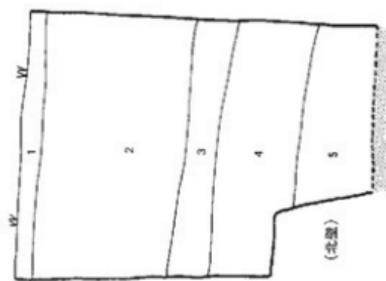
これら5枚の土層の中で、3および4層が遺物包含層であり、3層は原の辻上層式土器並行の資料を、4層は下層式土器並行期の資料を含むが、急傾斜地のためか、緻密な時期的分層状態にない。W4区南端の地山の急激な立ちあがりは人為のものでなく、自然の沢状地形であると考えられ、多量の土器・石器等の資料はこのW4区の3～4層の遺物である。これらの出土遺物は全く磨耗が認められず、完形資料も多いところから、自然流入ではないと考えられる。一方遺物の状態を見ると完形資料においても穿孔等の一部損傷箇所をもつものが多く、丹塗土器や器台・高杯の量が目立つ。このことは特定用途の土器の意識的な一部破損と意識的な廃棄の場所として本地点が選ばれたことを暗示している。



第11図 W4区北壁土層図 (1/20)

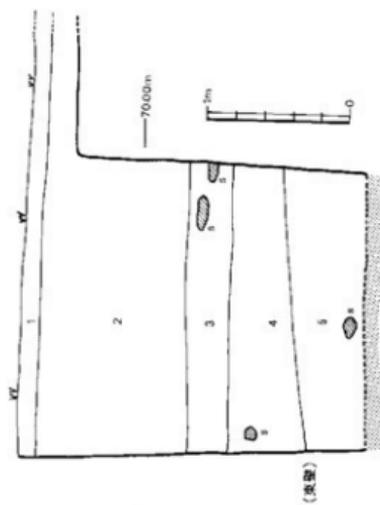


第12図 W5区遺物出土状況図 (1/20)

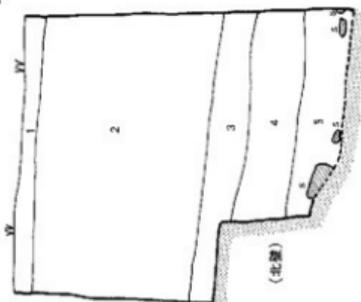


(北壁)

第13图 W5区土层断面图(1/40)

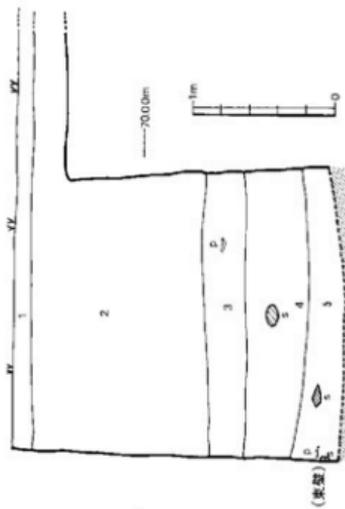


(东壁)

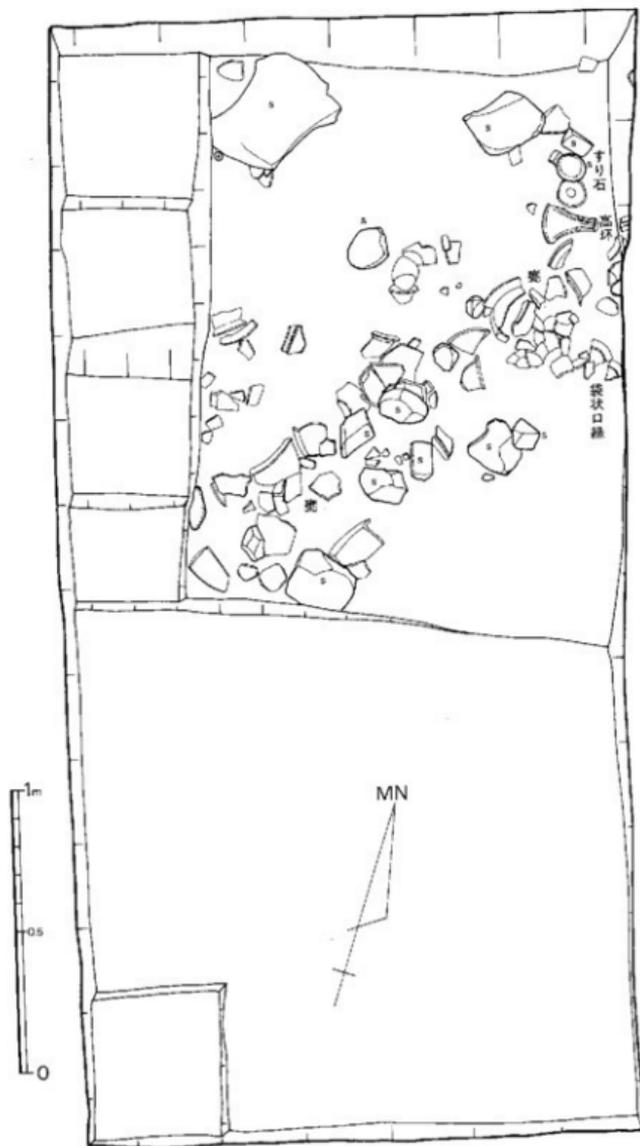


(北壁)

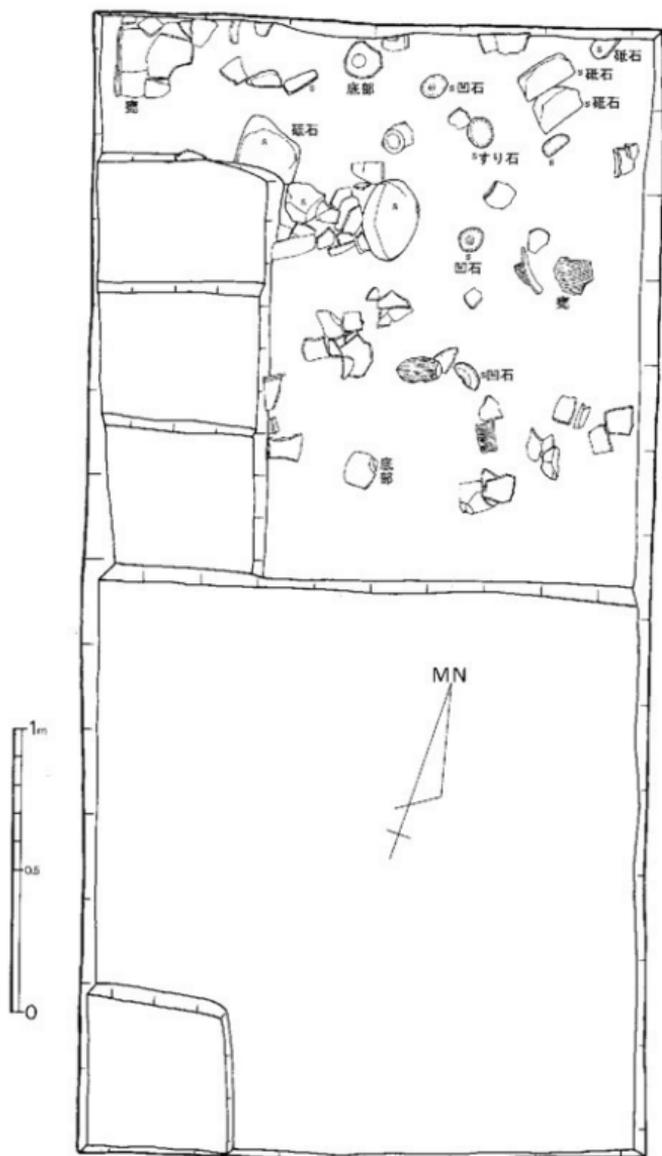
第14图 W6区土层断面图(1/40)



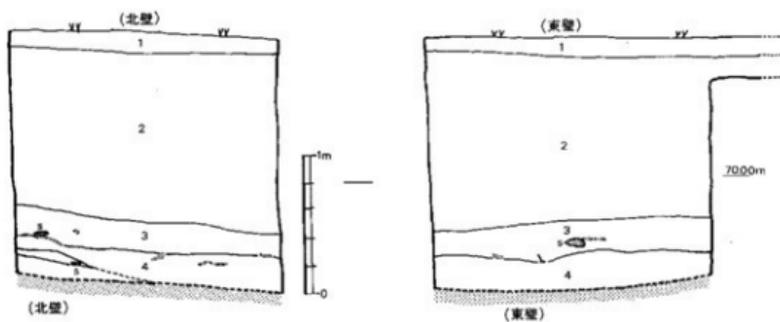
(东壁)



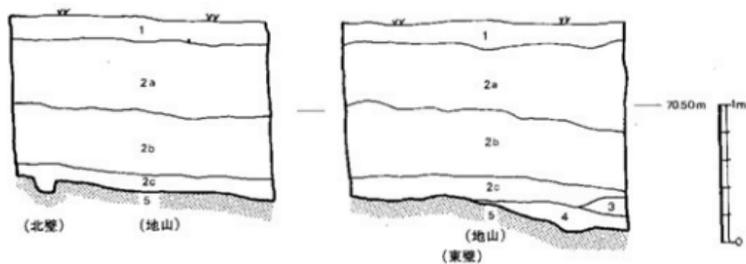
第15図 W6区遺物出土状況図 (1/20)



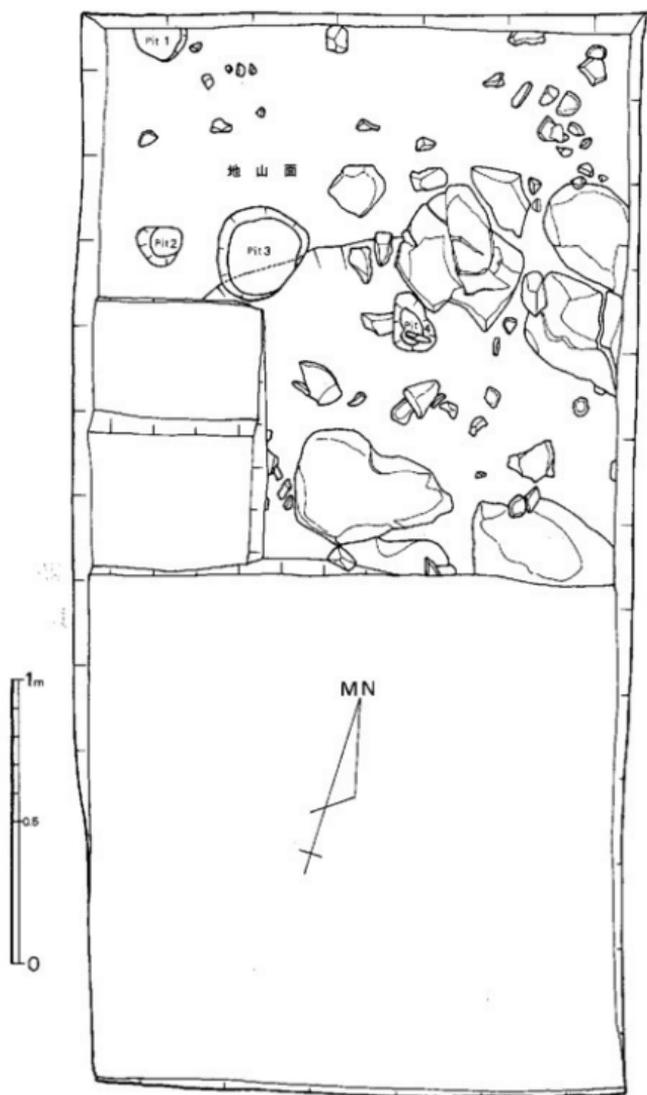
第16図 W7区遺物出土状況図(1/20)



第17图 W7区土层断面图 (1/40)



第18图 W8区土层断面图 (1/40)



第15图 W8区遗构实测图 (1/20)

#### ○字川久保585の土層と遺物出土状況

本地点は、南半部を農道に接する畑地で72~73mの標高を示す畑地である。ほぼ南北に設定したW10~14区のうち、発掘したのはW10・12・14の3区と、方形土壇の状態確認のためW10区西側に増設したW10補充区(2×6m)計40㎡を発掘した。1層は茶褐色の耕作土で粒度はこまかい。2層は茶褐色土層であるが玄武岩のばい乱粒を含んでおり、本地点も饅頭畑造成が行われたことを示している。この層は80cmにおよぶ厚い層である。3層は黒茶色粘質土層で粘性が強い。4層は暗茶色粘質土であるが、玄武岩のばい乱粒を含み炭化物が混入している。5層も粘性の強い茶褐色の土層であるが、4層より玄武岩ばい乱粒を多く含んでいる。

W10~14区の間はこの層順と土質に変化はないが、西→東方向にやや下向傾斜し、W14区北端部から北方向にやや下向傾斜する。W10区の南端部は地山が急角度に北に傾き、W4区の地山の傾きと軌を一にしている。W12~14区の5層の下部は発掘を途中で中断しているため地山までの深度は不明であるが、W10区の南端の急激な傾きを南端にして、後述するW17区(同字586)に連なる広幅の「沢」状の地形をなすと考えられる。

このように見えてくると、川久保586のW17区を北岸とし、同字585のW10区を南岸とする約23m幅の「沢状」地形があり、同字583-1の「沢」に連なると考えられる。遺物は、この沢の内部に堆積した4層に包含されている。

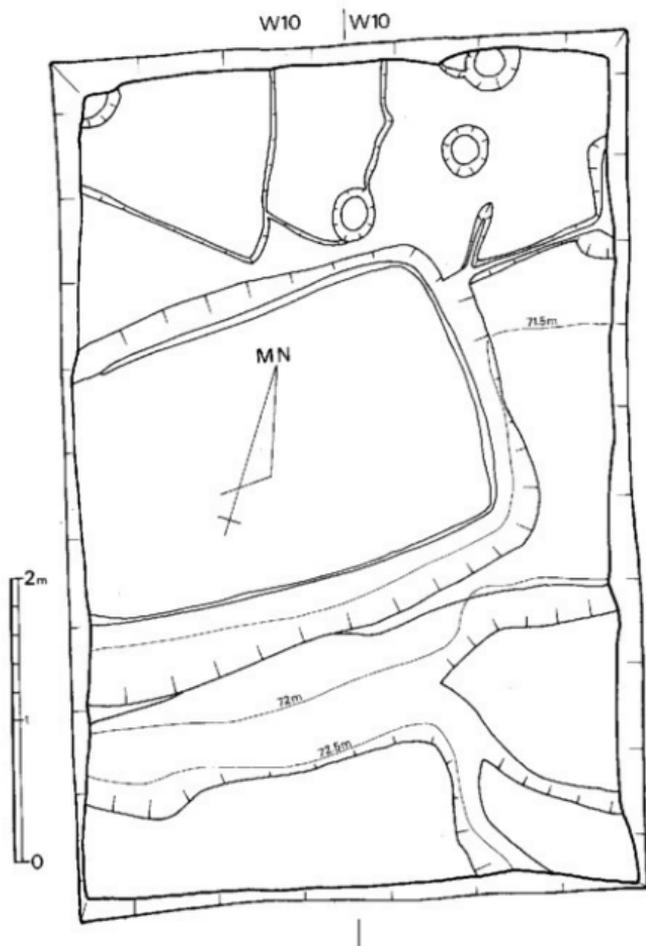
#### ○字川久保586の土層と遺物出土状況

本地番の畑地は74mの標高をもち、同字585番の畑地方向にゆるく傾いている。カラカミ神社高台東手を走る農道に接している。調査区は同地番南辺に農道と並行して2m×4mの試掘壕(W15~17区)を設定して発掘した。

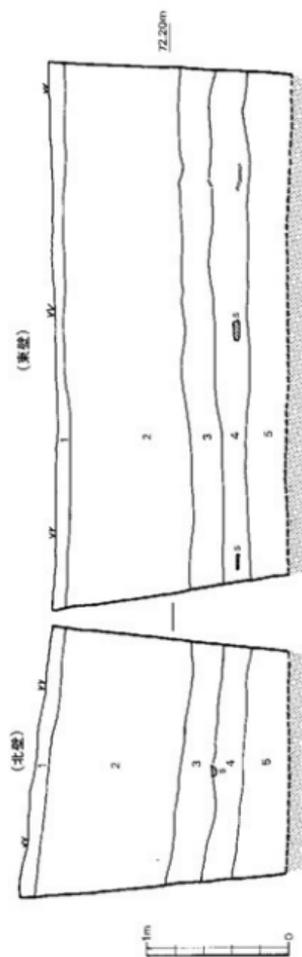
土層は全体に北→南方向に下向傾斜し、地山の状態に対応して堆積している。1層は茶褐色の耕作土で、2層もほぼ同様であるが淡灰色の玄武岩ばい乱粒を含んでいる。W17区において、1・2層は淡灰色の玄武岩地山に直接し遺物包含層はない。3層以下の土層はW17区にはほとんどなくW16・15区においてその堆積がある。3層はやや粘質をおびる黒茶色の土層である。4層は黄茶色粘質の土層である。この上層はW16区南西隅からW15区にかけてブロック状に貝を含んだ混貝土層(4層)となる。混貝土層は比較的明確なブロック状をなして分布しており、W15区の南半をしめるA貝塚、同区北半部のB貝塚、同区北西隅からW16区南西隅にわたるC貝塚に分れている。これらの貝塚はいずれも小規模のものであるが、A貝塚はもっとも大きく、南辺にひろがっており、後述するト骨もA貝塚より出土した。5層は黄褐色の粘質土層で炭化物を多く含んでいる。6層はW16区南西方向にひろがる黄茶色の粘質土で炭化物を若干含んでいる。7層は玄武岩地山であり、W15区あたりで急激に下向傾斜し沢の北岸をなす。この傾きと対応するのが前述のW10区の南辺であり、字川久保583-1の沢に連なっていると考えられる。

(正 林)

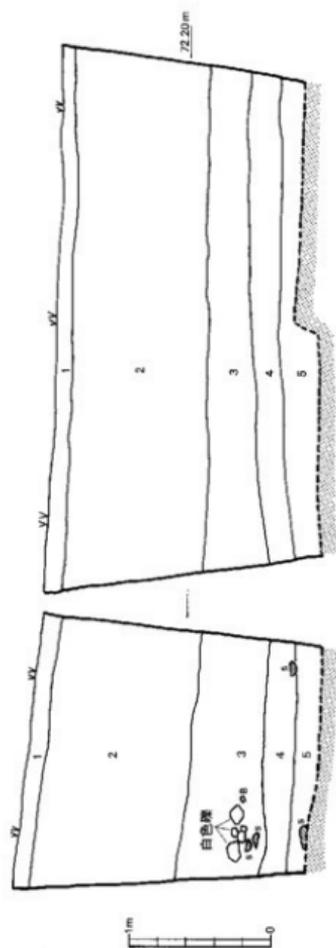




第21图 W10·10 补充区遗构实测图 (1/40)



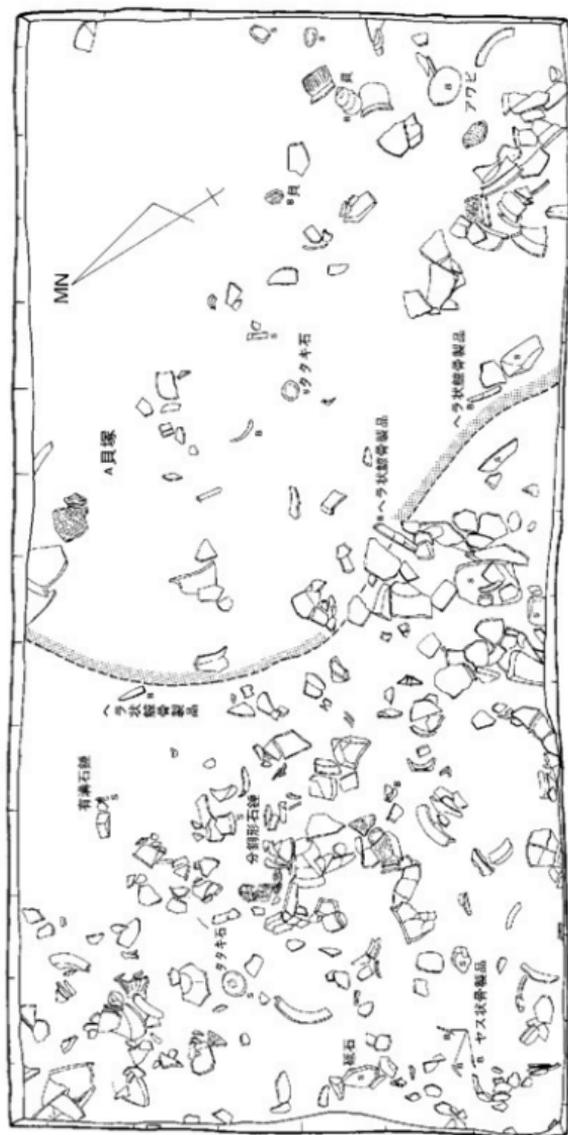
第22图 W12区土层断面图 (1/40)



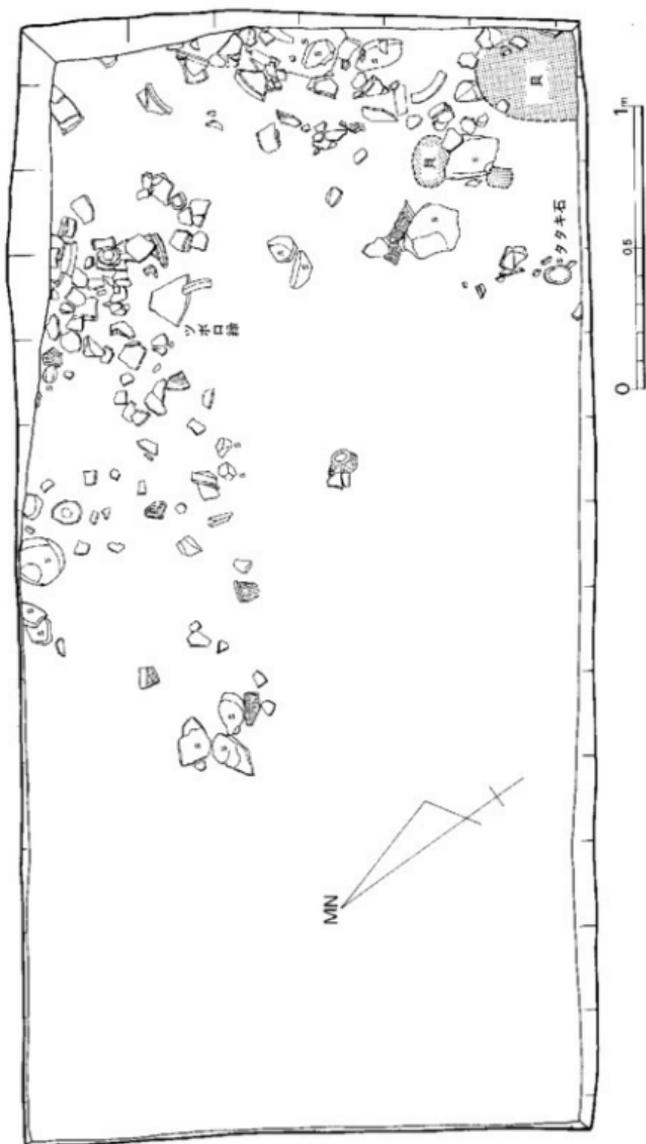
第23图 W14区土层断面图 (1/40)



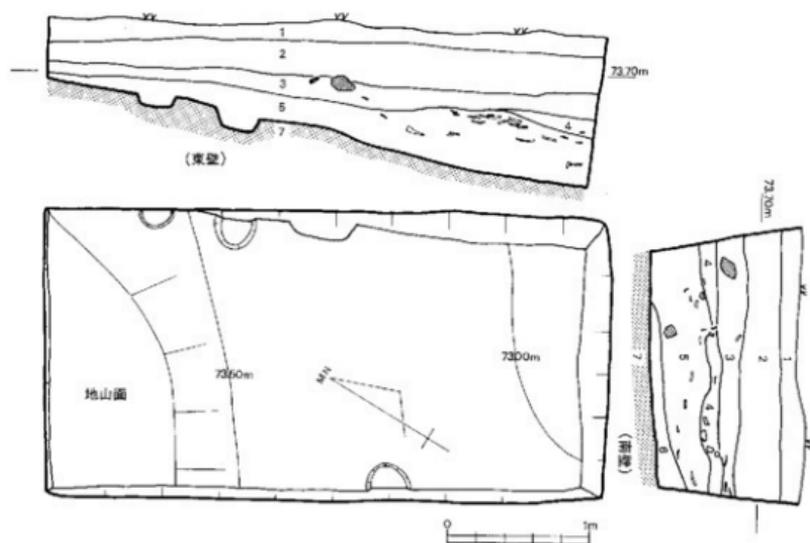
第24図 W15区遺物出土状況図（上部包含層）1/20



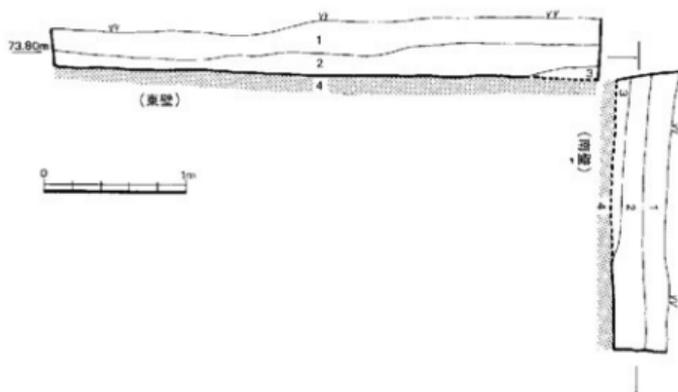
第25図 W15区遺物出土状況図 (下部包含層および貝塚) 1/20 B (骨角器・貝), S (石器および石)



第26図 W16区遺物出土状況図 (1/20)



第27图 W16区遺構・土層実測図 (1/40)



第28图 W17区土層断面図 (1/40)

#### (4) 遺 構

字カラカミの地区に関する本報の調査においては、なんらの遺構に接していない。一方字川久保地区においては若干の遺構に接しており、概要を報じる。

字川久保583-1に設定したW8区(2m×2m)において大小4箇のピットを検出した(第18図・図版34)。ピット1・2・4はそれぞれ上面径20cmで正円形でなく、比較的浅い。ピット4は径約35cmの円形を呈しているが浅い。これらのピット群は地山面から掘りこまれているが、本区においては地山上に、遺物包含層でない2C層(鏝面畑客土)が乗り、3・4層は南半部に観察される程度である。一方、ピット3以南はゆるく傾斜しているが、W4区の急激な傾斜をもつ地山に対応する「沢」状地形の北岸であろう。このことからして当該のピット群の所属時期と性格については不明であり、単なる地山の凹みの可能性もある。

字川久保585に設定したW10区および10補充区において、隅丸方形の土塊を検出した(第21図・図版42・43)。W10区は、昭和58年秋季と昭和59年度に継続して調査を実施したが、同区南辺において急激に地山が北側に傾いている地点であり、当該の遺構はこの地山の直上にある茶褐色の粘質土層(第5層)上面から掘りこまれている。一方、3・4層は遺物を多量に包含する土層であり、当該の遺構が弥生時代を下ることはあり得ない。当該土塊の規模は南北幅約1.2m、東西の規模は試掘坑の壁で知り得ないが、いずれにしても長方形の平面観を有する土塊であるが、なんら内部施設を伴っていない。ただ、W10区東壁に本遺構から発する幅5cmの小溝があり、東壁直下において再度幅広の土塊に連なっている。一方、方形土塊の北側には径20cm程度のピット4箇が検出されているがピット底に充填物はなく、柱穴であるか否か不明である。また、方形土塊とした遺構の性格も現時点では不明のまま報じておく。(正 林)

#### (5) 遺 物

##### ○土器(図版54~79)

川久保地区の調査において、弥生時代から近世までの土器・陶磁器が出土したが、ここでは遺物の中心をなす弥生土器と古式土器、および朝鮮半島系の土器について紹介したい。しかし、今回は遺物を図化する時間的余裕がなく、写真図版による説明にならざるを得なかった。これについては、改めて報告の機会をつくり責を果たしたいと思う。なお当地区は、583-1番地(W1~9区)、585番地(W10~14区)、586番地(W15~17区)に分れるので、地番ごとに記述したい。

##### W1~9区(図版54~68)

W1~9区は、3~5層が遺物包含層である。一括出土は、3層がW4区、4層がW4・W7区、5層がW5・W6区でとらえられた。層位別に土器を観視したい。

W4区の3層からは夥しい数の土器が一括出土し、朝鮮半島系の陶質土器が相伴した。土器

は完形にちかいかいものが多く、かなりの数が復原できた。

1～26・52・53・56・59は3層出土の壺である。1・3・4～6・9・26・56は広口壺である。1は口縁端部を一部欠損する他は完形の資料。9も口縁を部分的に欠損する。17～21・23～25・59は複合口縁壺である。口縁はやや内湾ぎみに屈曲するものと直線的に屈曲しのびるものがある。17は丹塗土器。20は完形品で、頸部界の突帯直下に「个」の線刻(77)が施され、胴部には焼成後の穿孔が認められる。15・16は長頸壺の口頸部で、10～13・53のような扁球形の胴部がつくと思われる。52は端部が少し欠ける他は完形で、口頸部にはタタキ痕が残る。2・22は口縁部を打ち欠き上端を揃えている。44は下向きの注口がついた壺(注口土器)である。

27～41・66・61は「く」字形に口縁が外反する甕で、体中位に最大径をもち、底部は平底か、凸レンズ状底をなす。27～30は比較的小形の甕である。41は「く」字形に口縁が外反する鉢で、底部は平底を呈する。

42～45・64～66は高環である。42・43・65は坏部上半が屈曲し、口縁がやや短く外反するもので、43はほぼ完形の資料。65・66は同一個体である。44は坏部上半が直立ぎみにのびる。

46～51・70・71は器台である。46・47は小形の完形で、46は壺形器台である。46は終末期の資料であろう。48～50・70は体部が筒状をなし、上下に開くもの。51・71はくびれが上部にあり強く開くものである。

78・79は文様が施された土器である。78は篋瓦復文がつけられた壺破片。79は「口」の線刻が施された丹塗壺の頸部破片である。

72～76は朝鮮半島系の陶器類で、73・74は2層から出土し、他は3層出土である。73は鉢の口縁部と思われ、逆「L」字形に屈折する。焼成は軟質である。74は二段に稜をもつ蓋破片で、稜間に寛先による短線がはいる。焼成は硬質。72は扁球形胴部の壺で、縄文のタタキが施され、体上半に18条の沈線がめぐる。底部内面付近には弧状の当て板痕が残る、他はナデ仕上げされる。焼成は硬質。76は73と同一個体であろう。75は格子目状のタタキがはいる。

以上の土器群は、一部終末に下るものもあるが、主体は後期中頃から後半にかけての時期に比定できる。共伴出土した陶質土器(72)の時期がおさえられたことは成果の一つであろう。

4層一括はW4区とW7区から出土した。調査識別にみてみたい。

W4区の4層出土品は、3層一括に比べると破片資料が大半で、復原できたのはそれほど多くない。54・55・57・58は壺である。54は丹塗の直口壺。58は口縁を部分的に欠損する他は完形で、胴部には焼成後の穿孔が施されている。底部は凸レンズ状底をなす。62・63は甕である。63は脚台状の台付甕で中九州地方系統の甕に類似する。67～69は器台である。67は小形の完形で、くびれがやや上部にあり上下に開く。図示していないが直線的に屈曲する複合口縁壺破片も出土しているので、W4区4層の上器は下限が後期後半まで下ることが考えられる。

93～95・97～106はW7区4層一括出土品である。108～110は丹塗壺。93～107は甕で97～104は丹塗である。甕の形態などによって中期後半から後期前半の時期が与えられる。

したがって、W4区とW7区では時期的に様相が異なり、4層は中期後半から後期後半までの資料を含んでいることになる。

5層一括はW6区でとらえられた。90・91は丹塗壺。80～88・96は壺で、88・89は丹塗である。92は丹塗の高坏脚部である。壺形土器は中期前半～後期前半頃までの時期であり、4層はそれ以降に堆積したことが考えられる。

W6区の4層から格子目風タタキの陶質土器(179)が出土しており、文様のある土器も3層から192・193、4層から190・191が出土している。192と193は同一個体であろう。

#### W10～14区(図版69～77)

3層からは、古式土師器の壺・甕・鉢・高坏が出土した。214は複合口縁壺。217は庄内式新相の甕。212・213・218～220・223・224は布留式の甕。140は丸底の鉢。216は短脚の高坏である。

4層の良好な一括出土はW10区でみられた。129・135・136は壺である。129・136は広口壺、135は丹塗の袋状口縁壺である。126～128・130～134・141～146は壺である。中期後半から後期前半の資料である。138・139は丹塗土器である。138は蓋。139は長い筒状の破片で側面は透かしによるケズリがなされている。筒形器台の破片であろう。

W10区では方形土壌が検出され、遺構内一括出土がみられた。137・147～158は丹塗土器である。147～152、162は壺形土器。153～159は壺。160は鉢。161は高坏脚部。137は瓢箪形の土器で、体上部に丸く孔がつけられ、蓋をぶらさげるためであろうか、小さな孔が1ヶ所みられる。上方は放射状に線をいれ、頂部に小さな凹みがある。163～176は壺である。中期中頃から後期前半の資料である。177は椀状の鉢である。

文様のある土器は、W10区とW14区で出土している。187は黒色の顔料で三角形の文様を描いている。W10区方形土壌出土。188・189は柳描文でW10区3層出土。185は篋先によって重弧状の文様を描いている。W14区3層出土。W6区192・193と同一個体と考えられる。

#### W15～16区(図版75・77・78・79)

W16区では3～5層に分けられ、3層は中期末～後期前半の土器、5層からは前期末、中期中頃の土器が出土した。W15区出土土器は3層出土である。

225は板付II式甕の口縁部破片である。口唇には刻目を施し、体上部に沈線をめぐらしている。巻頭胴版の貝殻腹縁による羽状文を施す破片は高槻式の壺である。235・239・245・246は壺で、235は城ノ越式、245・246は須玖式である。236～238・240～244は壺である。237は断面三角形口縁の城ノ越式壺、他は中期中頃～後半の時期の資料である。W15区の228・230・232・233・234は後期前半の資料である。

186はW15区排土中から出土した線刻土器である。鋭い施文具で舟のような文様を描いている。

朝鮮半島系の土器は、W10区とW12区で出土している。178は滑石を含む土器で内面には細かい

布目痕がつく。暗褐色を呈し、一見縄文中・後期の土器に類似する。W10区4層出土。180・181は縄文がつく陶質土器で、焼成は軟質。182は櫛状の文様をいれ沈線を横位にめぐらしている。焼成は軟質。3者ともW10区3層出土。183・184は鉢形の軟質陶質土器で、口縁は逆「L」字形に屈折する。W12区から出土し、183は3層、184は4層出土。(宮崎)

#### ○石器(図版80~96)

カラカミ神社東辺、字川久保583-1・585・586の調査において出土した石器の数は多いが詳述を避けて報告する。出土石器の中で最多量を占めるのは凹石および叩き石である。凹石は800~1kg程度のやや扁平な円礫を用いるもので、扁平面が敲打されて粗面の凹部を持つものである。粗面の凹部は片面もしくは両面のももある。図版80-2(760g)・図版87-59(920g)・図版89-93(1120g)等は典型である。叩き石はやや長めの円礫の辺端、もしくはやや扁平な円礫の側辺部が敲打によって磨耗し粗面を形成するもので、しばしば凹石の側辺が敲打されて側辺が粗面を形成しているものもある。図版80-7~9、図版82-32、図版86-50、図版87-61等は典型的である。凹石の側辺が敲打されて粗面を形成した例も多く、図版86-48、図版88-76、同78等に例を見ることができる。この凹石と叩き石の大部分は海岸に見られる美麗な安山岩の円礫が用いられており、<sup>いさざね</sup>鯨伏の海岸で通常多く見られる石材である。この種の凹石と叩き石が多量に伴う点がカラカミ遺跡の石器の特長として挙げられる。

ついで数量が目だつのが砥石等の研磨具である。砥石に2種類あり、きめの粗い荒砥があり、黄色の砂岩が用いられている。図版83-34・同84-37・同85-43等がこれであり、老岐島北岸申島に多く見られる石材が用いられている。次に図版81-23・同82-30・同83-35等に見るきめ細かい老岐島北岸申島産の石材を用いた上砥がある。これらは、それ自体を固定して被研磨体を砥ぐ、いわゆる砥石であるが、注目されるのは、比較的小形で研ぎ面がガラス状の光沢をおびる研磨具である。図版86-64は圓の高側とコケシ状の上端がガラス状の光沢をおびており、図版82-27等がその例であり、図版92-118のごとく、叩き石の一部に同様の光沢をもつものもある。これらは、荒砥・上砥に比して小形であり、それ自体を固定して用いるものでなく、手に保持して用いるものと考えられ、前述の荒砥・上砥と区別して研磨砥と仮称しておく。

「くど石」が多く出土している。高さ25cm前後の鈍端な紡錘形をして、底面を平らにしたものであるが、図版84-39のごとく扁平なものもあり、図版93-133のごとく礫の表面を削りおとして整形したものもある。また、図版95-155のごとく焼けてススの付着したものもある。材質は脆弱な集塊岩を用いるもの(図版84-39・40)が多いが、図版93-133は軟質の火山岩を用いているものであり、整形加工の容易な石材が選ばれている。

図版80-10~13は安山岩の不整な礫の側縁に打撃を加えて粗い剝離痕を残した顕器も目立った。図版86-51・52、54・55も同様の礫器である。有明海沿岸から西北九州の縄文遺跡に顕著な、尖端部を有する礫器は定形的であるが、本遺跡の出土例とは明らかに異なる。

切目石錘の良好な出土資料も目立つ。図版87-67~68、図版96-158~160の3例すべてを示したとおり、量的には少ない。Aは紡錘形のもの（図版87-67、図版96-158-160）、Bは長方形のもの（図版87-68、図版96-159）がある。Aは上下高3~4cmで、断面形は楕円形を示し、縦方向に表裏各1条の細い「切目」がある。いずれも完形品でなく正確な重量は不明であるが、損傷の少ない図版96-160の例からすれば10~15g程度であろうか。Bは正しくは、さらに2種に分類される。略述すれば、断面長方形のもの（図版87-68）と断面楕円形のもの（図版96-159）に分れる。後者の場合、横方向にも浅い切目がある。図版87-68は6.3g、図版96-159は8gである。これらの切目石錘は、地元で「ビシ」と称され、いずれも美麗な硬質砂岩が利用されている。

石刃丁片（図版87-69~71）、黒曜石製石鏃（図版87-73~74）、ナイフ形石器（図版87-72）があるが、いずれも稀少例である。（正 林）

#### ○金属器（図版96・97）

青銅製品（1~3）と鉄製品（4~17）がある。1・3は銅鏃である。1は逆刺を若干欠損する他はほぼ完形で、鏃身に対して莖が長い形状をもつ。長さ3.9cm、重さ2.6gを測る。W5区3層出土。3は莖部分の破片で、W14区3層出土。2は同鏃の刃部片と推測される。刃先は平坦で厚さ3mm、幅2.4cmが残存する。やや湾曲し、内面には使用痕と思われる細かい擦痕が縦方向にはいる。上方には袋部先端と考えられる部分が溝状に残り、刃部長は2.5cmを測る。W4区3層壁面から出土した（第10図）。

4~17は鉄製品である。川久保地区では、16点の出土がみられた。4は無茎三角形の凹基腸状式の鉄鏃である。鉄長6.5cm、幅3.6cmを測る。W4区3層出土。11は有茎腸状三角形の鉄鏃である。W12区3~4層出土。8・13・16は有茎鏃の基部分と考えられる。8はW10区、13はW12区、14はW14区のいずれも3層出土。5・7は刃子片である。5はW4区、7はW7区の3層出土。6・10・12・14・15は鉄鏃片である。6はW5区、10はW10区4層、12はW12区3層、14・15はW14区3層出土である。9・17は釣針である。9はW10区3層、17はW14区3層出土。図示していないが、W15区3層から釣針1点、W6区4層から棒状の鉄製品が出土している。（宮 崎）

#### ○装飾品および土製品（図版96）

装飾品類には、ガラス製の管玉・丸玉・小玉、骨製玉、石製紡錘車の転用品がある。2・3はガラス製の管玉である。2は長さ1.5cm、径1.3cmの太く短めの管玉で、縦に半欠している。表面は風化のため白っぽくなっているが、部分的に青緑色味をおびる。3は長さ3.1cm、径5mmの細長い管玉で、孔径が3mmと径のわりに大きい。風化によって器表にはアバタ状の小さな凹みが多数みられ、白っぽい緑色を呈する。重さ1.1gを測る。両者ともW10区4層出土。21はガ

ラス製の切目丸玉とでも称すべき玉で、側面に7条の溝がはいる。径8mm、高さ6mm、孔径3mm、重さ0.9gを測る。表面は風化のため白黄色を呈し、部分的に青緑色をおびる。W10区4層出土。7～20は紺色・淡青色のガラス小玉である。W10区3・4層から16点出土している。他に、W8区、W14区、W15区2層から1点ずつ出土している。4は鹿角製の管玉で、長さ2.8cm、径1.5～1.7cmを測る。側面部には鋭い刃物でつけられた9条ほどの条線がはいる。装飾品でなく、組み合わせて使用される部品の可能性もある。1は径4.4cmの片麻岩製紡錘車の半欠品に6mmの孔を穿ち装飾品としたものである。重さ11.6gを測る。W10区4層出土。

5・6は土製品である。5は土製玉で、幅6mmほどの溝状の凹みが対にみられる。淡茶色で、焼成良好。黒斑が1ヶ所認められる。径1.8cm、重さ6.2gを測る。W10区2層出土。6は土製投彈である。色調は淡赤茶色から暗茶色を呈し、焼成は良好である。長さ5.5cm、最大径3.3cm、重さ42.3gを測る。  
(宮崎)

#### ○骨角器および自然遺物 (図版98～103)

従前の調査や表面採集によって、カラカミ遺跡から良好な骨角器が出土しているが、本報のカラカミ神社東辺地区においても良好な層位資料を得た。

図版98の2はフグシ形鯨骨製品である。握把部は段をつけて細く削り出されており、握把上端部も加工されている。図の裏面は扁平であるが、表は弱い稜を残してゆるくカーブしている。図の下端部は激しい損耗があり農具と考えられる。同図版の1は表面に虫喰いのあとがあるが、同種の鯨骨製品であろう。鯨骨製品としては、図版101の10～12がある。10・11は先端をうすいへら先状に研磨したもので、幅2.5cmを計るが長さは不明である。同図版には扁平な板状の鯨骨製品があるが、へら形鯨骨製の未製品であろう。

図版100の5は、W15区貝層出土の卜骨である。焼灼痕は左図の下端、中央やや左寄り部分に円形のもの3点連続する。右図の左下端はやや広く焼けているが、4点の丸い焼灼痕がある。本資料はW15区の貝層出土であるが、図版101の6～8として示したヤス状鹿骨製品も同区の出土資料である。

図版102と同103の資料は別添図2に、●6として示した国柳遺跡出土の骨角器であり、地元の研究者福田敏氏所蔵品である。骨質の保存状態よりして、良好な真塚があると考えられるが確認に至っていない。氏の御好意により本報に収録した。

自然遺物はカラカミ神社東辺の調査区ではW4・W10区でも出土しているが、W15区の貝層出土のものが多い。イノシシ・シカ・クジラのほかに各種の貝類とブダイ等の魚骨も出土している。  
(正林)

#### (6) まとめ

カラカミ神社東辺の調査は、宇唐神と字川久保の両字にまたがる広範な範囲を対象として実

施したが、遺跡範囲の確定という全体的な課題のほかに、従前検出されていない生活遺構、特に住居跡および墓地を確認したいという目的があった。饅頭畑の残っている畑地を選択したのは、厚い客土に覆われて、遺構が保存されていることを期待したが、本報の調査においても住居跡、墓地については確認に至らなかった。

一方、地表地形とは別に、字川久保586・585から、同字583-1に通じる広い沢状の地山地形があることを確認し、この沢を南北の境にして、遺物包含層に接しない区域と、豊富な遺物包含層を有する北半部にわかれることを確認した。今後においてカラカミ遺跡の調査を考えるとすれば、この点を念頭におく必要があろう。

この広幅の沢の中にある遺物包含層を調査する結果となったが、W4区における沢の南岸の急斜面における遺物の出土状態と量が注目された。この地点の遺物で注目されたのはいわゆる漢式土器と弥生式土器の共伴であるが、土器の保存状態がよく完形品の多さが注目され、損壊した土器も完形に近い状態に復元可能なものが多い点が注目された。これらの土器群は完形状態ではあるが、穿孔や一部分の人為的と考えられる打ち欠きなどの軽微な損傷があり、かつ、高環・器台・丹塗土器の多い点が目立った。また、一見、急傾斜面に流入した状態であるものの土器に磨耗の見られない点からして、他地点からの自然流入でなく、人為的に廃棄された可能性が指摘された。

一方、石器の組成を見ると、多量の叩き石と凹石の共伴が注目される反面、石庵丁・紡錘車・片刃石器等はごく少量で、明確な組成関係にあるとは考え難い。また磨製石器の微量に比して荒砥・上砥・研磨砥の量が注目される所であり、磨製石器用の研磨具でない可能性がある。特に研磨砥と仮称した砥石のガラス状光沢は、鉄製品を水なして研磨した堅緻な砥石の表面光沢に似ている点に注目しておきたい。

(正 林)



1. 川久保地区遠景（北から） 2. 調査風景（後方の森がカラカミ神社）



1. エボン様地の鎮祭 2. W4区発掘風景



1. 見学風景 2. 農林サイドとの協議風景



W 4 区 3 層遺物出土状況 (北から)



1



2

W4区3層遺物出土状況 1. 北から 2. 東から



W4区3層遺物出土状況 1. 西から 2. 東から



W4区遺物出土状況 1. 4層獣骨出土状況 2. 東壁



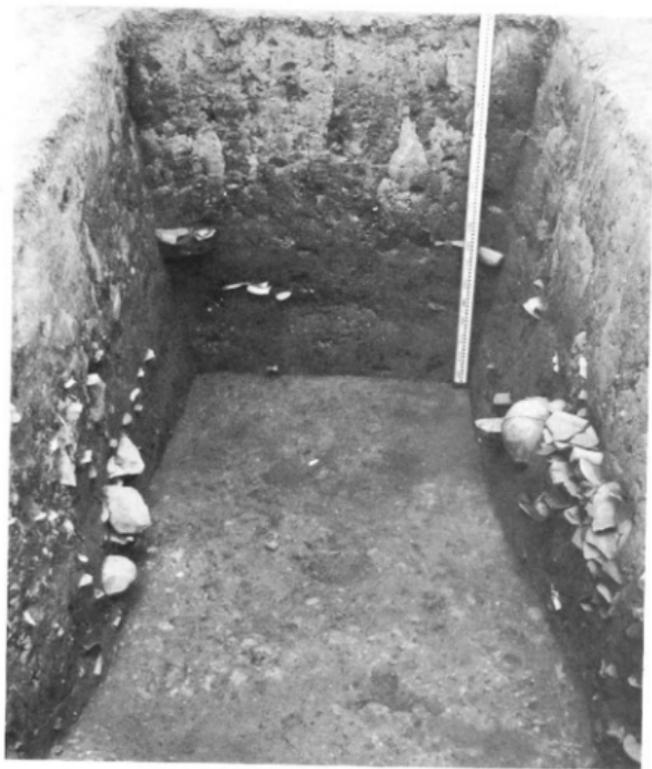
W 4 区 4 層遺物出土状況 (北から)



W4区4層遺物出土状況 1. 西から 2. 東から



W4区4層遺物出土状況（鯨骨製品など）

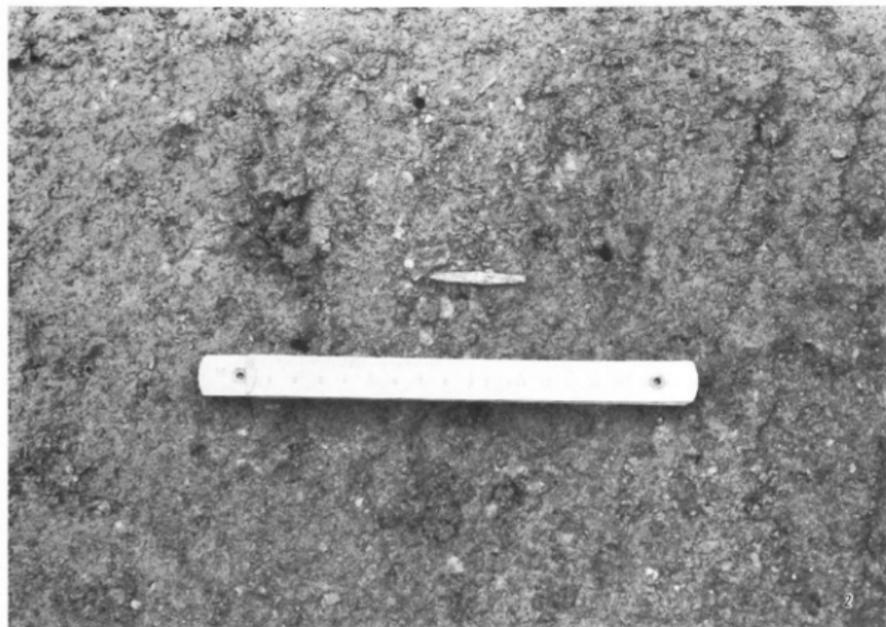


1



2

W4区完掘状況 1.北壁など 2.東壁



W5区3層遺物出土状況 1. 銅鏃など 2. 骨鏃



1. W5区東壁土層 2. 同, 5層遺物出土状況(南から)



1. W6区北壁土層 2. 同, 4層遺物出土狀況



W6区5層遺物出土状況 1. 東から 2. 南から



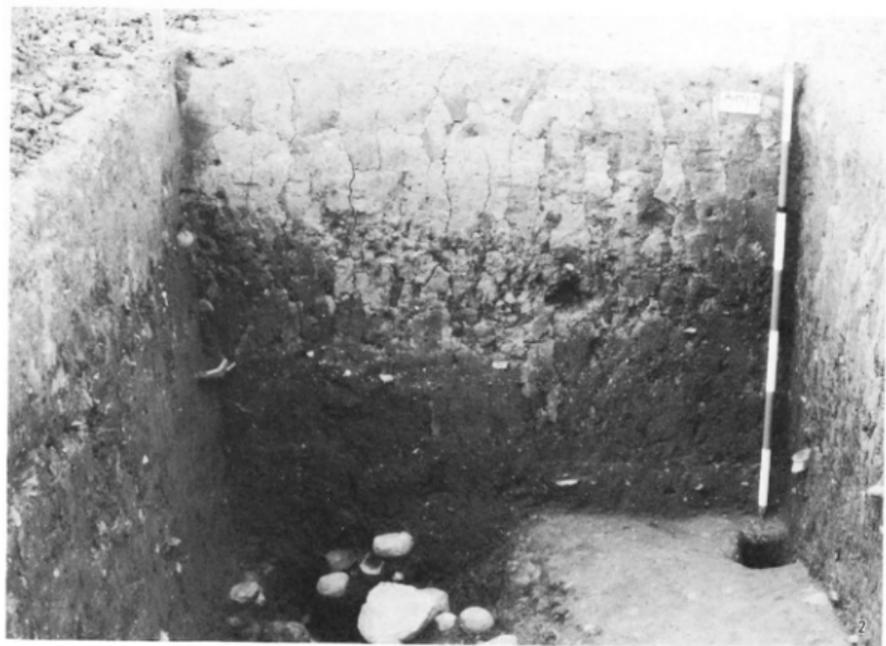
1. W7区北壁土層 2. 4層遺物出土状況(南から)



1. W 8 区北壁土层 2. 间, 検出状況

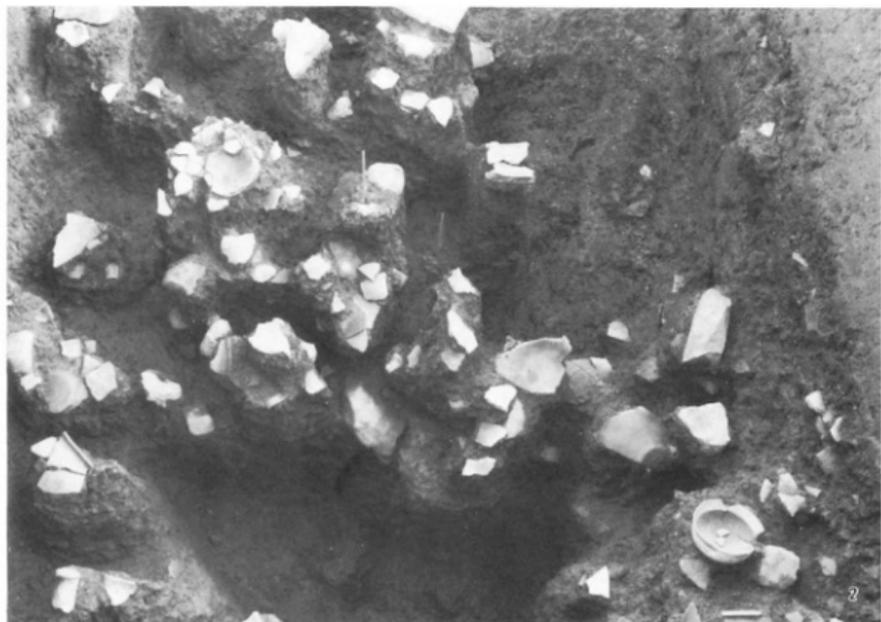


1. W8区検出状況(東から) 2. W9区検出状況(南から)

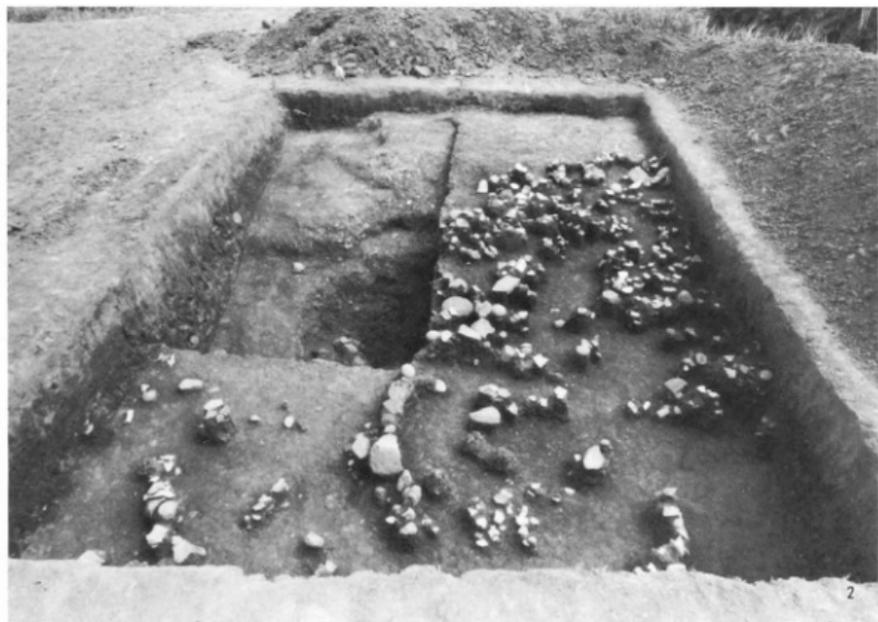


W10区58年度調査墳 1. 東壁 2. 北壁





W10区58年度3層遺物出土状況 1. 東から 2. 北から



W10区59年度3層遺物出土状況 1. 東から 2. 北から



W10区59年度4層遺物出土状況 1、北から 2、南から



W10区59年度4層遺物出土状況 1. 南から 2. 西から



W10区59年度遺物出土状況 1. 4層遺物 2. 5層遺物



W10区方形土壇 1. 北から 2. 東から



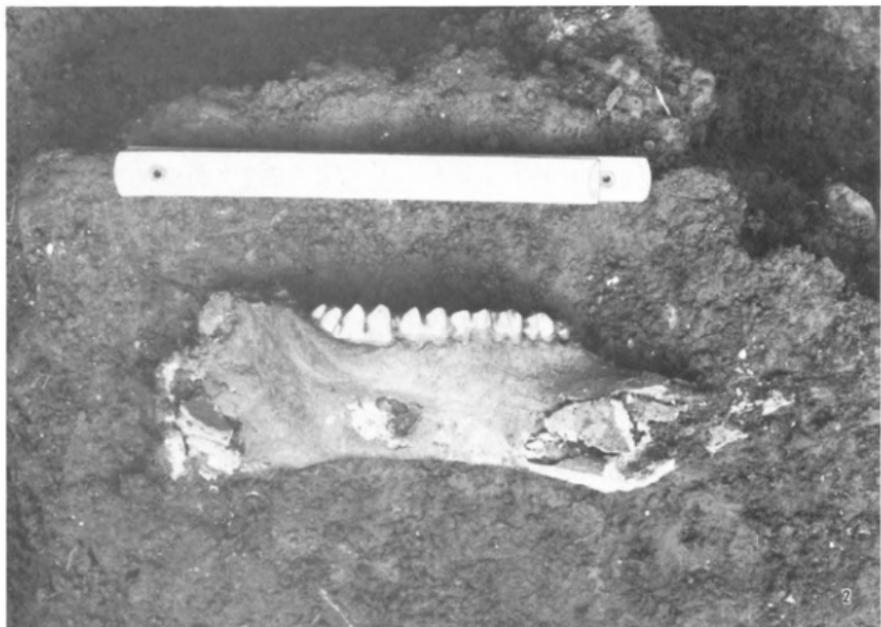
W10区方形土壘遺物出土状況 1. 東から 2. 北から



1. W12区北壁土層 2. 同, 3層遺物出土状況(東から)



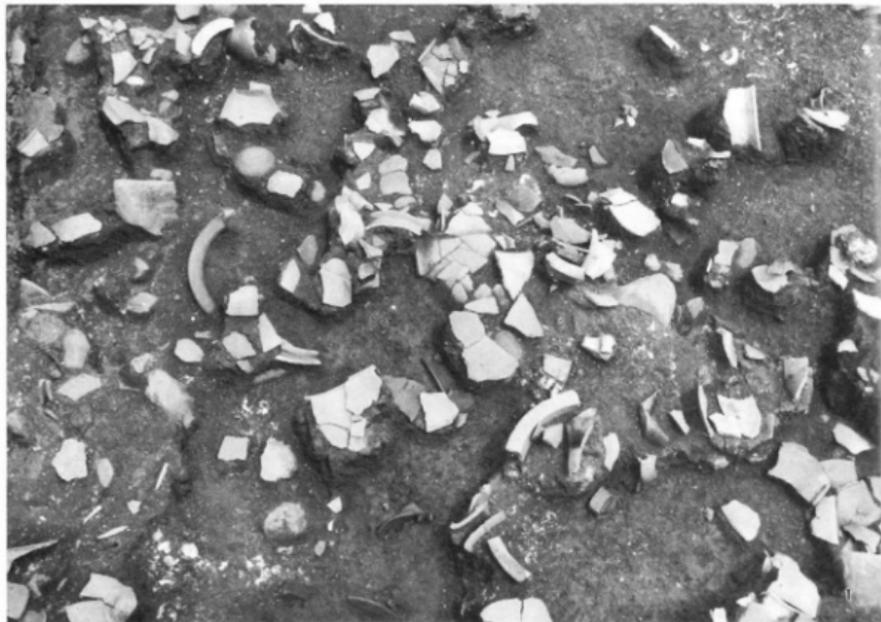
W14区土層断面 1、東壁 2、北壁



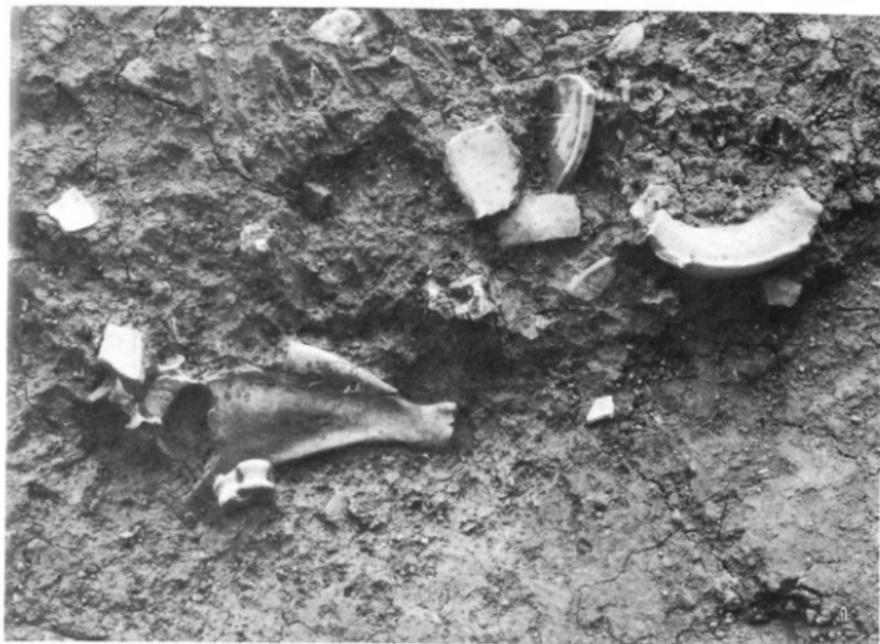
W14区3層遺物出土状況 1、東から 2、イノシシ下顎骨



W15区3層遺物出土状況 1. 南東から 2. 北東から



W15区3層遺物出土状況 1. 南西から 2. 北東から



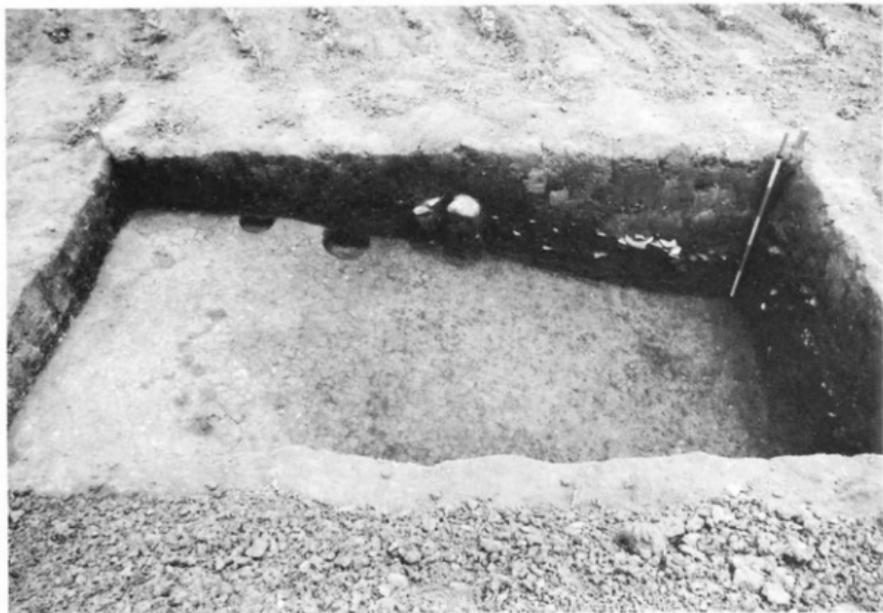
W15区ト骨出土状況（南東から）



W15区3層遺物出土状況 1. 獣骨など 2. ヤス状骨角器



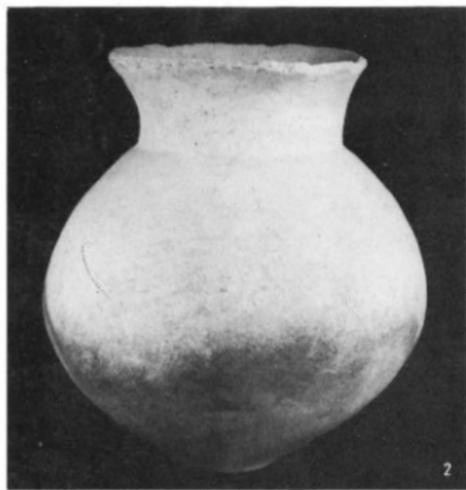
W15区3層遺物出土状況 1、切目石鎚 2、ヘラ形骨角器



W16区土層壁面 1. 北東壁 2. 南東壁



W16区5層遺物出土状況 1. 方柱状磨製石斧 2. 獣骨など



W 4 区58年度出土土器 (1/4)



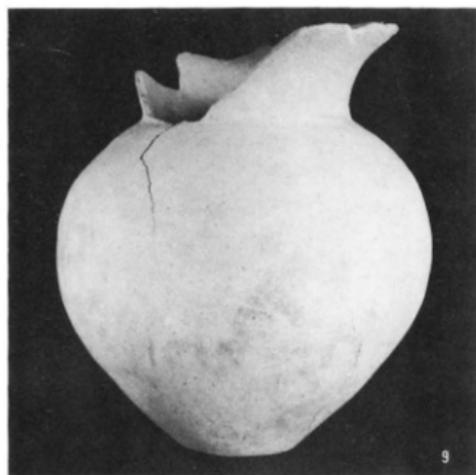
8



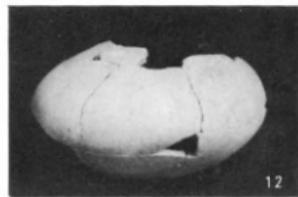
10



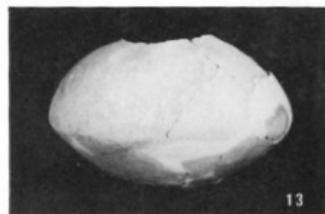
11



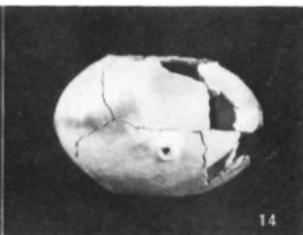
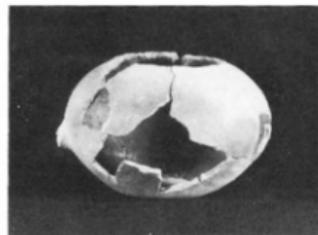
9



12



13



14



15

W 4 区58年度出土土器 (1/4)

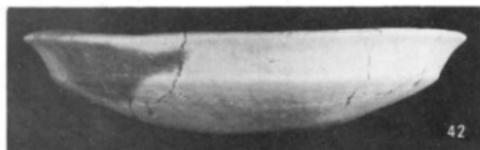


W 4 区58年度出土土器 (1/4)





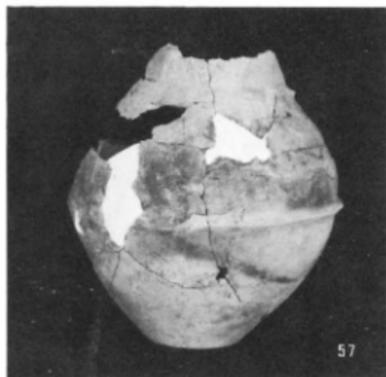
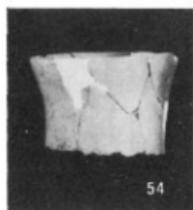




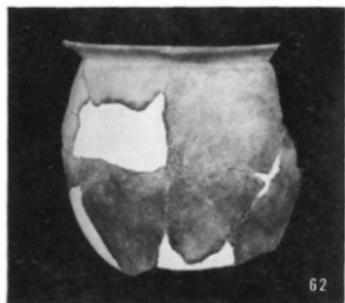
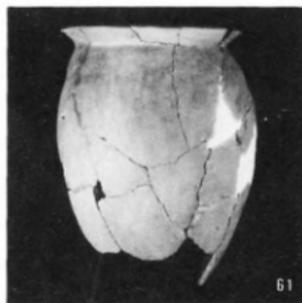
W 4 区58年度出土土器 (39~41は1/6, 他は1/4)



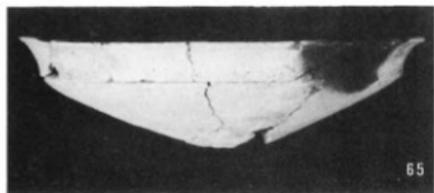
W 4 区58年度出土土器 (1/4)



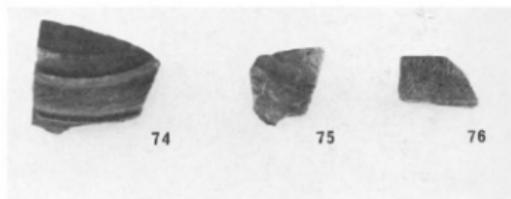
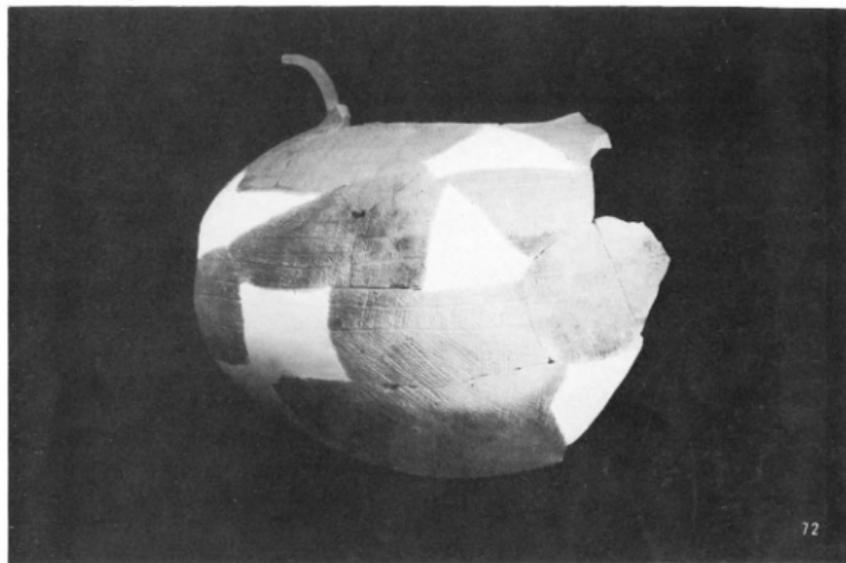
W 4 区59年度出土土器 (57・58が1/6, 他は1/4)



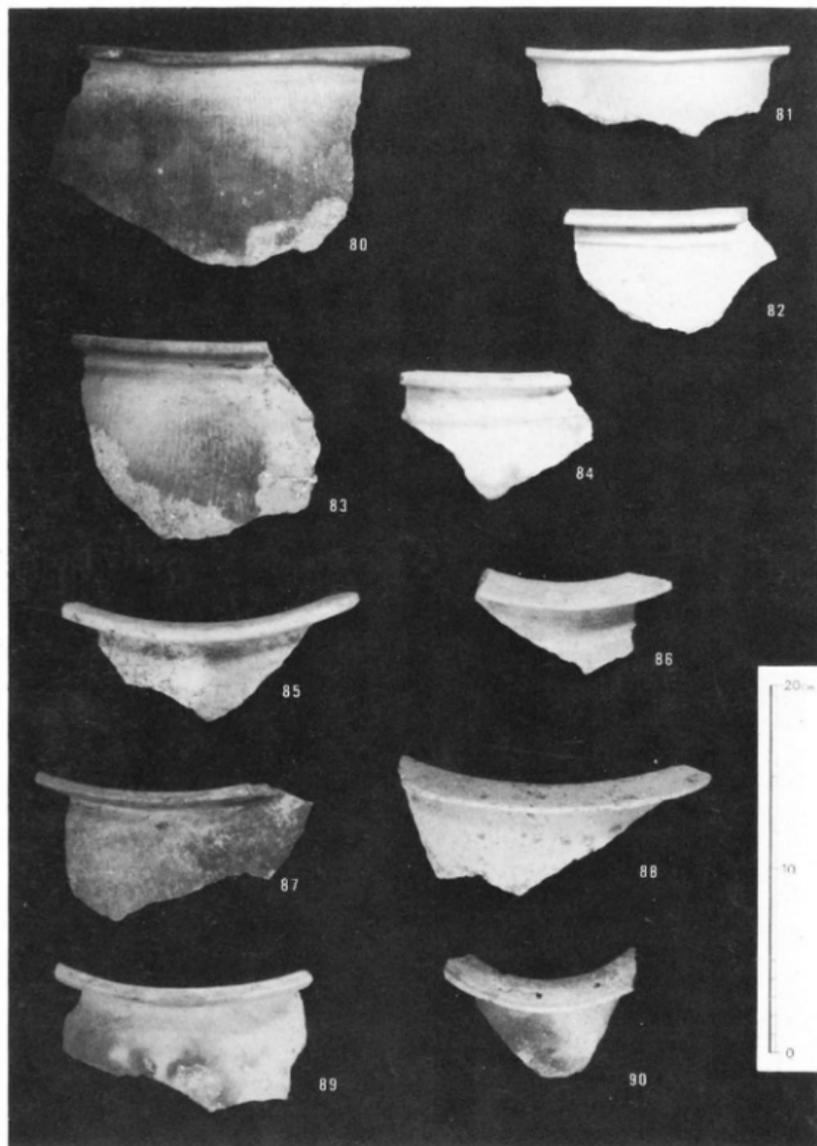
W 4 区59年度出土土器 (63・64は1/4, 他は1/6)



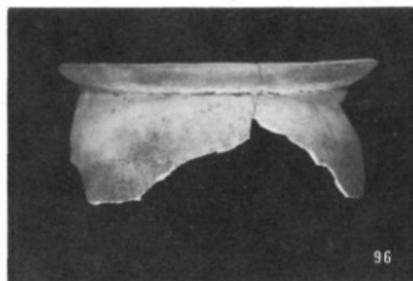
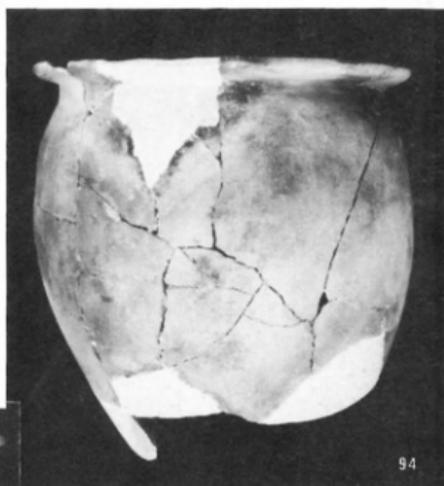
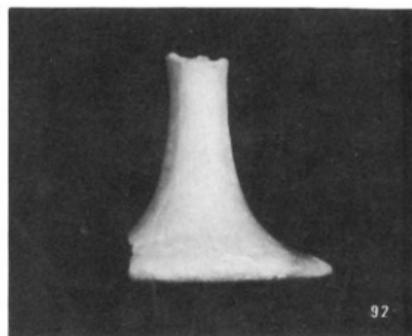
W 4 区59年度出土土器 (1/4)



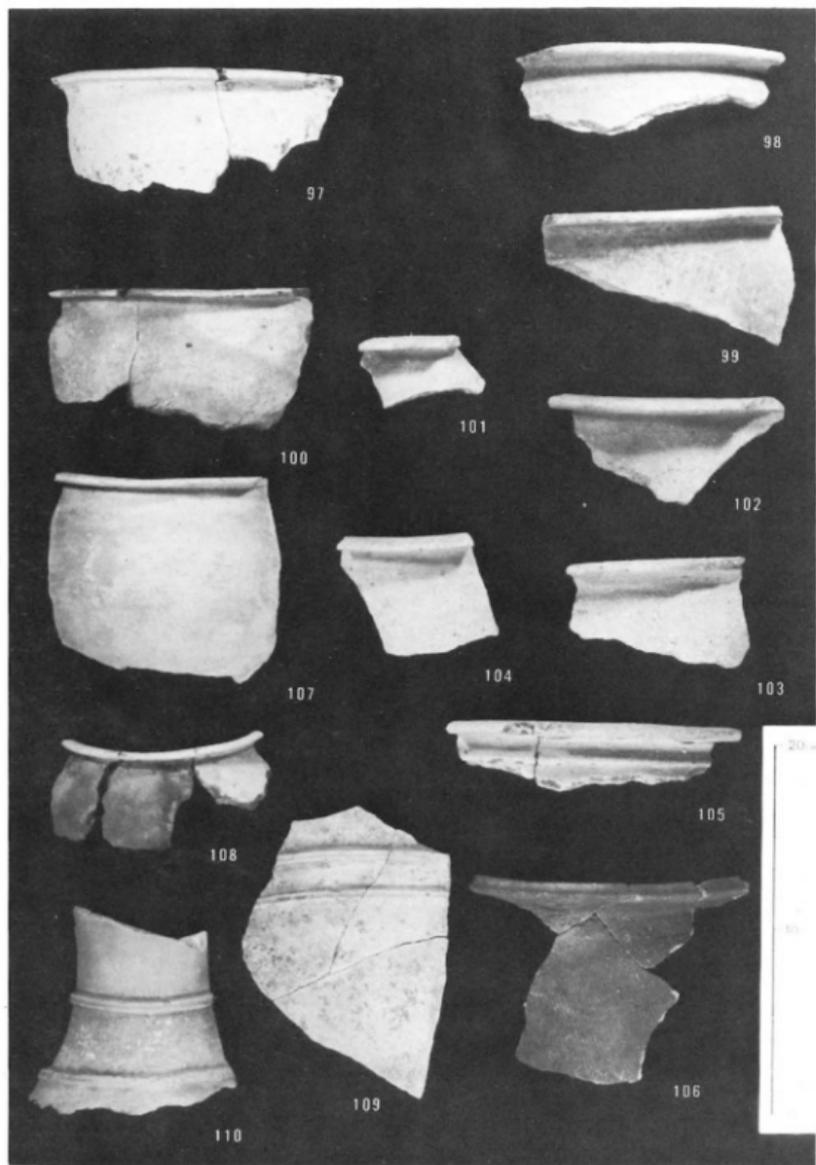
W 4 区出土船載土器・文様のある土器 (72は1/4, 他は1/2)



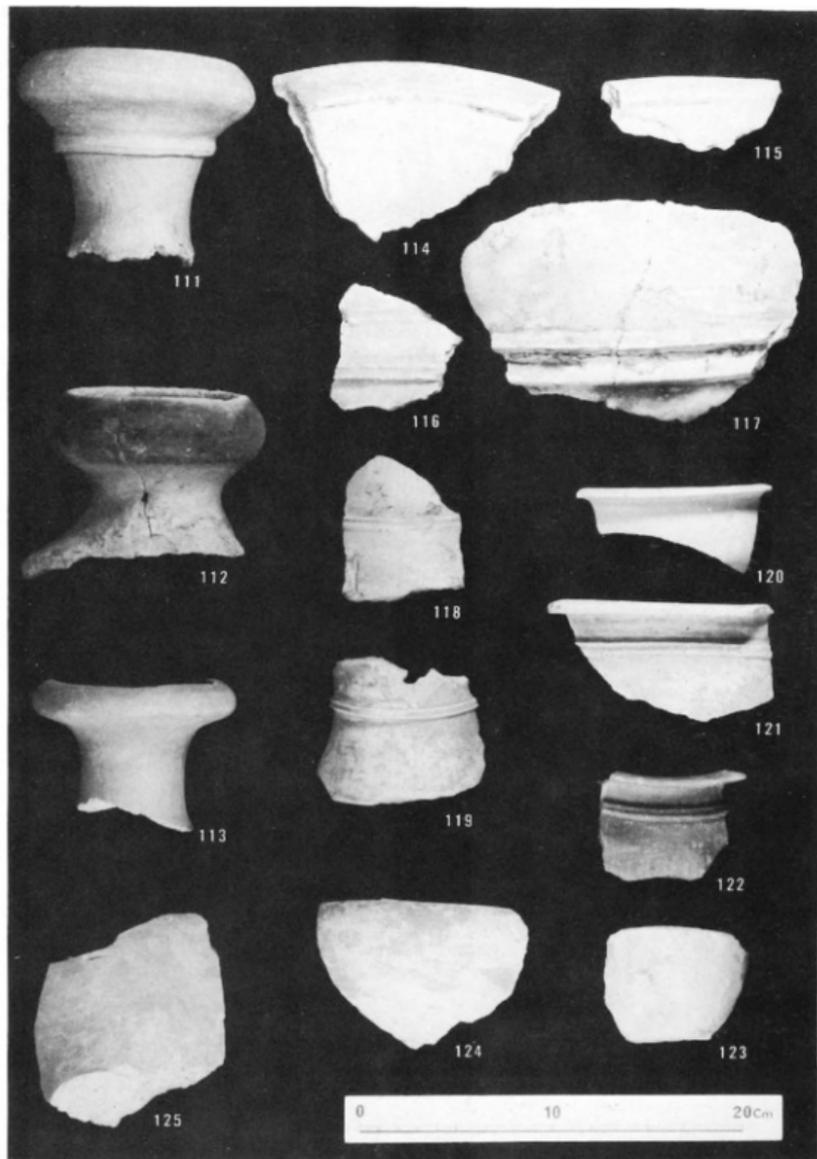
W 6 区出土土器 (1/3)



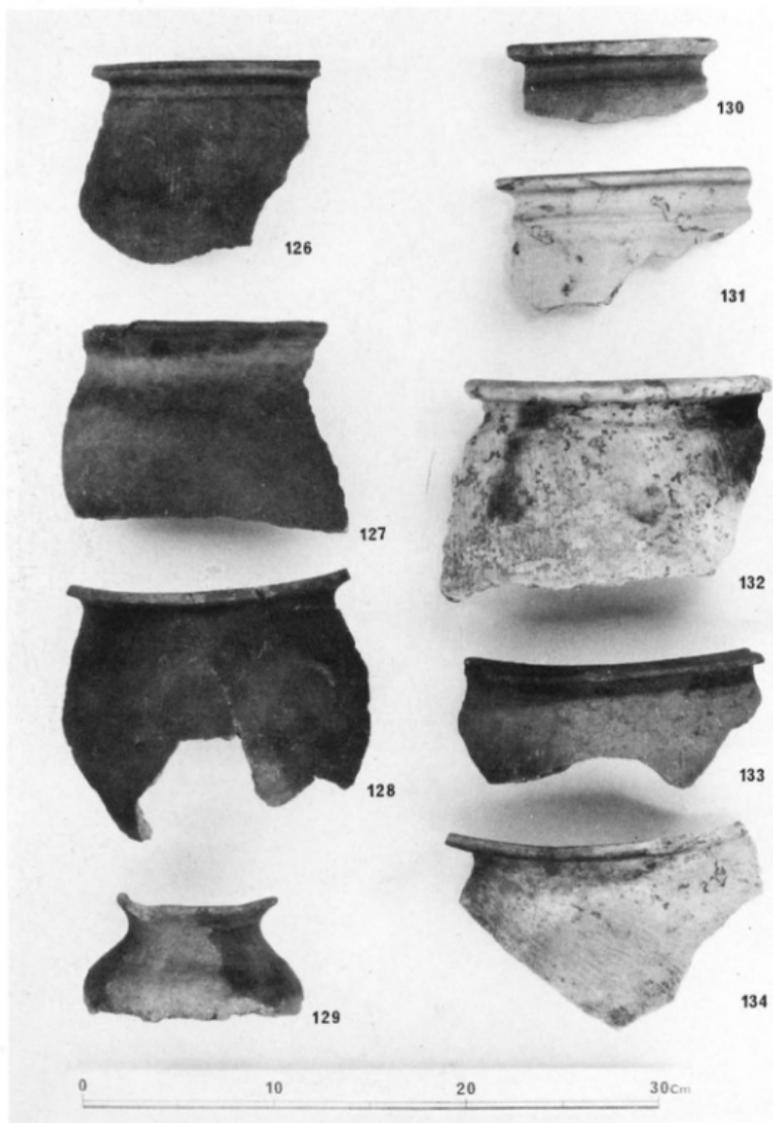
W 6 · 7 区出土土器 (1/4) W 6 (91 · 92 · 96), W 7 (93 ~ 95)



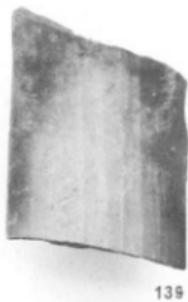
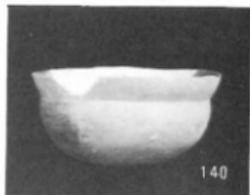
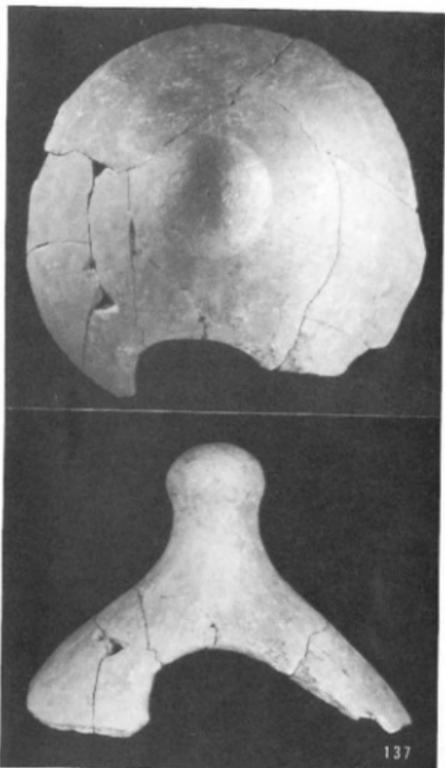
W7区出土土器 (1/3)

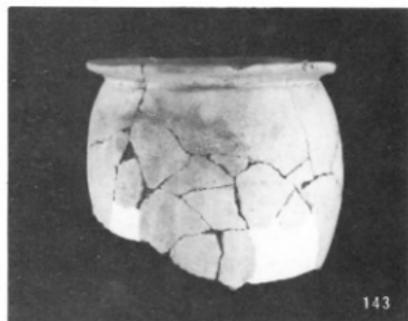
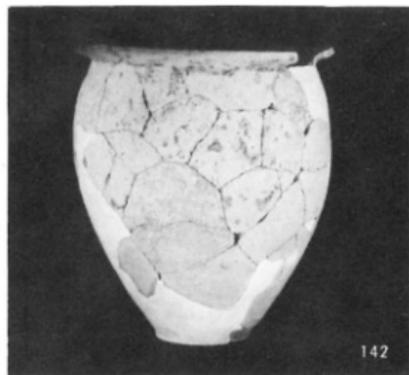


W10区出土土器 (1/3) 58年度調査出土

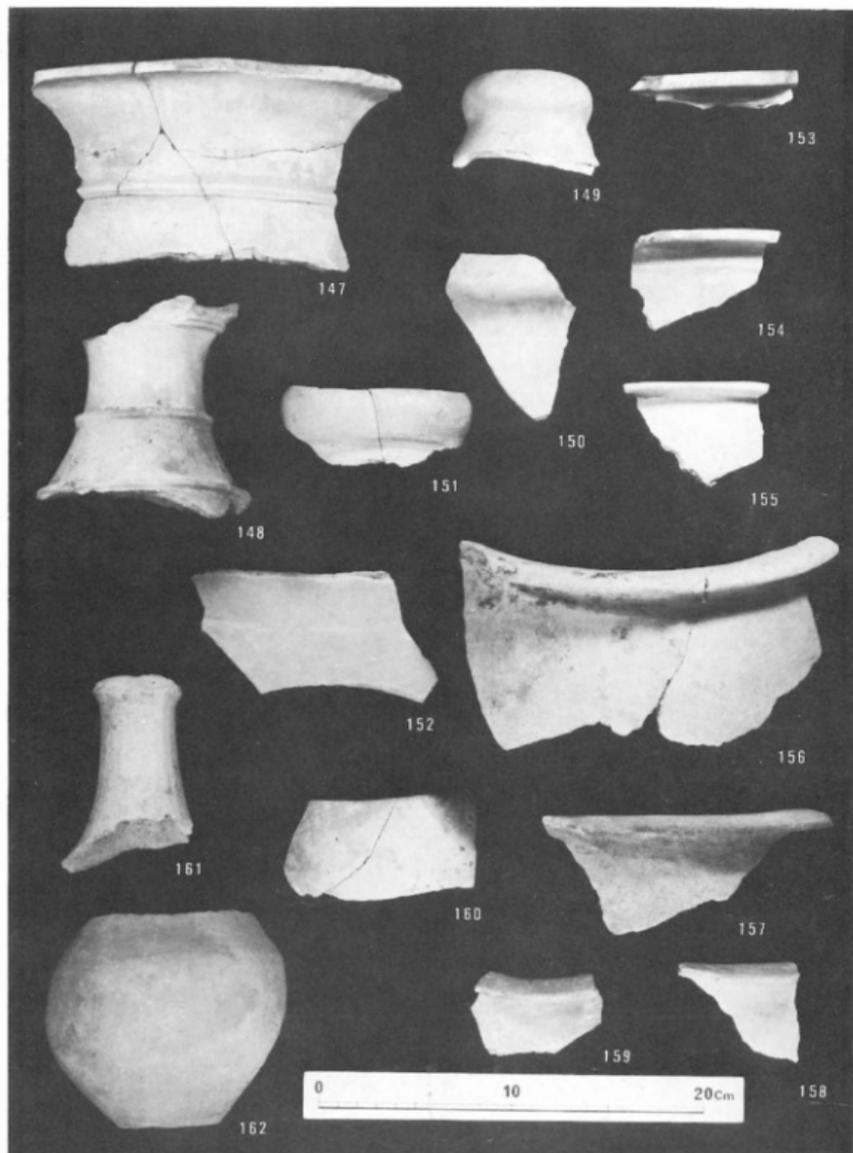


W10区出土土器 (1/3)

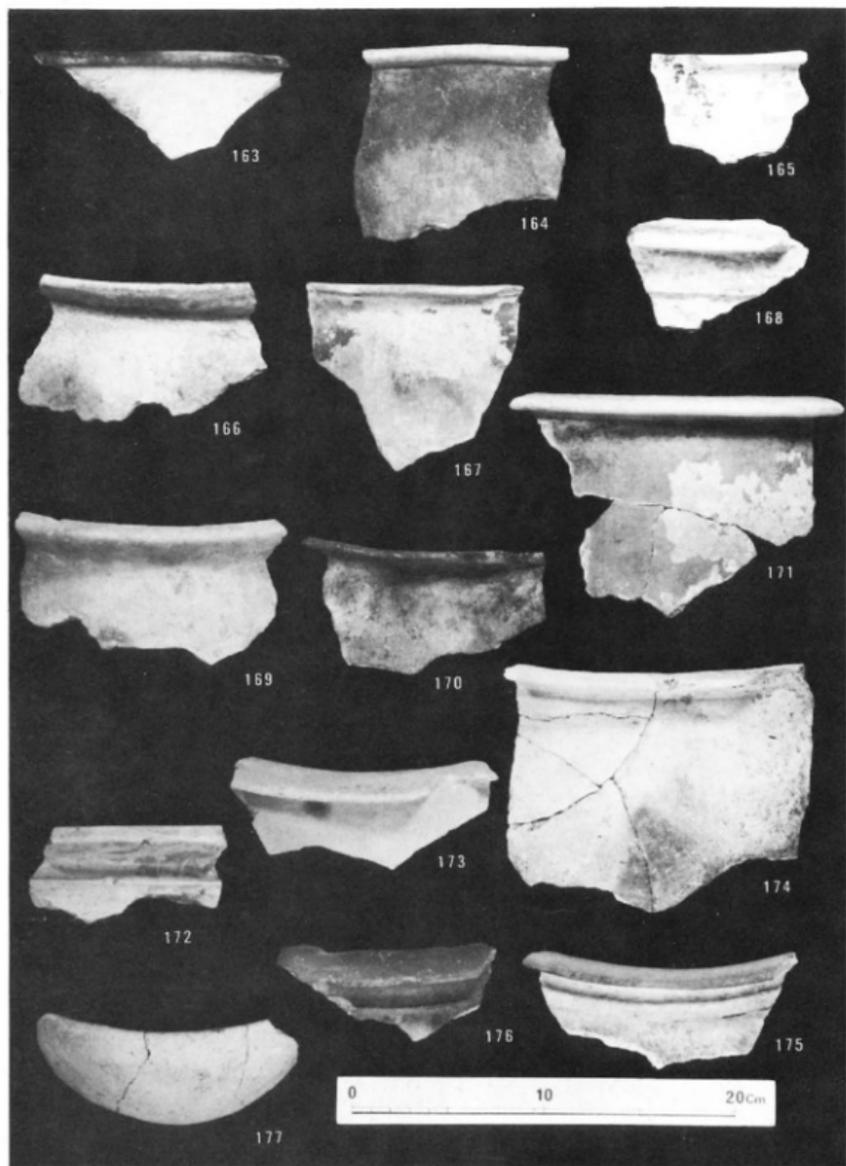




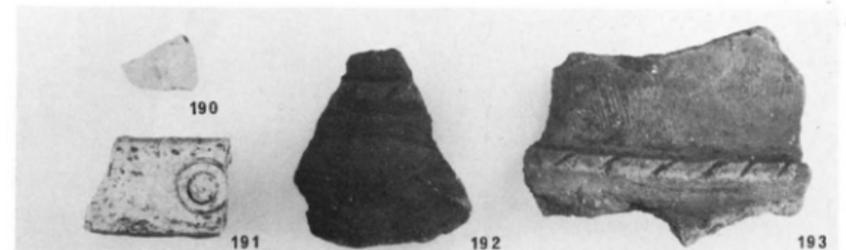
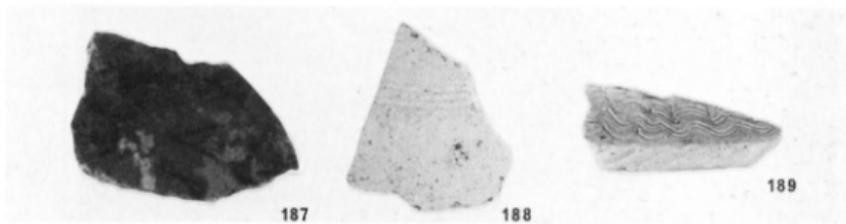
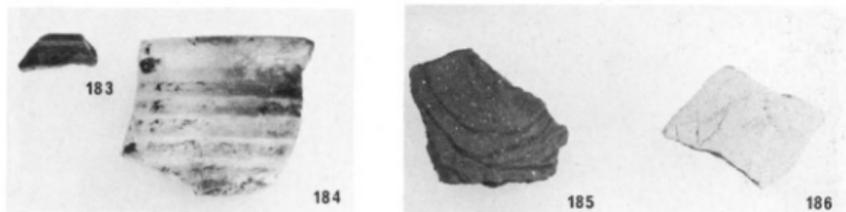
W10区出土土器 (145・146は1/4, 他は1/6)



W10区方形土坑出土土器 (1/3)

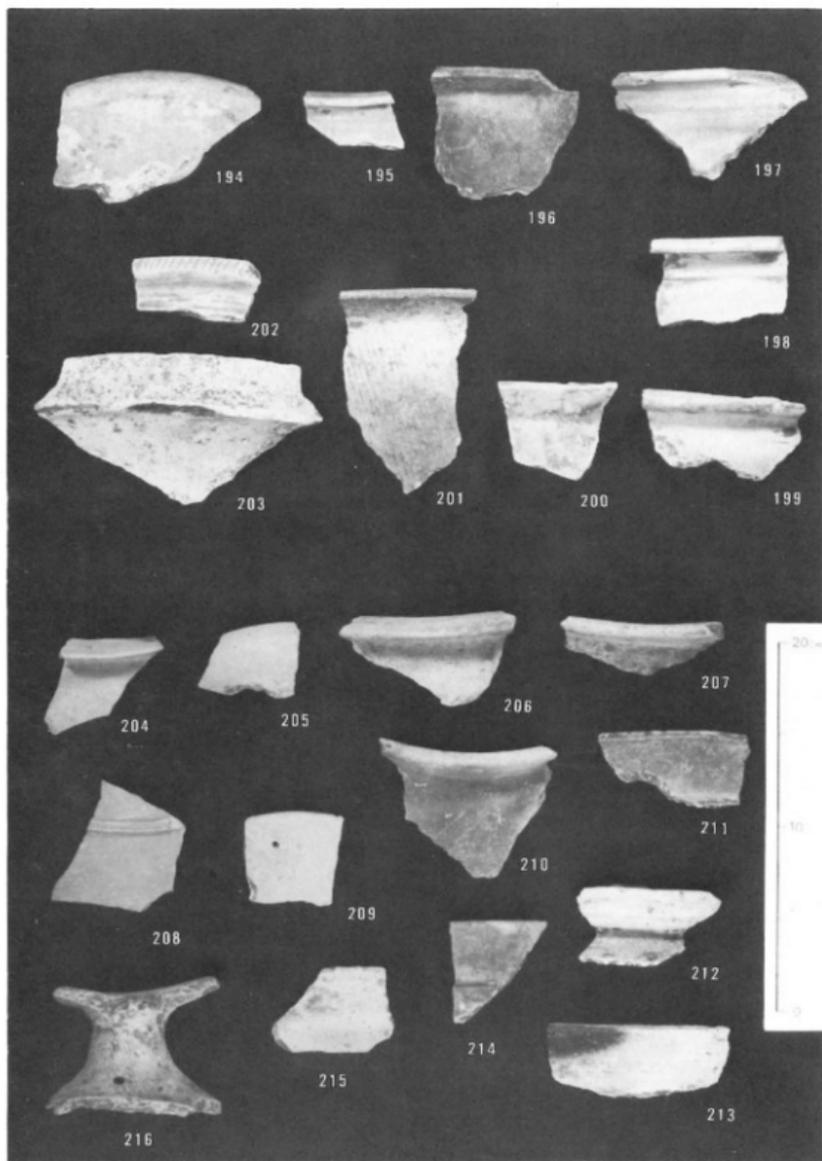


W 10区方形土壤出土土器 (1/3)

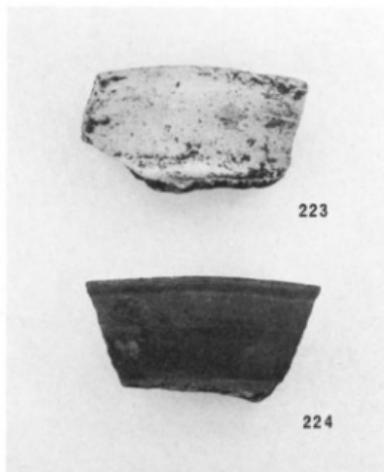
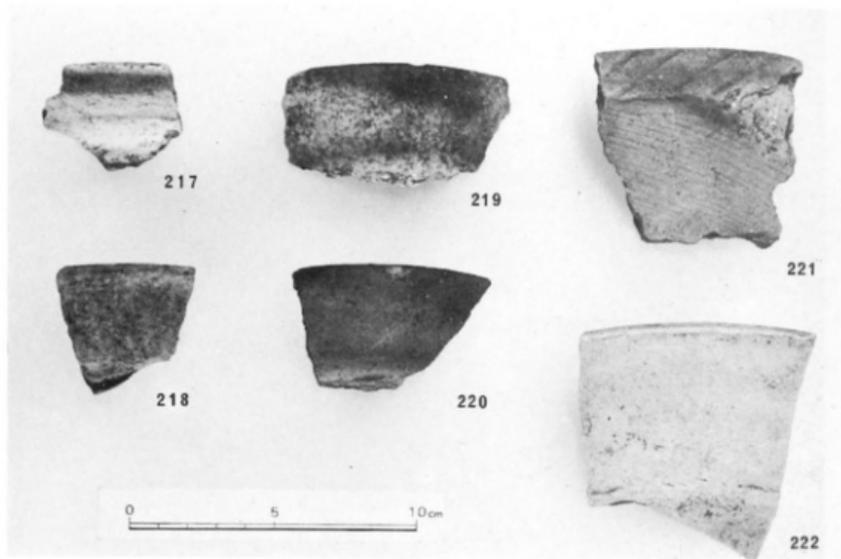


川久保 (W) 地区出土船載土器・文様のある土器 (1/2)

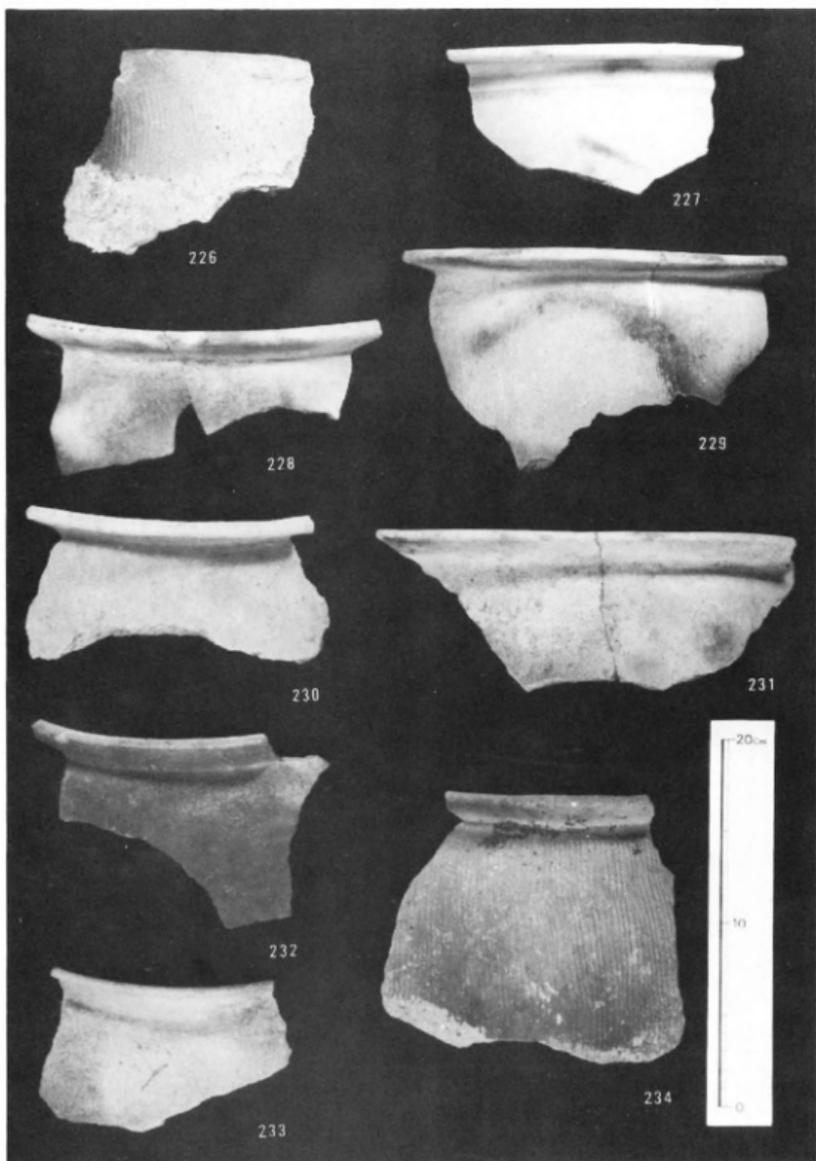
W 6 (179・190~193), W 10 (178・180~182・187~189), W 12 (183・184), W 14 (185), W 15 (186)



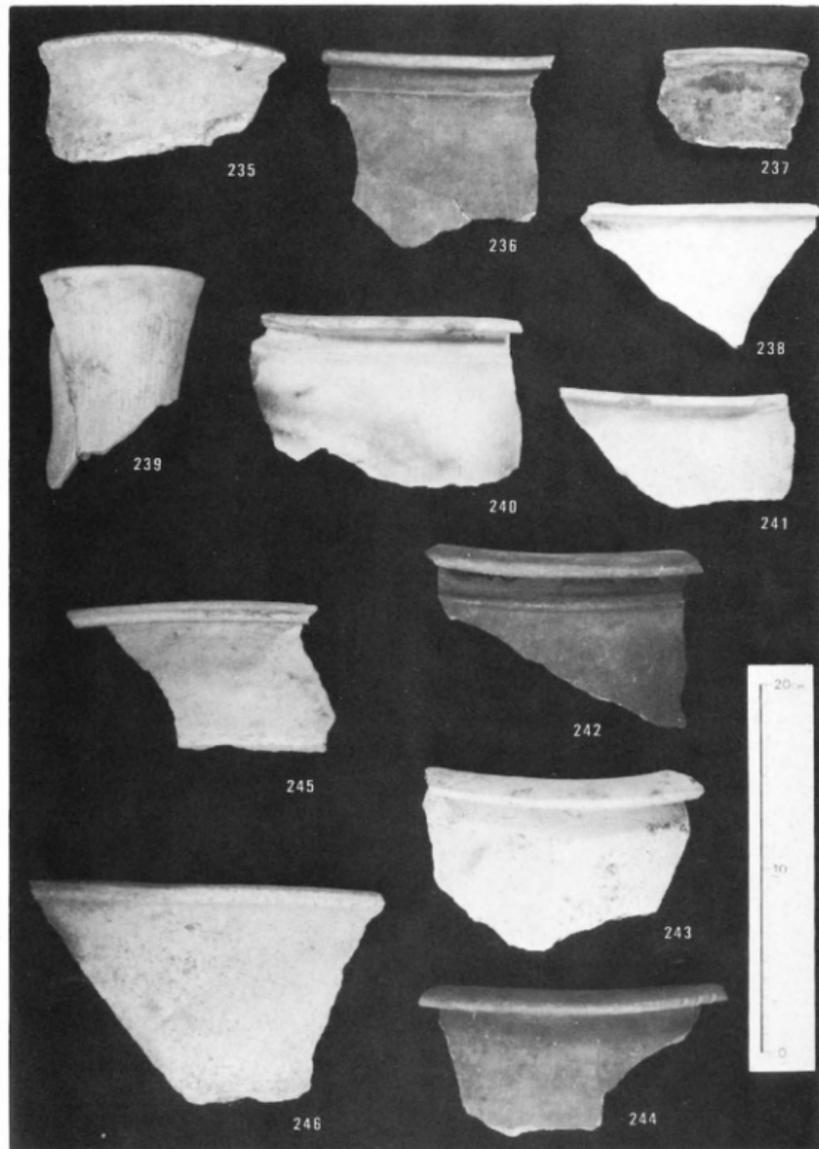
W12·14区出土土器 (1/3) W12 (194~203), W14 (204~216)



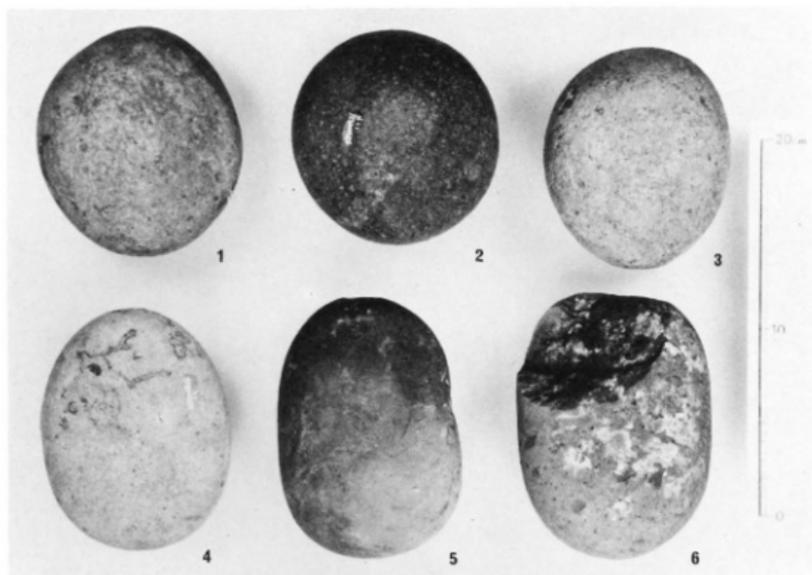
W10・12・16区出土土器 (1/2)  
 W10 (217~222), W12 (223・224), W16 (225)

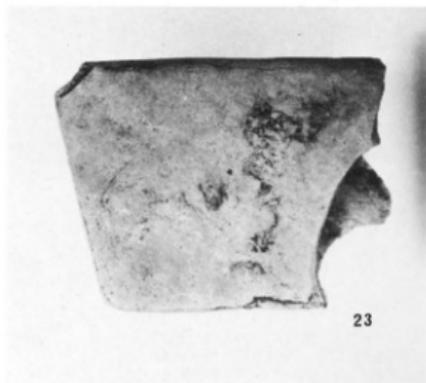
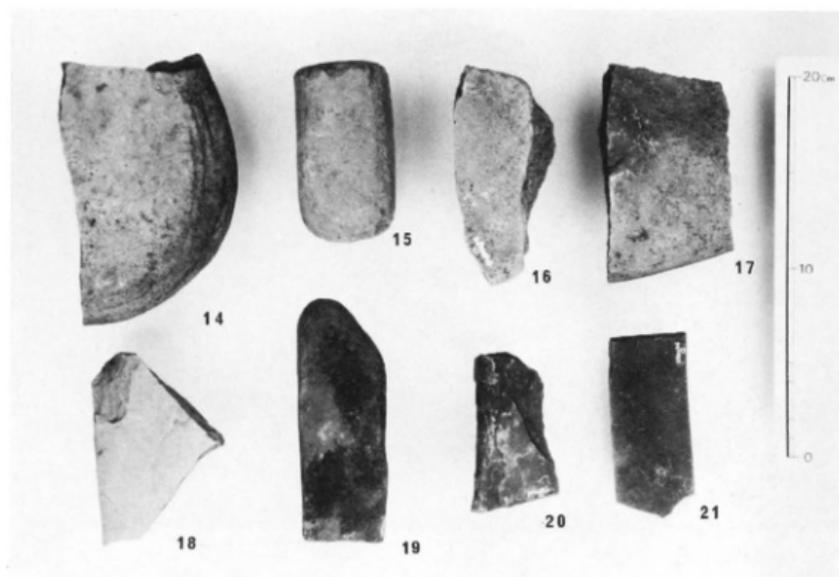


W15区出土土器 (1/3)

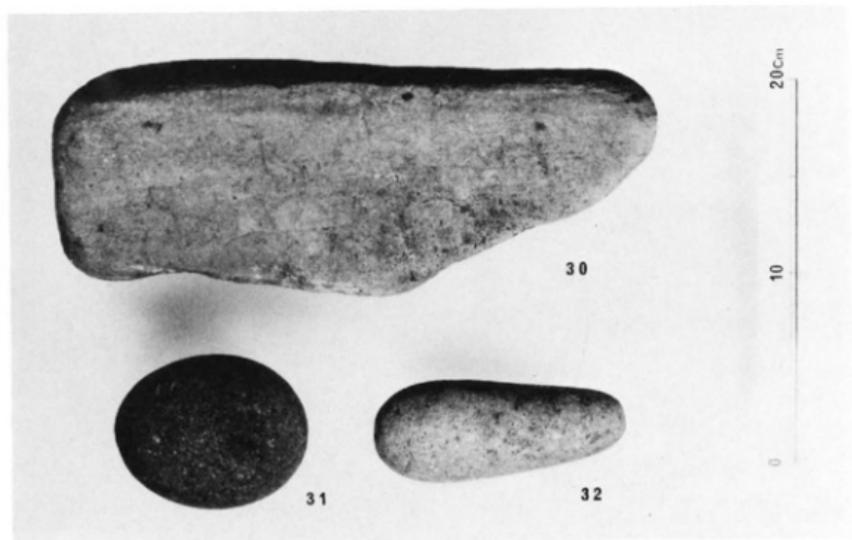
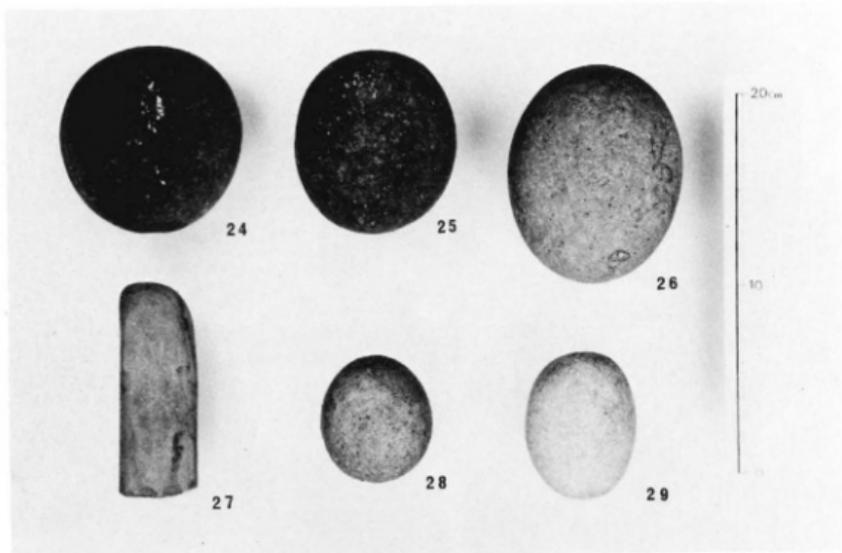


W16区出土土器 (1/3)





W 4 区58年度出土石器 (22・23は1/4, 他は1/3)





33



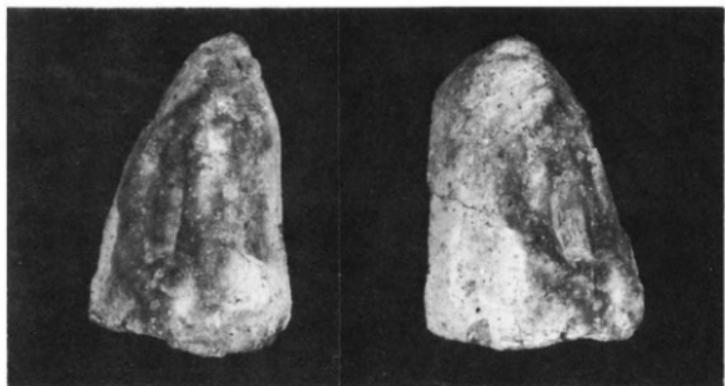
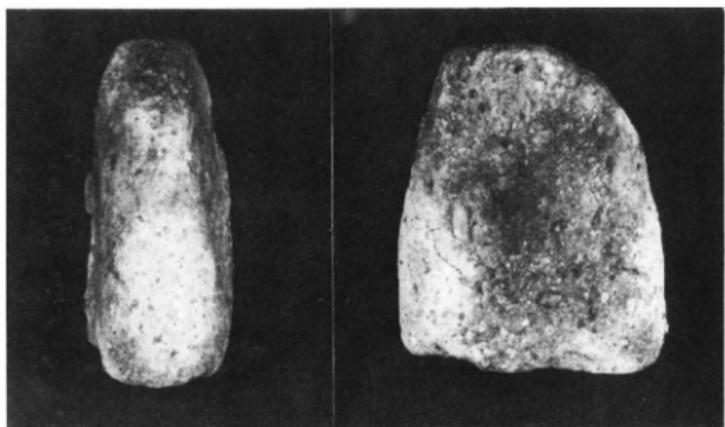
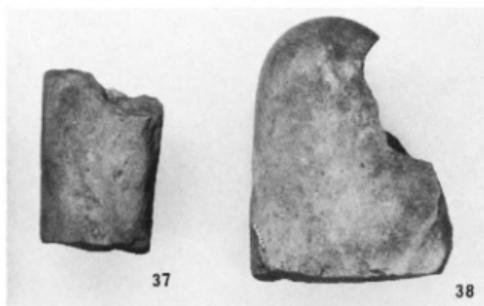
34



35



36



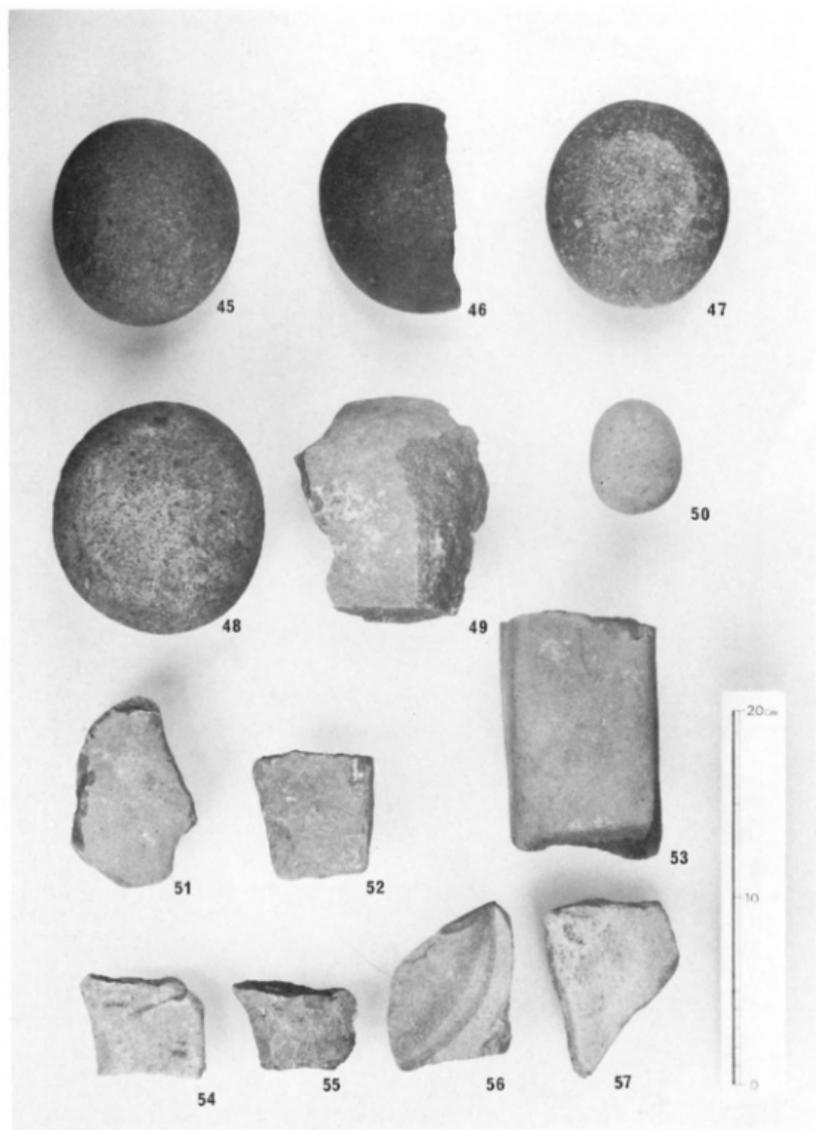
W 4 区59年度出土石器 (1/4)

39

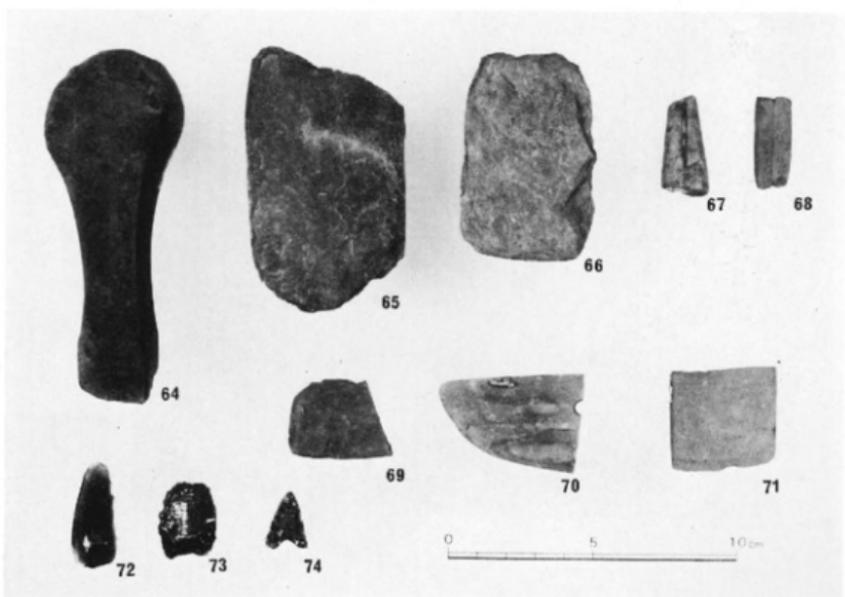
40



W5·6区出土石器 (1/4) W5 (41), W6 (42~44)



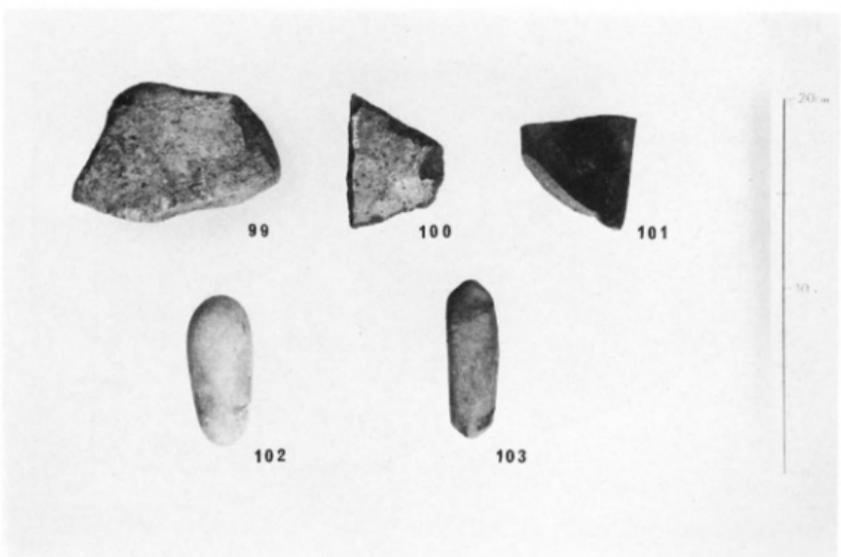
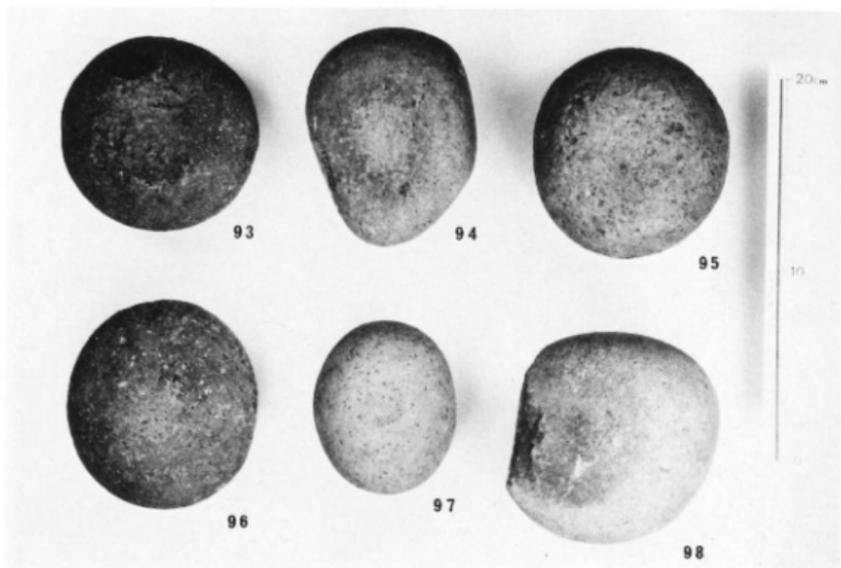
W 6 区出土石器 (1/3)

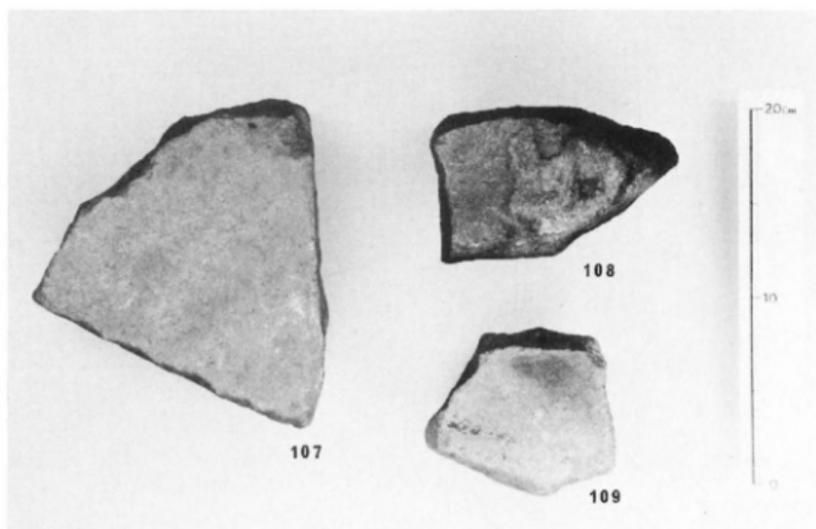
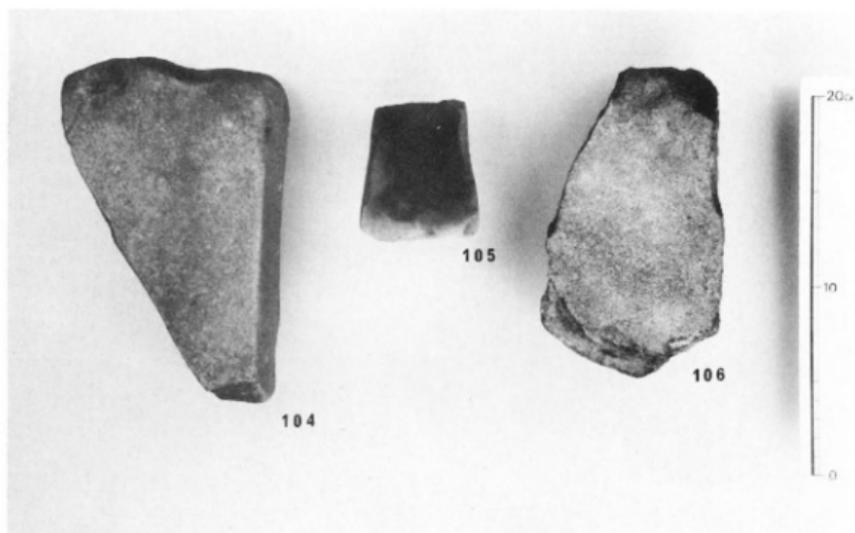


W 7・10区出土石器 (59~64は1/3, 他は1/2) W 7 (58~63), W10 (64~74)

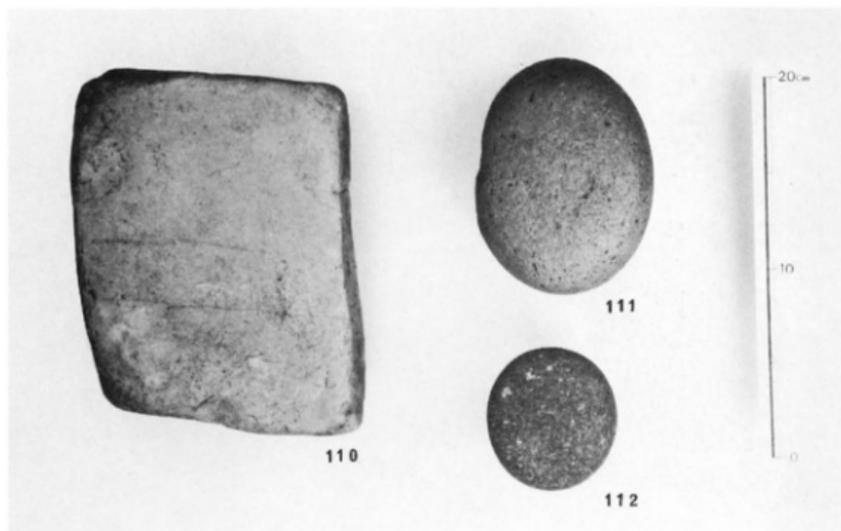


W10区58年度出土石器 (1/3)

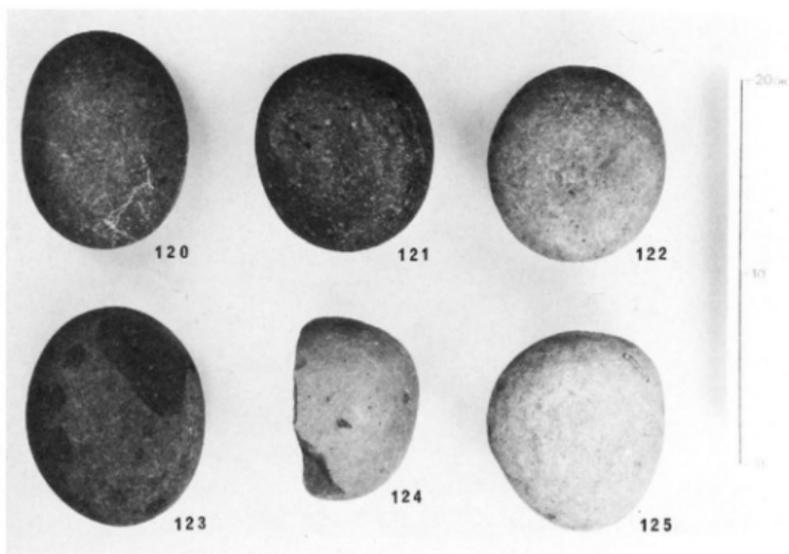
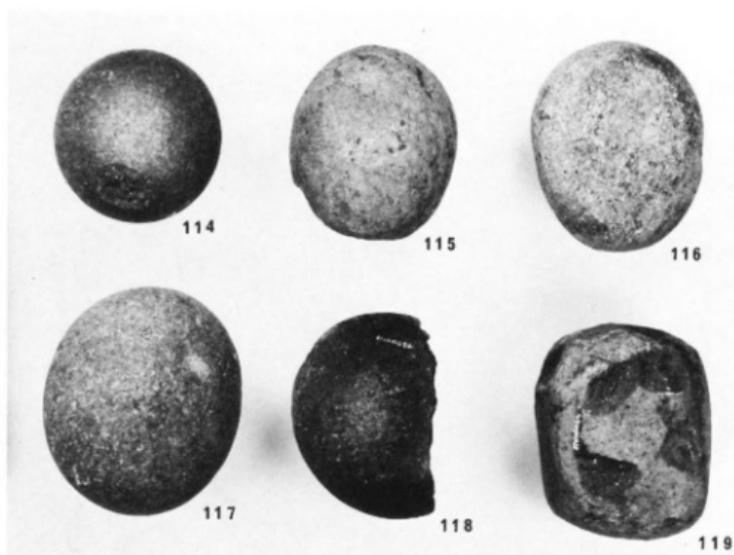




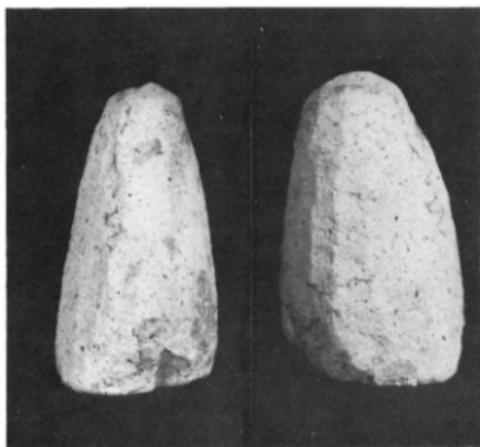
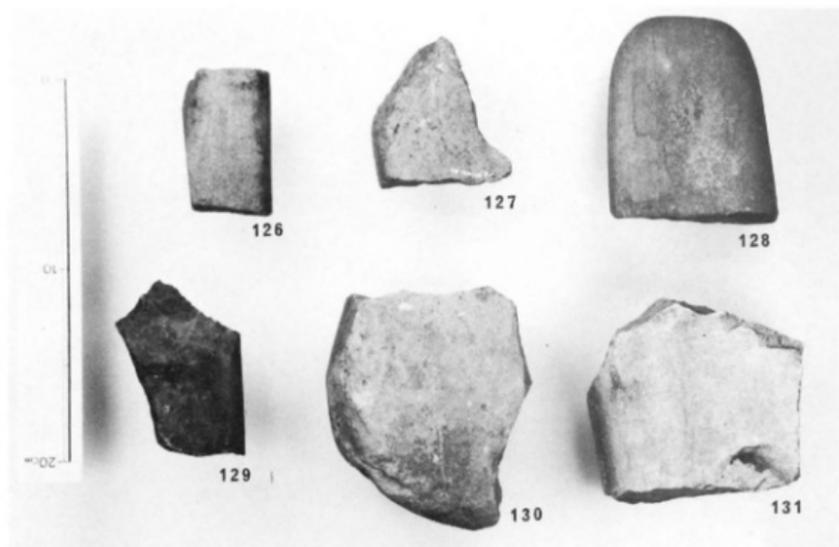
W10区出土石器 (1/3)



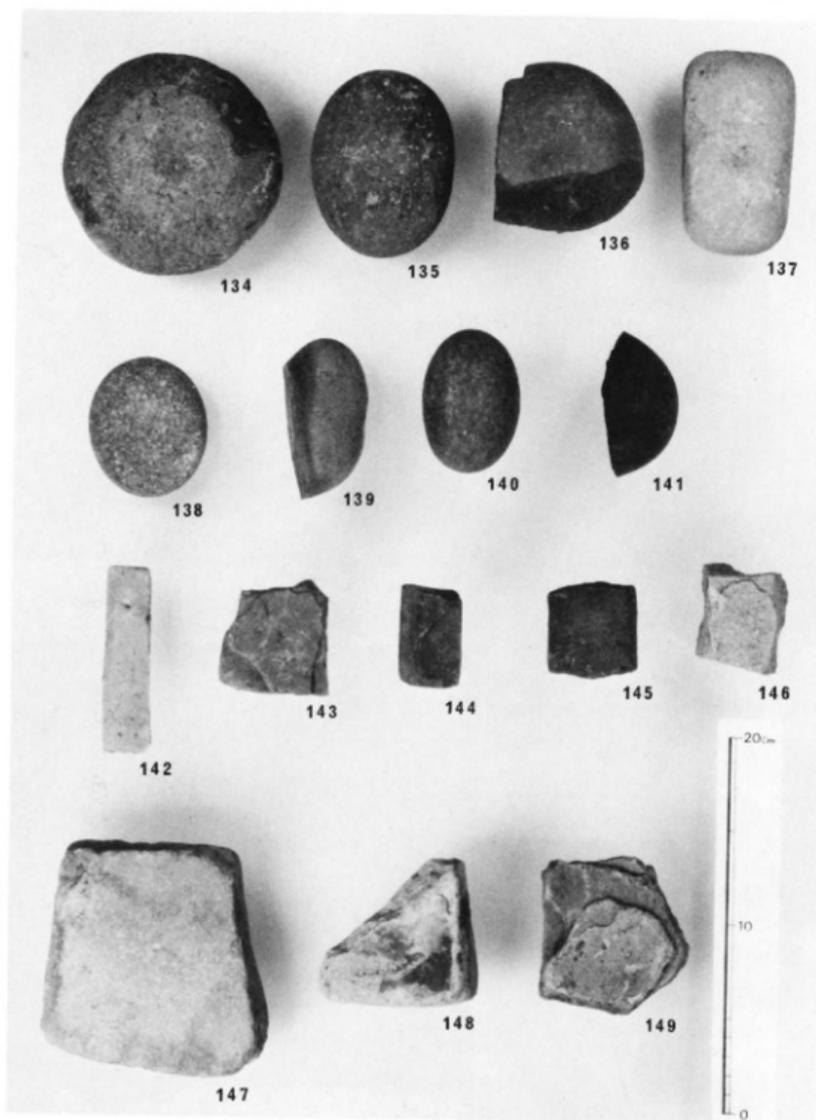
W10区出土石器 (113は1/4, 他は1/3)



W10区方形土坑出土石器 (1/3)



W10区方形土塊出土石器 (132・133は1/4, 他は1/3)



W12·14区出土石器 (1/3)



150



151



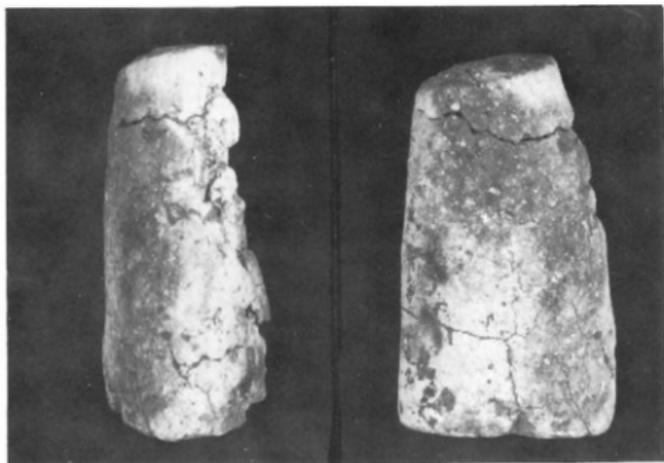
152



153

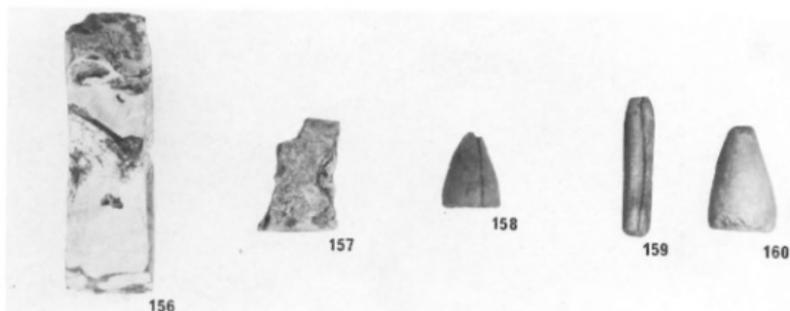


154



155

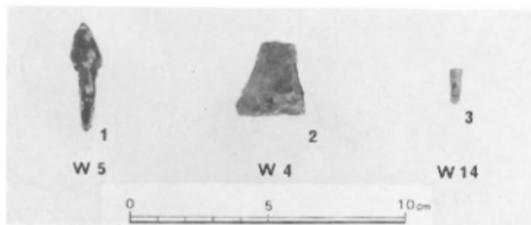
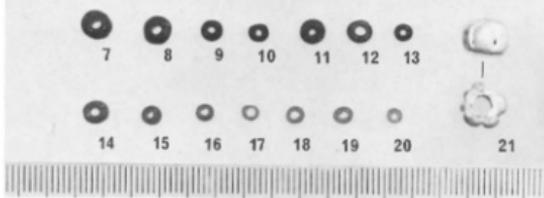
W12・15・16区出土石器 (150・151・155は1/4, 他は1/3)  
 W12 (150・151), W15 (154・155), W16 (152・153)



W10

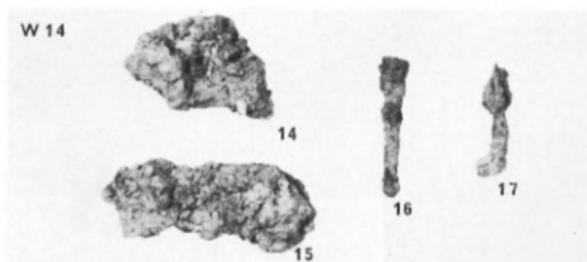
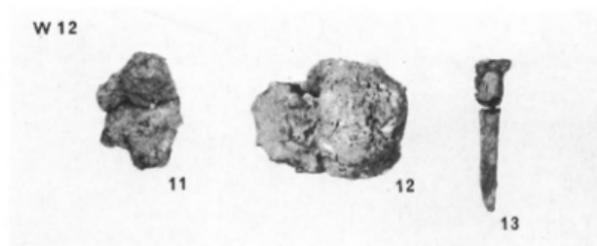
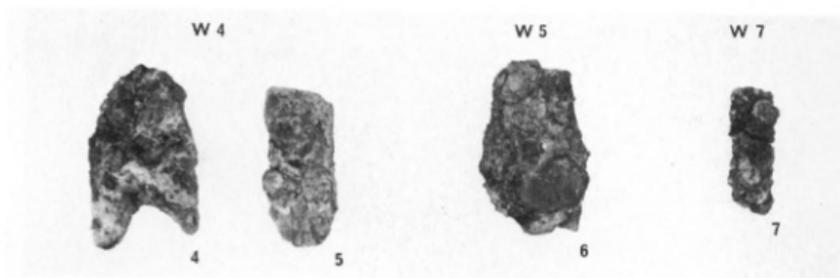


W10

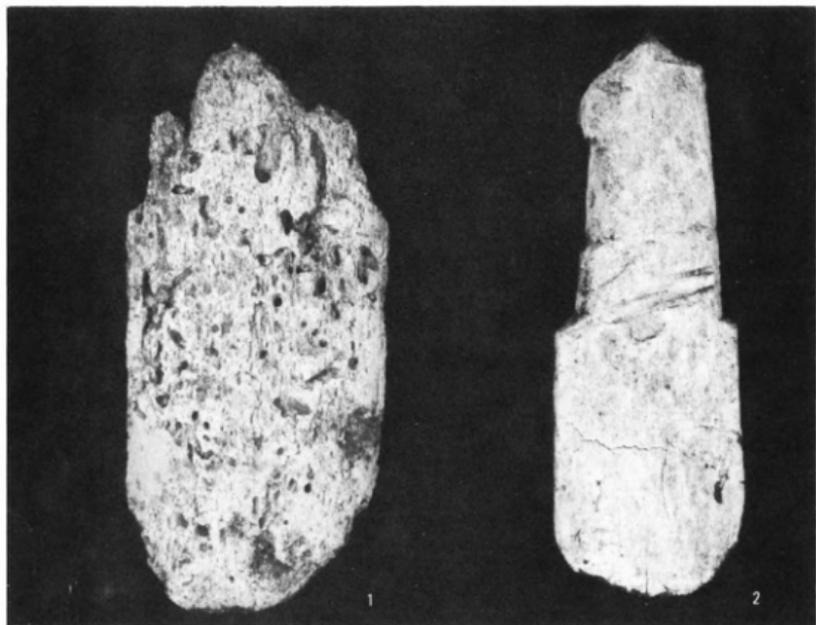


川久保 (W) 地区出土遺物 (7~21は1/1, 他は1/2)

W12 (157), W14 (158), W15 (159・160) W16 (156)



川久保 (W) 地区出土鉄器 (1/2)



W 4 区59年度出土鲸骨製品 (1/2)



W 5 区出土骨角器 (1/1)



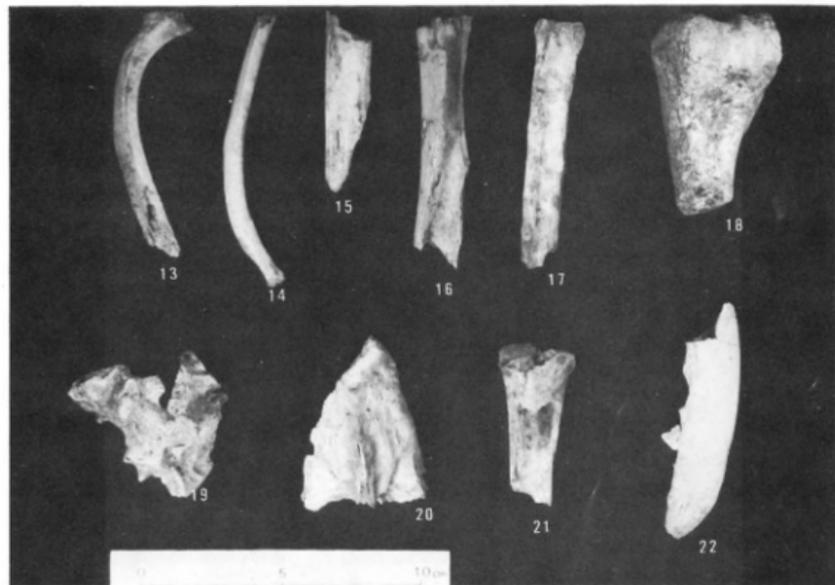
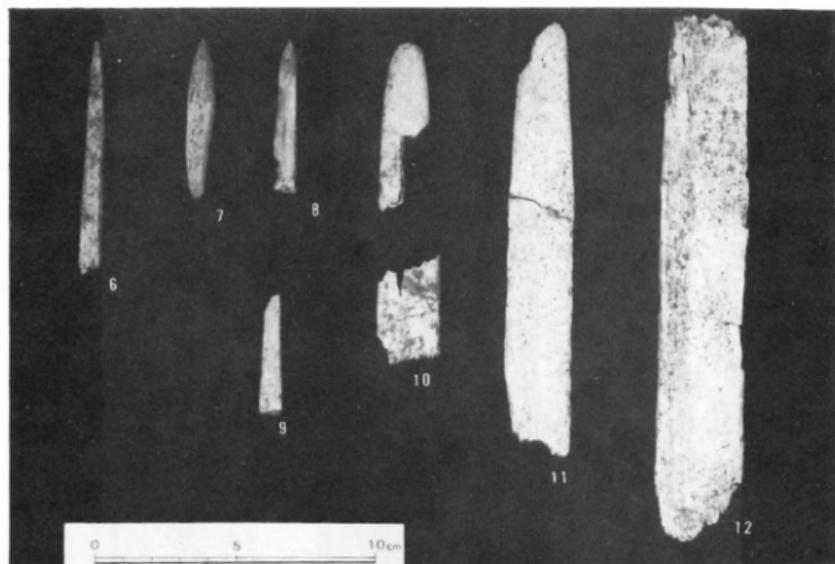
W10区方形土壤出土感状制品 (1/2)

背

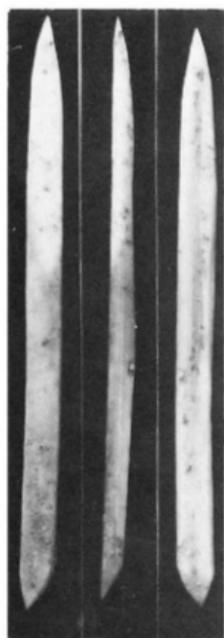
腹



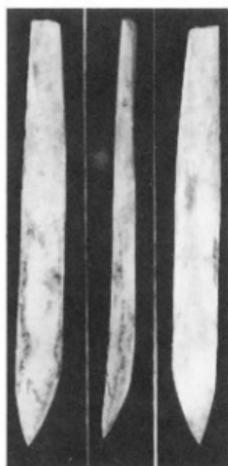
W15区出土骨 (1/2)



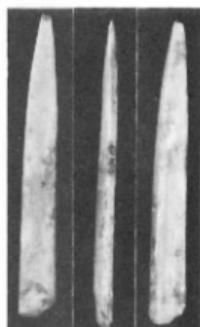
W15区出土骨角器および獣魚骨 (1/2)



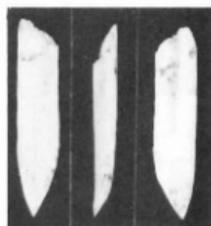
1



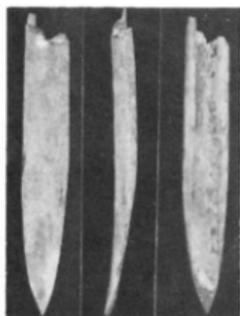
2



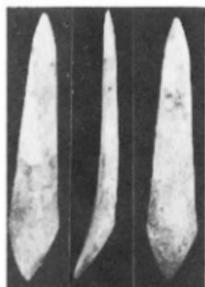
3



4



5

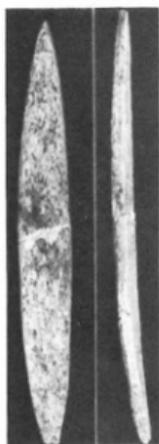


6

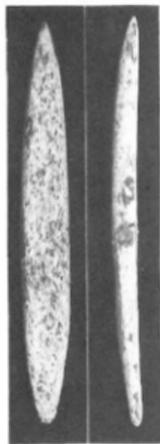


7

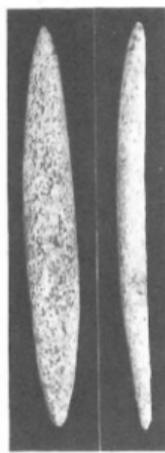
香岐カラカミ遺跡出土の骨角器① (福田敏氏資料)



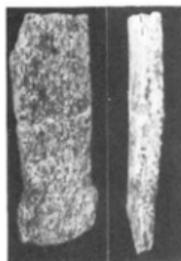
8



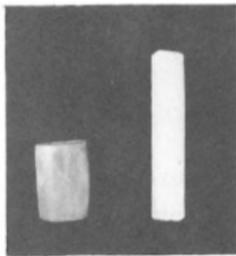
9



10



11



12



巻城カラカミ遺跡出土の骨角器② (福田敏氏資料)

## 編集後記

「カラカミ」・「唐神」・「香良加美」、遺跡や地名の表記についてはさまざまである。現在の小字名としては「唐神」が用いられているが比較的新しい表記のようで、遺跡の中心になっている神社名は「香良加美」が用いられている。

「唐神」は外来系遺物の多く出土する地域の名称としてふさわしく、宍岐の人々が古来漠然と描いてきた中国や朝鮮半島への憧憬があらわれているように思える。神社名の「香良加美」は宍州の人々の敬虔な思いが文字をあてるに至ったものであろうか。

宍岐は対馬とともにト骨のもっとも多く出土している地域であり、下つてはト部のいた島である。本報の調査によって出土したト骨・青銅器・多くの丹塗りの土器と器台・完形土器についた意図的と思える微細な損傷は、カラカミ神社のある高台の地と無関係とは思えない。

一方、カラカミの地の南、刈田院川の流域は宍岐島の西岸にむけてひろけた地であるが、「かつて海であった」という口碑が根強い。弥生時代の海水面を考慮しても、刈田院新田干拓地の最奥部に標高5m以上を計り、海であった可能性は低い。断崖の多い宍岐島西岸域で刈田院川下流域が数少ない上昇可能地であることは疑えない。1019年の刀伊（女真）や元軍の宍岐来寇に際しても刈田院川流域から侵入したといわれる。

対馬島→宍岐島と連なる「倭人伝」の道の行程で片苗灣→刈田院川という行程があったとするのは想像にすぎないが、宍岐島東部における原の辻遺跡の地とともに弥生時代における宍岐島の要衝であったことは事実であろう。

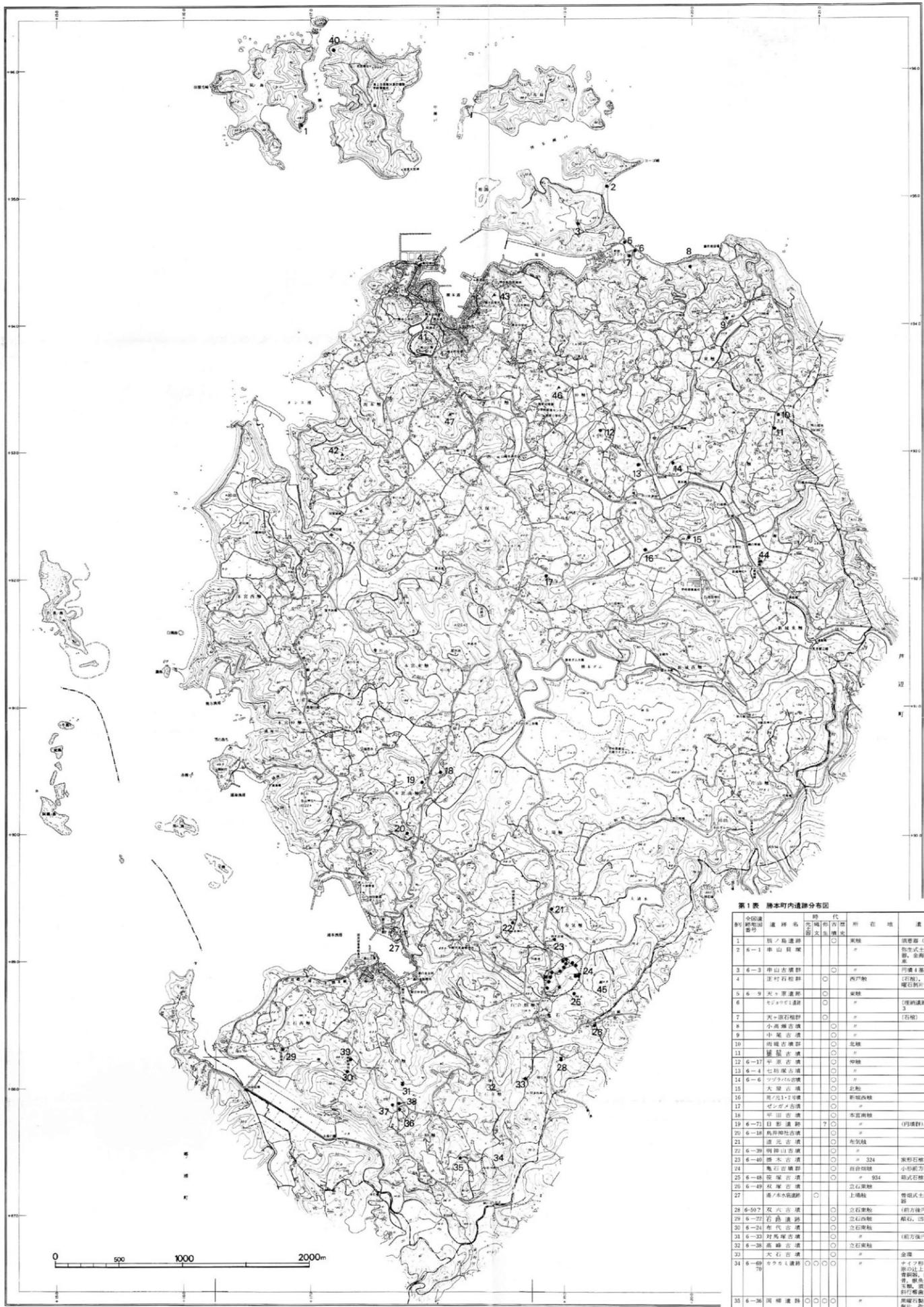
本報は整理期間不足のため図録のごとき体裁となったことは遺憾であり、近い将来において本報告を公開し、学評にこたえるものとする。そのことが、調査に際して多大の協力を惜しまれなかった関係者の方々に報いることとなろう。また遺跡の取扱については、今後町当局を中心に検討が開始されるが、できるだけ早期に具体策を出していただくことを祈ってあとがきとする。（江 林）

# カラカミ遺跡

昭和60年3月30日

発行所 勝本町教育委員会  
長崎県佐賀郡勝本町勝本池211番地3

印刷所 昭和堂印刷  
長崎県諫早市長野町1007



第1表 勝本町内遺跡分布図

別添図1 全国調査 番号	遺跡名	時代	所在	遺構・遺物
1	別添図1	縄文	東麓	環状溝(南中山)
2	6-1 串山貝塚	縄文	〃	弥生式土器(?)、土器類、須恵器類、金銅式土器、陶質土器、鉄器類
3	6-3 串山古墳群	古墳	〃	円墳4基
4	正村石棺群	古墳	西戸殿	(石棺)、石鏡、石鏡、黒曜石製
5	6-9 天ヶ原遺跡	古墳	東麓	〃
6	モリノケ1遺跡	古墳	〃	(埋納遺跡)石棺の下から中世銅器
7	天ヶ原石棺群	古墳	〃	(石棺)
8	小高塚古墳	古墳	〃	〃
9	中尾古墳	古墳	〃	〃
10	南塚古墳群	古墳	〃	北麓
11	藤原古墳	古墳	〃	〃
12	6-17 平塚古墳	古墳	〃	円墳
13	6-4 七枝塚古墳	古墳	〃	〃
14	6-6 ツツラ古墳	古墳	〃	〃
15	大塚古墳	古墳	〃	北麓
16	尾ノ上1号墳	古墳	〃	新塚西麓
17	ゼンガ古墳	古墳	〃	〃
18	平塚古墳	古墳	〃	〃
19	6-71 日影遺跡	古墳	〃	本宮南麓
20	6-18 鳥居岡古墳	古墳	〃	(円墳群)、(支石墓?)
21	道元古墳	古墳	〃	布取麓
22	6-39 明神山古墳	古墳	〃	〃
23	6-40 藤木古墳	古墳	〃	324 美砂石棺
24	亀石古墳群	古墳	〃	自由地
25	6-48 笠原古墳	古墳	〃	324 美砂石棺
26	6-49 杖塚古墳	古墳	〃	立石南麓
27	尾ノ上2号墳	古墳	〃	上塚
28	6-50? 穴ノ古墳	古墳	〃	立石南麓
29	6-22 若湯遺跡	古墳	〃	立石西麓
30	6-24 布代古墳	古墳	〃	立石南麓
31	6-33 好馬塚古墳	古墳	〃	〃
32	6-38 藤原古墳	古墳	〃	立石東麓
33	天ヶ原古墳	古墳	〃	〃
34	6-69 天ヶ原遺跡	古墳	〃	〃
35	6-36 同塚遺跡	古墳	〃	〃
36	6-29 野宮古墳	古墳	〃	立石南麓
37	6-28 本宮古墳	古墳	〃	立石南麓
38	6-30 既合古墳	古墳	〃	〃
39	熊野神社遺跡	古墳	〃	〃
40	若谷石棺群	古墳	〃	南麓(若谷)
41	藤本城址	古墳	〃	既本城址(遺跡)
42	加賀城址	古墳	〃	1728地
43	本宮城址	古墳	〃	西戸殿
44	文木の原	古墳	〃	新塚東麓137
45	6-53 尾ノ上	古墳	〃	百合塚東麓
46	6-5 尾ノ上	古墳	〃	西戸殿1729地
47	尾ノ上	古墳	〃	大穴南麓1728地

別添図1 勝本町内遺跡(古墳時代以前)分布図(+の範囲は、別添図2の範囲を示す)

